

鈴木栄・鈴木喜代子

生きよ

わが子たち

二人の重度心障児とともに

目次

第一部

パパとママの詩

序章―風と砂

願望

手紙

対話

お正月

青い鳥の歌

夏休み

わが子の幸せのために

他人の関係

ゴキブリ

第二部

不毛の荒野から

親の会懐戦記

不毛の荒野から

心の旅路

銀色のはるかな道

あけぼの

土地探し

薄光会誕生

夢、消えて流れる

捨てる神あらば、ひろつ神も

第三部

銀色のはるかな道

あとがき

第一部

パパとママの詩

序章

風と砂

マー君は、十五才。
お話相手は、……風……。
ヨ一子ちゃんは、十二才。
お友達は、……砂……。

マー君の手は、いつも口。
話す言葉は、「あーあー。」
ヨ一子ちゃんの手は、いつも耳。
出す声は、「いーいー。」

マー君は、台風のようにだつたけど、
いまは、春風のように、おだやかで、
ヨ一子ちゃんは、冬山のように、誰も寄せつけなかったのに、
いまは、お花畑のように、愛らしい。

昭和五十二年、一月。
おまえ達の、幸せをさがして、
パパとママの詩を、書き始めました。
あつい血潮が、胸の中で、やさしくさわいでます。
おまえ達への愛の片道切符を、この手に、しっかりとつかんで、一生懸命、
生きて行くつもりです。

幼稚園の、入園を、断わられ、
学校の、入学を、あきらめ、
病院や施設の、入所を待たされた、
暗い、悲しい、十余年。
泣いて、泣いて、涙も枯れてしまったのか、いまは、パパもママも、笑っ
て生きています。
つとめて、明るく、暮らしています。
いつか、マー君のお友達の、風のように、さわやかに、
いつか、ヨ一子ちゃんのお友達の、砂のように、軽やかに、

いっしょに、遊ぶことが、出来るように、その日が、来るのを、パパと、ママは、夢の中で、待っているのです。

願望

二人の子供達が、病院から病院へと渡り歩いてきた頃、先生方はいろんな診断名を付けて下さった。

唾かも知れない。言語障害ですね。耳が聞こえないのかも知れないから、耳鼻科で一度見てもらって下さい。精神分裂です。情緒障害です。母親の愛情に問題があります。自閉症です。……

そして、今は、自閉性重度精薄ということになっている。

お医者さんは、診てくれたあと、なかなか病名を言わず、何回目かの診察のあと、適当な(?)病名を付けて、他の病院へ行くよう、勧めるほうが多かった。

私達は、初めの頃、病名を知りたくて、とても悩んでいたが、正直言って、これだけいろいろ

な病名を、二人の子供達のそれぞれに与えられると、もう病名に関心がなくなってしまうのであった。

「いったい、治るのか? 治らないのか?」と、どなりたくなったりときもあったが、もう、遠い昔のことである。

あの頃の、パパとママはとってもつらい、心の病いの日々であった。

大学病院の待合室や研究所の廊下で、不安な気持ちで、診察を待ちながら「治ってくれ、頼むから治ってくれ。おまえ達が、治るためなら、この体と取り替えてあげたい」と心の中で、泣き叫んでいたのである。

あるときは、もう治らないとあきらめ、あるときは、いや待てよ、ひょっとしたら口が利けるくらいには治るかも、と、思ったりしたのである。そして、今は、完全にあきらめの心境になっているのである。

しかし、親として、一つだけ、望んでいることがある。それは、子供との対話がなくても、心と心が通じ合い、親らしく、子供達に、思いっきり甘えられてみたいという、願望である。

だから、たまに、子供が笑ったり、目と目が合ったりすると、パパもママも、うれしさと、胸がいっぱいになるのである。

動く植物人間。これが、わが子達の姿を、一言で表わした言葉なのである。

(一一)

マー君のよだれは、ひどい。
一日中、流れっぱなし。

だから、シャツも、上着も、びしょぬれ。
背中に、よだれ拭きをぶら下げて、
ひょこ、ひょこ、施設の中をさまよい歩く。

マー君は、いつも手で歯をたたく。
寝てる時も、起きて歩いてるときも、
こつこつと、歯をたたく。

「よだれと、歯たたき、治らないかなあ。」

ヨー子ちゃんは、耳を押えるくせがある。
「いーいー」と声を出す。

うれしいときと、いやなときの合図だ。
パパが「いーいー」とまねすると、
すぐ、止めてしまう。

ヨー子ちゃんの毛抜きは、ひどい。
自分の頭の毛を、やたらと引っ張る。

おかげで、頭のとっぺんが、少し禿げて来た。
「耳押えと、毛抜き、止めてくれないかなあ。」

(一二)

パパもママも、夢を見ると、朝の食事のときに、夢の話をする。

「パパ、夢を見たの。」
「何の夢？」

「あのね、みんなで、南の暖かい島で、暮らしたの。それでね、マー君と
ヨー子ちゃん、喜んじゃってさ、バナナが、二人とも好きでしょう。もう
毎日バナナを食べて、お花がいっぱい咲いていて、第一、お話出来なくて
も、ちつとも、子供達、不自由でなくて、みんな目だけで、気持が通じち
やうの。親切な島の人達が、たくさんいて、とても良くしてくれるのよ。」
「南の島があ！のどかで、いいだろうなあ！」

まったく、二人の親には、子供といっしょに生きて行くための、闘いの
暮らしてあって、のどかなことなど、夢でしか味わえないのである。

幸せは、苦しみと悲しみの隣り合わせに、ちよっぴり味わう、高貴な薬みたいなもので、十余年が、息つく間もないうちに過ぎて行った感じである。
胸に、手を当ててみると、マー君やヨー子ちゃんが生まれたときの感動を、今もいくらかは、心の中に残している。そして、あの時の望みを未だに覚えていて。

初めて歩いたときのこと、笑っていたかわいいた顔も、泣いていたかわいいた顔も、そして、片言だけど、言葉をおぼえてくれたマー君と、最初から言葉を発しなかったヨー子ちゃんが、同時に、医老にかかり出したときのこと！

パパとママの胸の中に、次第に病状が悪くなるおまえ達と共に生きて来た、すべての日々が、途切れ途切れではあるが、しっかりと息づいているのである。

一生懸命、闘って生き抜いて来た、四人の人生の歴史を、いま、ここに記しながら、明日の幸せを、さがし求めているのである！

治ってもらいたかった長い年月の、二人の子供達への願望を、あらためて書き表わしながら、愛と幸せへの願望に変えていこうとしている、パパとママの記録なのである。

(四)

一度でいいから、よその親達のように、
「あぶないから、気を付けて」と言いながら学校へ送り出してあげたかった。

自転車を買ってあげたかった。

「勉強なさい」と、言ってみたかった。

机も、帽子も、学生服も、ランドセルも、何も買ってあげることがなく、

次々と過ぎて行った、入学の春の日は、

パパとママの、胸の中に、痛みを残して、

悲しい、きずあとになっている。

あきらめきれなくて、

長い夜を、

泣き泣き過ごして来た、ママ。

嵐が通り過ぎるのを待つように、

じーっと、

こらえて来た、パパ。

風のそぶりにも、雨の音にも、

そおーっと、
のぞいて見た、
いとしい、おまえ達の寝顔。

「神様、この子達を、治して下さい。」

「お願いです。お願いします。」
涙をいっばい目にためて、
手をあわせていた、ママ。
こぶしをにぎりしめて、
空をにらんでいた、パパ。

いっしょにいるときも、
はなれて暮らするときも、
いつも、心のかたすみに、
ぼっかり、あいてるきずの穴。
そして、たまに、その穴から、
止めどもなく、あふれ出る、嗚咽。

手紙

マー君は千葉県柏市豊四季にある社会福祉法人柏光会豊四季光風園という精神薄弱児児童施設に入園している。園児は五十人いて、パパは去年までその親の会「抱擁会」の会長を三年続けてやってきたが、いまはほかの方にゆずって、成人施設を作るために県下の他の施設の子供達の親にも呼びかけて「薄光会」を別に組織し、この会の事務長を引き受けている。ヨ一子ちゃんも千葉市千葉市立病院、児童精神神経科に入院している。入院児はいつも二十人位である。パパはここでも、毎年、この親の会の役員や副会長を引き受けて出しゃばっている。いまは古顔で相談役というボスの座におさまっている。この病院のほうでは、ママがもつと活躍している。この病院の子供達のお小遣いの管理は、ママの役である。親の会計の仕事は、日用品の差し入れから、売店の一人一人のつけの清算、洗濯の支払いを全部個人別に清算し、おやつや支給にまで心くばっているのである。毎月、親達から集金し、それぞれの業者に支払いをし、各児童個人別の帳簿を整理することは、まるで小さな会社の経理なみの仕事であるが、だまって五年も続けてやってきた。

毎月第四日曜日は、マー君の施設の面会日である。親の会の日でもある。「今度の面会日は、いつだろつか？」と、十日も前から、私達はかぞえて

いる。

ヨー子ちゃんに比べると、もつともつと症状が重い、マー君である。動物的、いや植物的かも知れないマー君であるが、そんなこと、いつこつに気にしない私達である。

わが子に会う日を、一日一日と、数えながら生きている。そして、会うと、もつ次に会う日を、また数えているのである。

大げさに言えば、私達にとつて、施設にあずけてあるマー君に会うことは、この世を生き抜いて行くための活力の源泉なのである。

*

マー君に、会える日、

ママは、病気で起きられない。

月に、たった一度の面会日。

指折り数えて、待っていたのに、

かわいそうなママ、どうしても、起きられない。

仕方なしに、寝床で書く、マー君への手紙。

どうせ見せても、読めない手紙。

どうせ読んでも、わからない手紙。

エンピツ、なめなめ、書いている。

「行きたいなあー」と、ママ。

「無理だよ、今日は休めよ」と、パパ。

*

マー君、ごめんね。ママ、きょうは、具合が悪くて、行けないの。せつかく、ゆびおりかぞえて待っていたのにとつと、とてもあきらめきれなくて、パパに連れて行って下さいと言って、おこられたの。ほんとうに、ごめんなさいね。

そのかわり、あなたの好きなバナナとチョコを、パパに持って行っていただくから、食べさせてもらってね。

手紙を書いても、あなたが読めるわけではないけど、こうして寝ていると、考えることは、きょう会えるはずだったあなたのことばかりで、じつとじていることが出来ないの。またパパに叱られることを承知で、こうして、手紙を書いています。

あなたが小さい頃、パパと二人で、あなたが大きくなったら、どんな職業をえらぶかお話したことが、何度もあるの……。そんなとき、いつもパパは、お医者さんで、ママは、学校の先生でした。

でも、マー君は、先生とお医者さんに、お世話になってばかりいるのね……。

悲しいなあーと、思ったこともあるけど、近頃は平気になりました。

ママねー、ときどき夢の中で、あなたと、たくさんお話するの。学校のこと、お友達のこと、スポーツのこと、それから、もうガールフレンドがいてもよい頃だと思ったりして、女の子のお友達のことも、次から次へと、何不自由なくお話が出来て、夢がさめても、とっても幸せです。

また、きょうも夢の中でお会いしようね。このあいだ、ヨー子ちゃんが帰って来て、三人で、九十九里の海に行つて来ました。冬の海は誰もいなくて、砂を相手に、ヨー子ちゃんと思いつき遊んで来ました。とっても楽しそうでした。マー君も、こんどいつしよに行きましようね。

ヨー子ちゃんは近い所で、いつでも会えるし、それに毎週のようにおうちに帰つて来るから、それほどでもないけど、あなたには、月に一度しか行つてあげることが出来ず、もっと施設に行つてあげたいのですけど、遠くて、なかなか行けません。

それも、パパといつしよの車でなければ、とつてい無理なのよ。だから、きょうは、とても行き良かったの。でも仕方ないわね。

けがをしても、痛いと言えないあなたが、先月、会いに行つたとき、お尻にやけどをしましたね。

きつと、寒いので、ストープに寄っていて、お友達に押されたのでしようね。

パパが、かわいそうだ、かわいそうだと言つて、お薬をもらつてつけてましたけど、もう治つたでしょうね。

寒い毎日です。はだして運動場に飛び出したり、おなかを出して、ひえておりませんか？夜中に飛び起きて、お友達にめいわくをかけておりませんか？

はなれて暮らしていると、ちよつとしたことが心配で、食事も、のどを通らなくなることがたびたびあるのです。

とても寒い夜などは、あなたが、えびのように丸くなって、おひざをかかえて、横になっている姿を想像すると、もう、涙がとめどもなくあふれて来て、ねむれなくなり、飛んで行って、抱きしめてあげたくなのです。そんなとき、パパにいつも心配をかけています。

きょう、パパに会ったら、笑顔を見せてあげて下さいね。パパは、あなたの笑顔を見ると、生きる勇気が出ると言っております。パパをよるこばせてあげて下さいね。パパは、「マー君、どうしてるかなあ」と、いつも、

あなたのことを心配しております。
 もっとたくさん書きたいのですが、きょうは、このくらいにしておきます。病氣しないよう、けがをしないよう、先生の言うことをよく聞くよう、お友達と仲良くするよう、祈っております。 ママより
 マー君へ

対話

(一)

子供達が、話すことが出来なくても、私達夫婦には、子供と対話をする方法が身についている。たとえば、ママとヨー子ちゃんの対話は、次のような方法で行なわれる。

「ヨー子ちゃん、おなかすいてない？」と言って、ヨー子ちゃんのおなかに耳をあてる。ヨー子ちゃんが、はらの中で「ぐうぐう」と返事をすると、ママは大急ぎで、ヨー子ちゃんの好物を用意するのである。

「パパはときどき、ヨー子ちゃんと手をつないで、部屋の中を歩きながら、「ヨー子ちゃん散歩にいこうか？」と言って、玄関の所までつれてくる。手を引いて戻ろうとすると、ヨー子ちゃんはその所に立ったまま、動こうとしない。表に行きたいときと、行きたくないときの意志を、玄関の前に立ったときに、表示するのである。行きたくないときは、さっさと部屋の中に戻ってしまう。」

テレビを見たいときは、テレビの前に座る。「ヨー子ちゃん、テレビが見たいんだね」と言って、スイッチを入れてあげると、画面が映ったとたんに、彼女の眼がキラツと光るのである。

きれいな着物を二、三枚持って、ママがヨー子ちゃんに近づくと、彼女にとつて、みおぼえのあるものや、新しいものや、そのときによっているいるのであるが、たいがい自分が着たい服に目がすいついて来る。「ヨー子ちゃん、きょうはこれを着て散歩に行くのね」と言って、ママが着せてあげると、ヨー子はともうれしそうな表情になるのである。

短い対話だけでなく、長い対話することもある。パパがヨー子ちゃんにひざまくらをさせながら、二人でレコードを聞いているときなど、パパは、とても長い昔話をしてあげたり、へたな歌をレコードに合わせてうたつてあげたりするのである。

施設のマー君のところへ行ったときのパパとマー君の対話は、次のような要領で行なわれる。

まず、誰もいない、あいた部屋に、マー君を連れて入る。そして、マー

「……………」

(一一)

ときどき子供がわが家に帰ってきていて、急に泣き出したりすると、パパもママも、大変なのである。

「ヨ一子ちゃん、どこか痛いんじゃないの？」と言って、ママが薬箱を持って、うろろる部屋の中を歩き出すと、パパが頭に手を当ててみたり、おなかをさすってみたりしながら、ヨ一子ちゃんの診察を始めるのである。

小さいときは声を出して泣いたが、いまは、ポロポロと、ただ涙をこぼすだけなので、私達夫婦は、二人ともキューツとしめつけられるような気持ちになり、いても立ってもいらなくなってしまうのである。

「ヨ一子ちゃん、お散歩したいのか？」

「……………」

「ヨ一子ちゃん、お菓子がほしいのか？」

「……………」

「ヨ一子ちゃん、頭か、おなかか、どこか痛いのか？」

いくら聞いても、答えるはずがないのに、私達は、次から次へといろいろ聞いてみながら、散歩は玄関へ、食べ物はお口へ、痛い所はさすって探す。レコードはかけてみる、テレビはつけてみる等々、あらゆることをためしていきながら、彼女が泣いた原因を探しあてるまで続けていくのである。

あるときなどは、便秘で気持悪かったことがわかるまで五時間も六時間もかかったこともあったが、原因がわかって手当が終わって、彼女が気持ちよくすやすや眠ったときなどは、二人で顔を見合わせて、涙ぐんで喜んでいるのである。

お正月

(一一)

四人で、過ごしたお正月。

パパ、毎日、衛生部長。

ママ、毎日、食品課長。

マー君、農林大臣、建設大臣兼務。

ヨ一子ちゃん、厚生大臣、環境庁長官兼務。

パパも、ママも、火事場の消防士のように忙しい。

「わが家の大臣達、人使いが荒いね」とママがこぼすと、「でもやっぱり、お正月はいいなあー」とパパが答えながら、二人で、せつせと働いているのんびりテレビを見ながら、コタツでおとそを頂くお正月なんて、ないものとおきらめている。

おしっこ、うんち、洗濯、食事、おやつ、掃除を、繰り返すうちに、一日がすぐ過ぎてしまう。

「ママ、農林大臣、どうしてる？」

「パパ、大変！便こねやつてるうー！」

「衛生部長急行。ただちに処理いたしまあーす。」

「パパ、環境庁長官は、いま何してる？」

「ママあー、早く来てくれえー、冷蔵庫の野菜を引っ張り出して、ちらかしてるぞあー。」

「食品課長、大至急出向しまあーす。」

建設大臣は、棚の上の物をかたつぱしから引きずり落とし、厚生大臣は、やたらとパンツをおしっこでよごして、そのたびに着替えをする。

農林大臣が、お風呂に入っただけだと、パパもママも大変だ。力が強くてつかると、突きこぼされてしまう。パパやママが手を引っ張ると、ときには、いやだと、しゃがみ込んでしまう。こんなときには、大臣、ここでも動かない。しまいには、ごろねを決めこむこともある。

環境庁長官の紙いじりが始まると、うち中の紙を、すべて破り、もんでしまう。部屋中、紙くずの山になっても、やらせておくことにしている。

建設大臣の高いところ好きは、小さいときから今にいたるまで続いていて、変わらない。コタツに登って、コタツからテレビへ、テレビから箆筒へ登る。登って、しゃがんでいるのに、頭が天井に届きそうで、箆筒がグラグラゆれている。

「マー君、あぶないよあー」と声をかけると、いっぺんにコタツの上に飛び降りてしまう。コタツは足が折れて、バラバラになり、大臣はびっくりして、腰を抜かして、目を白黒させている。

「パパ、これじゃあ、うちの家具は全滅だね。」

「仕方がないよ。とりあえず、また直しとくから、クギとトンカチくれよ。」

環境庁長官は、部課長達がちよつと油断したときに、植木鉢を座敷にめがけてほおり込んでしまっし、毎度、おもちゃ箱を部屋の真ん中に持ち出して、ガラガラと引っくり返して喜んでる。

建設大臣は、茶箆筒についているタオル掛けに、ズボン吊りを引っかけて、しゃにむに前進する。ズボン吊りがちぎれるか？茶箆筒が引っくり返るか？ガラガラドゥッシーンと、茶箆筒が音をたてて倒れる。

部長、飛び出して、大臣を安全地帯まで御案内する。わが家の食器は大半がおしゃか！

「パパ、とりあえず、食事は、なべとベントウ箱よ。」
「あーいいよ、平気、平気。マー君、無事で良かったね。」
「食器の割れたことより、わが子の無事がうれしくて、ママは歌を歌いながら、割れたガラスをひろっている。」
「……………もういーくつねたらお正月、
お正月には仕事休んで
マー君とヨー子ちゃんと一緒に暮らす早くこいこいお正月」

(二)

パパが用事で出かけた留守に、マー君とヨー子ちゃんをうちにおいて、ちよつと近所まで大急ぎでお買物に出たママが、何か起こらねばいいのだけど、と心配しながら帰って見ると、破れた砂糖袋を二人で取り合っていて、部屋中が真っ白になるほどばらまかれていた。
二人の子供達は、砂糖にまみれて、頭から足の先までベタベタになっていて、砂糖だらけの顔に、目だけがにこにこ笑っていた。
「うわあー、ひどいー」と一言いったきり、あと玄関に立ち止まってしまったママと、そこに帰って来たパパが、
「そおーれ、始めーっ」と、二人で掛け声をかけて大掃除を始めて、やっと始末が終わったら、部屋の中は暗い夕やみにつつまれて、大仕事に満足したのか、二人の子供達はすやすやと眠っていた。
そうつと掛けてあげた毛布の耳が、どちらかの子にかじられて、ほどけかけていて、しみついたよこれのひとつひとつに、パパとママの十余年の苦しい闘いのあとがしのばれて、「よくやって来たなあー」と、無言のうちに語りかけているようである。
忙しい一日が終わり、子供達が寝てしまうと、やっと、静かな安息が二人の親に与えられる。
タバコをうまそうに吸うパパと、にこにこほえみながらお茶をすするママ。どちらからともなくのぞく、子供達の寝顔！
「寝てると、いい顔だなあー」と、パパ。「自分の子供だから、ひいき目でそう見えるのよ」と、ママ。
でも、ママも、まんざらでもなさそうである。
他人が見れば、どうと言うこともないのに、何と、わが子であるがゆえの可愛さであろうか！
子供達と過ごした一日の疲れをいやす夜のひとときの夫婦の幸せ！
何も語らずとも、目で話す二人。
『パパ、御苦労さま、あしたもまた、お願いね。』
『ママ、御苦労さま、がんばってくれよな……………。』

*

冬の、高い青い空に、
ふたすじのジェット機の飛行雲。
地上の騒がしさなど、見向きもしないで、
ゆうゆうと、通り過ぎて行く！
あれは、マー君と、ヨー子ちゃんの姿。

人びとが、愛の砂漠で、苦しみ、さまよい、
自分の欲の重荷に、たえかねて、
うめき、もがき、苦しむさまを、
はるか眼下に見おろしながら、
高く、遠く、飛び行くジェット機。

君達二人が、飛び行くところ、
すべて青空！すべて憩いの場！
親の、小さな願いなどかまわず、
はるか彼方まで、飛び続けよ！
非行少年も、入学試験も、結婚も、
みーんな、よその国の出来事！
自分の世界を、勝手に作って、
勝手に生きる二人！

よろこびに、心、弾ませることも無く、
胸、はりさけるほどの、悲しみも無く、
歯、喰いしぼるほどの、いかりも無く、
おだやかに、単純に、生きる君達！
そんな君達が、パパも、ママも、大好きだ。

*

冬休みが、かけ足で過ぎて行こうとしていた。子供達が帰って来たら、
あれもこれもと、思っていたことが、何もしてあげられないうちに、終わ
ろうとしていた。
あまりにも忙しくて、新しい年が来たのも気が付かないほどであった。い
や、気が付かないと言うより、そちらに目を向けていられなかつたのであ
る。朝早くから夜遅くまで、子供、子供と、子供達のためにだけ、一日一
日が存在し、親達二人のことは、まるで凍り付いたように、停止されたま

まになつていた。

四人で、生き抜いたお正月は、私達にとつて、心に背負つた十字架の重みを確かめるような、生きてゐる証を見なおすような、そんなお正月であつた。

青い鳥の歌

ヨ一子ちゃんは、毎週のように、病院から帰つて来る。土曜日の午後、学校が終わると、帰宅なのだ。

そして、日曜日の夕方、病院へ連れて帰るのである。パパは、そのつど仕事を休んで、いっしょに過ごしている。

ヨ一子ちゃんは、パパがいないと、御飯を食べない。パパがいないと、紙ばかりやぶっている。パパがいないと、手足が冷えてつめたくなつて、ブルブルふるえている。パパがいないと、帰るまで、玄関に何度も何度も出て立っている。

パパがどうしても用事を断われず、仕方なしに出かけると、病気になるつしまつ。でも、病院に帰ると、みんなうそのように、元気になるのである。きつと、お友達がたくさんいて、先生や看護婦さん、保母さんがいて、にぎやかなせいなのかもしれない。

ママはときどきさつて言つ。

「ヨ一子ちゃんは、パパが病院でなければ、だめなのね。」

「ケーキも、アイスも、お菓子も、お人形も買ってあげて、きれいなおべべもこしらえて、おいしいおかずも食べさせて、ねるときはだつこまでしてあげているのに、どうしてなの？」

と、ヨ一子ちゃんに問いかけることもある。そして、パパに、ヨ一子ちゃんの心がたむいて来たのを、やきもちをやく半面、わが子に初めて目ざめ始めた親に対しての淡い愛情、いや、どちらかと言えば、男性に対しての接近かも知れないものを、目を細めて喜んでゐるのである。

パパがヨ一子ちゃんをつれて散歩に出かけるときなど、

「パパとヨ一子ちゃん、恋人同士みたい。」

「よおーっ、御兩人、うまくやれよおーっ。」

なんて、笑つて声をかけたりするのである。

ヨ一子ちゃんには、あだ名がたくさんある。みんなパパが名付け親だ。ピーピー泣くので、ピー子。

笑うときは、イー子。

マー君より小さいので、チビ。

ヨ一子だから、ヨ一カン。
おしっこをもらすから、シモーレ。
紙やぶりするから、やぶり姫。

何と呼んでも返事がないのだから、わかっているのかわからないのか、本当のところ、パパにもママにも、判断出来ない。あるときは、さあーつと反応し、あるときは、まるで知らぬ顔をきめこんでいる。

それでも、五年前、病院に入院したときと比べると、なんと明るく可愛らしくなったことだろうか！

ヨ一子ちゃんがここまで良くなった陰には、病院のみなさん方のたゆまぬ努力ももちろん作用したであろうが、この回復にいちばん大きな力となったのは、彼女の友達と、彼女自身の生命力、すなわち、ヨ一子ちゃんが与えられた集団の中で自ら生きようとした力であると、担当の矢町先生はおっしゃっている。

植物的だったヨ一子ちゃんは、パパやママと、キヤーキヤーさわいで遊ぶまでに、情緒が回復したのである。

とくに、パパに対しては、肩や背中や頭をポンポンたたいたり、胸に顔を埋めて来たり、少ししかないやぎひげをなでたりの、可愛らしいしぐさで、やたらと喜ばせてくれている。

ヨ一子ちゃんがパパと遊ぶさまは、小ねこがマリにじやれているみたいで、めがねをふっ飛ばされたり、髪の毛を引っ張られたり、鼻の穴にゆびを突っ込まれたりしながら、

「いてて、いてて、おーいてえなあー。」

と言いながら、パパは笑っているのである。そして、ますます興に乗って、ついに、

「キヤー、キヤー。」

と奇声をあげて、馬乗りになって喜んでいる。

わが子が可愛くて可愛くて、やられてもやられても、相手になっているのである。

ヨ一子ちゃんのうんちは、近頃、固くて石のようだ。トイレで息ばって、涙を浮かべてる。

パパはかわいそうだと、そばに付きつきりで、「ヨ一子ちゃん、痛いかな？痛いかな？」と言いながら、自分も「うーん、うーん」と、うなっている。ママも台所で、心配して、包丁の手を止めて、じーっと、かたずをのんでいる。

ヨ一子ちゃんがさっぱりした顔でトイレから出て来ると、親子三人が、顔を見合わせてにっこりと笑う。

「パパ、御苦労さん。大変だったね。」
「ママ、ちがうよ。御苦労さんは、ヨー子ちゃんだよ！」
「あつ、そうか！」

「こらーっ、ポリバスの底が抜けるぞおーっ」と言ってもどなっても、ヨー子ちゃんはニコニコしている。パパも、つられて、仕方なしに笑ってしまふのである。

ハーモニカをめちゃくちゃに吹きながら、パパはときどき、ヨー子ちゃんのために、しゅちやかめっちゃんかなインディアンの踊りを踊ってあげる。ヨー子ちゃんは、おかしくて、うれしくて、「キヤー、キヤー」と奇声をあげて、寄って来る。そして、しまいには、そばにしゃがみこんで、息をこらして「クッククッククック」と、笑い始める。ママもおかしくて、こるげまわって笑う。

パパは踊りながら、三面鏡をのぞいて、自分で自分の姿がおかしくなつて、おなかをかかえて笑いこぼしている。

「あー、あー、おかしかった。」

「さて、ヨー子ちゃん、病院に帰るとするか？」と、パパ。

「やれやれ、きょうも一日終わったね」と、ママ。

こうして、パパとママの青い鳥は、そのよこれていない可愛い姿を私達に一日見せて、病院に飛んで帰るのである。

夏休み

(一)

障害児のことが、新聞に出ていました。

ママが、パパに言いました。

「軽い、軽い、全然軽い。」

「うちの子達、ずーっと重い。」

「ばか、自慢になるか」と、パパ。

泣き笑いの中に、幸せをさがして、

真剣に生きる、パパとママ。

ケーキを、買っておこう。

アイスも、買っておこう。

もうすぐ、帰る！

夏休みには、二人とも、帰る！

待ち遠しくて、待ち遠しくて、

夜も寝られない、パパとママ。

息子と、キャッチボールをやってみたかったパパ。娘といつしよに、お料理を作ってみたかったママ。

「でもいいさ。」

「今は、もうあきらめたよ。」

「よその親達に、一言いつてあげるよ。」

「くやしかったら、十五才の息子に、ごはんの食べ方、教えてみる！」

「くやしかったら、十二才の娘に、おしっこの仕方、教えてみる！」

(二)

夏休みに帰ったマー君、ねかせても、またすぐ起きてしまう。

久しぶりのわが家に、興奮してうれしくて、なかなか寝つかれないらしい。

「いいさ。明日の朝までだって、つきあうぜ」と、パパは笑ってる。

去年のクリスマスに買ってあげた人形を、真黒になってもはなさないヨ
「子ちゃん。」

「いいわよ、ねんねしてから、洗ってあげるわよ」と、ママも笑ってる。

一日一日を、子供達と一緒に生きていることを確かめながら過ごす、夏
休み！

夜、子供達を寝かせて、倒れるように寝てしまう、パパとママ！

ある日の朝、マー君が先に起きて、寝巻姿のはだしのままで、脱走し
て、国道をジグザグに行ったり来たりしていた。

近所の奥さんが、ドアをドンドンとたたきながら、「鈴木さん、鈴木
さん、起きて下さいよお」と叫ぶ声に、びっくりして飛び起きてみる
と、パパの隣に寝ていたはずのマー君がいない。

「……車……事故……けが……重傷……」

頭の中に、一瞬にしてめまいを感じるような恐怖が走る。

ドアをけやぶるようにして飛び出したパパは、寝巻に、はだしだった。
「坊やが、国道……」

と言う金切り声を背中に聞きながら、足が宙を飛んでいた。車がビュン
ビュン走る広い国道の真ん中に立っているわが子を発見したとき、「動く
な！動いちゃだめだあ。」

と、パパは思わず絶叫していた。

無事にわが子の手をつかんだとき、ガタガタとひざがふるえて、胸が高
鳴り、

「ばかーっ。」

とついわが子に対して、死んでも言うまいと思っていた言葉が口をついて

出ていた。

通勤の道行く人達が振り返って見ている視線を、痛く背中に感じていた。どこでつけたのか、体じゅう泥だらけのマー君の手を引いて、歩きながら、情なさにも、目がしらがあつくなくなって来るのを、どうすることもできないパパであった。

あとから走って来たママが、青白い顔に泣きべそをかきながら、「パパとマー君、かつこ悪い。寝巻にはだしの親子連れ、よその人、笑って見てるわよ。」

と、泣き声をふるわせていうと、

「平気、平気。」

と返すパパの言葉も、ふるえていた。

(三)

最初長くて、だんだん短くて、アツと言う間に過ぎてしまった、夏休みであった。

病院に帰るヨーチちゃんを送って、親子三人で、手をつないで歩く。

……子供小さな手から、あたたかい、わが子の手のぬくもりが、胸の奥にめがけてジーンと伝わって来る。

「あの扉をあけて、廊下を進んで、運動場に出て、靴をはき替えるとき、きつとこの手を、はなすであろう。」と思いつながら、たとえよつのないさみじさと、こみあげて来る悲しさゆえの涙を、こらえている。

誰もいない夕暮れの運動場に、スズメが一羽……。きつと親にはぐれた、小スズメかも知れない。

じーっと、スズメを見ていたヨーチちゃん、急にパパを見上げた目に、大つぶの涙！

「ヨーチちゃん、バイ……バイ……」

パパもママも、声がつまって、あとが言えなかった。

生まれて十二年目に、初めて示した親への愛と、そして、どんな宝石よりも美しく澄んだ、尊い涙の一つぶが、私達の胸の中に、嵐を巻き起こしたのである。

「ああ、やつと通じた。やつと通じたのだ。私達のこの愛が、いとおいしいと思っているこの気持が、この娘に、やつと通じたのだ！」

パパは、天地がゆれているような感動をおぼえ、その場にうずくまってしまった。

親とのわかれを初めて悲しむわが子を、二人の親は、かわるがわる抱き寄せて、ほほずりをしながら、いつまでもいつまでも、身をふるわせて、泣きじゃくっていた。

(四)

夏休みが終わって、マー君とヨ一子ちゃんがいなくなったわが家は、静まり返って、きれいにかたづいている。

引き潮に洗われて行った砂浜の忘れもののように、ところどころに、子供達が残して行った壁の傷あとがある。

初秋の風がひややかに部屋の中を通り過ぎて行くのを感じながら、手持ち無沙汰に、フラフラと家の中を歩くパパ。

こんど、いつ帰って来るのかなあーと、思いながら、カレンダーに目をやる。

あけはなたれた縁側の風鈴がチリチリと泣き、空っぽの冷蔵庫の自動スイッチが入る音に、あらためて、子供達の騒々しさがなつかしい。

ガツクリして、三日も仕事を休んでしまったパパは、口ぐせのように、「さみしくなったね・さみしくなったね」と、ママに話しかけている。

わが子の幸せのために

(一)

広い野原に

いつか、広い野原に、わが子達を、つれて行ってみたい。

マー君が走る。ヨ一子ちゃんも走る。

二人とも、手を高くあげて、

口を、大きくあけて、

笑いながら、走る。

マー君は、スキップで走る。

いくら走っても、行き止まりがない。

そんな野原に、行ってみたい。

ちよつとでも、手をはなしたら、

どこでも、かまわず、飛び出してしまうわが子達。

このおそろしい交通戦争の最中だから、

虫けらのように、ひき倒されてしまうだろう。

だから、いつも手をはなせない。

いつか、広い野原に、
わが子達を、つれて行ってみたい。

子供達が、そこで、
飛びはねて、ねころんで、遊ぶさまを、
ゆっくりと、草の上に腰をおろしてみながら、
青い空に向かって、語りかけた。
「空よ！お前と、私達家族だけのこのひととき、
……やすらぎの、このひとときを、
見守って、いてくれよ」と。

通り過ぎて行く風にも、
私達が、
働いても働いても、
この広い野原にさえ、
子供達といっしょに遊べる日が、なかなか来ないことを、
愛と幸せの日の遠いことを、
伝えてあげたい。

(一一)

障害児を二人も持つ親だから、さぞかし大変だろうと、人々が私達に特別な同情を寄せたり、不幸な人と噂されることがある。
でも、ふだん、本人達は、人が思うほど自分が不幸で、どうしようもないなんて、思ってるわけではない。
ママは、子供に消化することができなかった分の愛情を、パパに向けているようだし、パパは、まるでお年寄りにするように、ママをいたわり、互いに、いつまでも若い恋人達のように、愛し合っているのである。
貧乏で仕方なくせに、たまにはアベックでお茶も飲むし、食事もするし、ちよつとはずかしいけど、十六年前の新婚のときのように、腕を組んで夜の街を散歩することもある。
お茶を飲みながら、二人だけしかわからない、楽しい思い出や悲しかった出来事など、マー君のこと、ヨ一子ちゃんのこと、通り過ぎたこと、これからのことなど、まるで糸車をまわしながら幸せの糸をたぐるかのよう、長い長いおしゃべりをする。
そして、だんだん子供がお世話になっているいまの施設や病院の話になつて、やっと終わるのである。

いつ頃からか、こうして話し合う夫婦の語らいの中に、愛のふれあいを

みつげ、本当の幸せのぎざしみたいなものをさがし出した、私達夫婦なのである。

まったく、幸せも不幸せも、隣り合わせの人生なのかも知れない。

(三)

よその親達が子供のことを話し出すと、パパもママも、いやな気分になってしまふ。たとえそれが出来の悪い子供のことであっても、同じである。やれ勉強しない、やれいたずらをする、やれ言うことを聞かない、等々としやべる親がいると、「バカヤロウ、ぜいたく言つな」と、どなりつけたくなるのである。

「障害のため、学校にも行けず、いたずらさせようにも思いつきりさせられず、こちらの言うことも通じない子供をかかえた親もいるんだぞ!」

こう言つてやりたくないのは、なぜだろつか?こんなときは、たいがい、呪文でもとなえるように、一人、頭の中で、こんなことを想いめぐらしながら、よその親達とちがう世界に自分を置くことにしている。

「うちの子供は、住んでる世界がちがう。うちの子供は、きょう一日が大切なのだ。うちの子供は、いつまでも一才児だから、うちの子供は、一方通行だから……」

他人の家庭や親子のことなど、興味がないと言つたら嘘になるが、あまりにも遠い世界にちがいないのである。

「わが子供が、まともであつたらなあー」と思つたりすると、とたんに、心の傷がぱっくり裂けて、悲しみの血が吹き出してしまふ。

他人の親子の世界と、自分達親子の世界の違いを、少しずつわが身におぼえさせながら、二人とも、心の安らぎを取り戻すよう心がけて来たのである。

「パパ、うちの子達、ハイジャッカーになる心配がなくて、良かったね。」

「そうだね、そのかわり、いつまでも、おしつこと食事の世話をしなければならぬね。」

世のあたりまえの親達が子供の成人するのを楽しみに生きて行くのを横目に見ながら、この世を生き抜いて行くことは、あまりにも、つらい、悲しいことである。

「神様!もう疲れました!だけど、出来の悪い子供は、なおさらに可愛いものですね。」

ときどき見せるママの泣き顔や、パパの目につるんだ涙が、子供達への新たな愛情の誓いとなって、四人の親子の、生きるささえになっているのである。

「パパ、この世の中で光らない星は、きっと、あの世で一番光る星になる

のでしょうね。そうとでも思わなければ、マー君やヨ一子ちゃんが、かわいそうでかわいそうで仕方ないの！」

「そうだね。うちの子達は、きっと、あの世で、光るために生まれて来たのかも知れないね。」

世の親達には、四季折々の暖かさも寒さもあつて、星達はみな、それぞれ適当な光りをはなっているが、パパやママの季節は、いつも寒い冬の季節ばかりで、星達は、石のように光りを失っているのである。

「ママ、いつまでも、四人で暖め合つて、生きて行こうね。」

「パパ、いつまでも、子供達のために、丈夫で長生きしようね。」

(四)

ヨ一子ちゃんのこと、先生と喧嘩してしまったパパ。あとで、しょんぼりしている。

「先生だつて、一生懸命なんだから、あんなこと、言つんじやなかつたなあー。」

マー君の施設の親の会で、よその親に、かみついたパパ。反省している。

「よその親も、やはり、わが子のことを思っているのだから、あんなことを言つんじやなかつたなあー。」

そこへ、追い打ちをかけるように、ママが「パパ、きょう、ちよつと言い過ぎだったようよ」なんて言おうもんなら、「ごめん、ごめん」と、もう消え入るように小さくなってしまふ。外に強くて内に弱いパパゆえに、ママも心得ていて、たまに行き過ぎのところをズバズバとやつつけるのである。

しかし、パパは、強情さでは天下第一品で、曲がつたことがきらいで、とくにクニヤクニヤ、ヘナヘナタイプの間人は大きらいである。おまけに、えらい人で頭の高い人は、もつときらいである。

だから、パパにとって敵とみなされた相手は災難である。時と場合によつては、二年も三年もかけて仇討ちをやつてのけるので、相手が面喰らつてしまつこともある。

んなパパが、また、ママは大好きで、近所でも評判のおしどり夫婦である。

タバコ屋のおばさんも八百屋のおかみさんも、あまりママが「パパ、パパ」と騒ぐので、ママを見ると、「ついひやかしたり、からかつたりする。

「奥さん、ほら、だんなさん帰つて来たよ」と言われたりすると、買物途中で、つり銭を忘れ「奥さあーん、嘘、嘘だよおー。」

「あはっは、あはっは。」

こういう具合に、毎度やられているのである。

ママは、ときどき元気がなくなることがある。

「ごはん、食べるよ。」
「食欲、全然ないの。」
「好きな果物だけでもいいから食べるよ。」
「何も欲しくないの。」
「困ったなあー。何か食べないと病気になっちゃうぞ。」
「パパ、マー君、いま頃、どうしてるかしら。何か食べているかしら？」
子供のことを考えているうちに、毎度、食欲がなくなってしまうママなのである。そして、そんなとき、必ず、パパまで下を向いて、考え込んでしまっているのである。

(五)

毎度のことであるが、どちらかの子供が家に帰って来る日は、わが家の冷蔵庫はいつぱいになり、子供が施設や病院に戻ってしまうと、空になっている。空になった冷蔵庫は、次の子供の帰省までずっと、空のままなのである。子供達がいなくときのわが家の食事は、適当で、でたらめで、冷蔵庫をあまり必要としないのである。

「パパ、お昼、何食べる？」

「あるものでいいよ。」

「インスタントラーメンしかないのだけど。」

「あーそれでいいよ。」

まあ、こんな調子である。

ママの買物が始まり、冷蔵庫の中身がいつぱいになると、わが子達のどちらかが帰って来る日であり、二人とも気もそぞろで、早く子供に会いたいのと、子供が帰って来たときの用意やら期待で心がうきうきとはずんでしまっているのである。

「パパ、あす、ヨー子ちゃん帰る日だけど、迎えに行ける？」

「あー、いいよ。仕事は休みになってるよ。」

「えーと、焼肉を焼いて、ホットケーキを作って、それからおさしみを買って、果物も買って、それから、それから、えーと。」

「おいおい、一日で、一週間分をまさか食べさせるつもりじゃないだろうな。」

子供がうちに帰って来る日は、一日だけど、とてもうれしい。いっしょにずーっと暮らせたら、もっとうれしいだろうに、と思うけど、いっしょに暮らすことが出来ない。

病気療養のことや、保護、教育、訓練のことを別にして、もし、子供達がいまわが家に帰って来て、長期にわたってこれからいっしょに暮らすとしたら、八畳と四畳半しかない借家暮らしで、庭もなく、それこそまた

病気が悪くなることは必至である。

こんなことを悩んでいるうちに、もやもやして、胸が熱くなってくる。えーい、ままよ、一日だけの幸せ、うーんと楽しく過ごそう、と思うのである。

鼻歌を歌いながら、買物から帰るママと、口笛を吹きながら、はずんでいるパパであるが、洗濯、おしっこ、うんち、ちらかし、破壊、不眠、その他いろいろ、大変なことになるのを承知で、子供達の帰るのを待っているのである。

(六)

子供達の障害だけでも大変なのに、この数年のあいだに、パパとママの身の上には、他にも大きな嵐が吹き荒れて通り過ぎて行った。

いまは借家住いのしがない身の上であるが、パパは以前は、大商社や建設機械メーカーの千葉県代理店の看板をいくつも出した、建機販売会社の社長であった。敷地百坪の立派な家を建て、当時、この家の庭の芝生の上を子供達はしゃぎまわって遊んだのがつい昨日のようである。

小さいけど一人で始めて、従業員二十人までになったこの会社が、石油シヨックでつぶれた。

負債総額七千万円！

パパが、子供達のために、将来、自分で施設を建てるんだと頑張ってきた夢の砦でもあった。

しかし、個人会社の社長の立場はとてまきびしいものであった。まるで、悪夢を見ているように、手形、手形と追いまわされて、とうとう見切りをつけたのである。子供達のために、夜逃げだけはすまいと思って、債権者に一人一人当たって整理をしていった。しまいには家財道具にまで差し押えの紙を張られ、マー君やヨ子ちゃんがねころんで遊んだ芝生の広い庭がある家も、差し押えられてしまった。

まる五年かけて築きあげた城が、崩れるのに、半年しかかからなかった。何もする気がなくて、庭の青い芝生だけを見て、あとの半年を暮らした。築きあげた信用も財産も、貯えて来たすべてのものを、債権者が寄ってたかって奪い合つようにしてむしり取って行った。

家財道具も家も、名義を書き替えられ、もともと自分のものであった他人のものを使って暮らしながら、毎日、遠い空を見て、くちびるをかんていた。

かたわらで、ママは、畳の目でも数えているかのごとく、下を見たつきり、ひっそりと息をはいて座っていた。

無一文になると、商売で出入りしていたわが友と思っていた人達が、あ

らかな背を向けてしまつて、あんなにたくさん出入りしていた人びとが、
びたりと足を止めてしまつた。

そして、もう一度新たな覚悟を決めて、新たな仕事をするため、夏のあ
る日、数少なくなつた友人の一人に手伝つてもらつて、茂原街道の旧国道
ぞいの、小さな、壁までトタンぶきのいまの借家に、やっと引越した。
生きて行くための闘いを、ここで新たに開始してから、もう三年も過ぎ
てしまつた。

毎年、春、夏、冬の子供達の長期帰省があるたびに、ママは、以前のよ
うな広い家に住みたい、庭のある家で子供達をゆつくり遊ばせてあげたい
とつぶやく。

私達の人生は、まるで、いかだに乗つて急流を押し流されて行くみたい
で、岩をかみ、ほんろうされながら流れて行く運命なのかも知れない。

個人経営の小さな会社だつたため、負債のすべてに責任を負わされ、清
算したあと、残りの数百万円をいまだに夫婦で働きながら少しずつ返済し
ているいまの暮らしが、ときどきやりきれないほどいやになるときがある。
あす、わが子が病院から帰るといふのに、おやつを買つてあげる金がな
いときもある。

はらわたがちぎれるような心の痛みを感じるそんなときは、ただもうひ
たすらに、わが子を抱きしめて、こみあげてくるものを奥歯にかみこらし
て、ひきつったほほに無理に笑みを浮かべて、ひとときを過すのである。
貧乏で、苦しくて、悲しいことばかりの私達にも、安らぎはある。そし
て、すべての安らぎの源は、子供達との、重い、熱い、愛なのである。愛
に生きられる幸せと、家族が不治の病いにかかつてしまつた不幸せが、生
活苦とからみ合つて、複雑に交差したわが家庭なのである。

(七)

北アルプスの麓の町で、
十六年前、

夢多く若き旅の男と、

この町に生まれこの町に育つた純な娘が、
恋をして、結ばれた。

この世に運命られた二人の道が、
こんなにも、ひどい坂道であつたことなど
ちつとも知らずに！

やがて愛のかた身が、

一生治らない病いを持つて、二人も生まれて来ることなど、

ちつとも知らずに！
ああ、なんてあの頃は、
幸せなときであつたのであろうか！
ひと頃、良かった暮らしも、
うたかたの夢のように過ぎて、
いまは、木がらしの先に舞う
落ち葉のように、
その日その日を過ごす、暮らしぶり。

決して、経済的に恵まれたからとて、
幸せが得られるわけではないと、知りつつも、
どうして、こんなに、お金がほしいのだろうか？
どうして、こんなに、お金に苦しめられるのだろうか？

親二人、この世で生きるさまは、
ああ、冬の寒い、木がらしに、
落ち葉が二枚、風に舞う。
もつれ合い、からまり合いながら、
飛ばされて、どこまでも、どこまでも、
落ち葉が二枚、風に舞う。

保障って、国民健康保険証の、紙一枚。
貯えもない、家もない、私達のいまの暮らし。
風に、吹きちぎられるように、
二人のうち、一人に、
もしものことがあつたらと、思うと、
背すじに、寒気が走る。

道行く赤の他人達よ！
あなた方も、やはり、
運命のいたずらに、泣いているのですか？
あなた方も、やはり、
悲しみに、打ちひしがれているのですか？
あなた方も、やはり、
暮らし向きに、追われているのでしょうか？
もしかしたら、私達だけが、
不毛の荒野に、まよい込んでしまったのではないでしょうね。
ああ、二人の子供達に、

いとおしさだけが、すべてだと、
信じて接する日々が、
きょうもまた、羽ばたくように、過ぎて行く。
苦悩と、悲しみと、
子達への愛のみに生きるあした！
捨ててしまいたいほどに、くいあした！
あしたがまた、目の前に立ちふさがっている。

十五年も、一才のままに、
生きて来たわが息子、政章。
十二年も、一才のままに、
生きて来たわが娘、葉子。
しみじみとかみしめた、愛の実からは、
ともに生き、ともに死ねたら、
どんなにか、いいだろうか！
虫けらのように、弱い、
おまえ達の一生を、
見守つてあげられたら、どんなにか、
いいだろうか！

人生つて、人から人へ、語り継いで行くものだ、と人は言う。
親子つて、親から子へ、語り継いで行くものだ、と人は言う。
でも、おまえ達と語り合つことが、出来ない私達！
ああ、野の草のように、
ふまれても、ふまれても、
また、起きあがる、力！
この父のように、歯をくいしばつて、
どんな苦しさにも、たえて行く、
強い力を！
おまえ達に、授けてあげたい。

(八)

苦こそ、人生である。
「楽するものに、本当の人生がわかつてたまるか。」
パパは、言う。
「体の苦と、心の苦を、知らないで、本当の苦勞がわかるもんか。」
こつも言う。えらそうに、こんなことを言つてるパパに、

「楽に生きてる人も、たくさんいるよ。」
 ママがそう言つて、水をさしてしまつと、一人で笑つてしまつのである。
 心の安らぎは、人それぞれが、自分で図り、自分で得るものであるから、
 何とも言えないが、いまのところ、一人とも安らぎを得たよつな感がある。
 それというのも、子供達が、それぞれの施設に曲がりなりにもお世話に
 なり、少しずつ、明るい方向に向かつているからである。

心はずませず、そのつど考える出会いの企画が、生きる張合いなのである。

施設でのことや、わが子といっしょの公園や、海辺や、港やその他の場所での、ちよつとした出来事と、行きずりの人びととのあたたかいふれ合いが、私達の想い出の中に生きていく。

「今度のマー君との面会日、何、持つて行つてあげようかな。」
 「ヨー子ちゃんの、次の帰省、どこへつれて行つてあげようかな。」

こう考えることが、楽しみになつているのである。

子供達の顔が、生き生きとしていくとき、最高の幸福感があるのである。
 障害児二人を育てながら生きてきた、ということとは、われながら壮烈な闘いの歴史であつた。

パパは「暗やみのトンネルの中の、急な登り坂を走り続ける機関車みた

いだ」と、表現している。
 あすの糧を求めるために働かねばならないのに、子供達と、いっしょに過ごさなければならぬ。いや、過ごす方が先で、あすの糧は、あと廻しなのである。

子供と会うこと、子供と遊ぶこと、子供といっしょに過ごすことのために、生きがい求めて、もう何年か過ごして来た。

おまえ達、よりにもよつて、
 ばかなおやじのもとに、生れて来たね。

事業に失敗して、
 みる！ろくに、いいこととしてあげられない。

せいぜい、うまい物を食わしてあげるくらいで、いい服も着せてあげられない。
 ない。

こんなおやじつてあるかい？

地下たびをはいて、
 ビルの足場をふんで、
 鼻水をすすりながら、

冷い風に耳を打たれながら、

ふと、おまえ達のことを想う。

「マー君、寒いだろうなあー。」

「ヨ一子ちゃん、おしっこもらして、おしり冷えてないだろうかなあー。」

リシンガンを持つ手が、しびれ、

命づなが、腰にきりきりと、くい込む。

ああ、生きて行くことは、

やけに、つらいことだなあー。

今の仕事を、

ママは、「何も、そんなにまで、自分を落とさなくたって」と言う。

だが、おまえ達といっしょに迎える、

お正月のことを考えると、

金にさえなれば、何だってやらなくちゃ！

そうだろう！

もし、おまえ達と過ごす冬休みに、

金がなくて、おいしい物も食べさせてあげられなかったら、と思うと、

どんなことだって、

命がけで、出来るさ。

吹付乳剤をあびて、

体中、真白な姿で、

夕やみの家路に向う、ライトバンの中で、

ラジオニュースを聞く。

大阪の老人が、精薄の子供を、

物置小屋にとじこめていたと、

ブタ小屋のようなところに、

十余年も、しばっておいてあったと。

狂おしい、いかりのようなものが、

背すじを、つらぬいて行く。

そして、あらためて誓う。

「おまえ達！

貧乏で、かিশょうのない、この父だけど、

命がけで守ってあげるからな！」

*

機関車は、暗いトンネルの中の坂道で、大車輪をすべらせて、あえぎながら、止まりそうになることもある。砂をまいて、気笛をならしながら、いくら石炭をくべても、前に進まないののである。

きつと、砂はパパとママの涙で、気笛は泣き声で、石炭は汗なのかも知れない。

会社が倒産したとき、ママが死を決意したとき、子供が学齢に達したとき、施設や病院に入れなかつたとき、そのつど、機関車は、トンネルの中で、止まろうとした。

*

熔接の飛び火で、赤いシャツのそでに、網の目のように、穴があいている。捨てるのもつたいないと、今日も、うでを通す。

地下足袋の親ゆびのところにも、いつの間にか、穴があいている。

材料を仕入れに行くたびに、

手にふれてみては、思いとどまる。

子供達のために、もう少しがまんしようとして、

また買い損なってしまった、足袋だ。

以前は、おしゃれであった自分を、

ふと、思い出して、一人で苦笑い。

「ママ、行って来るよ」と言うと、必ず言われる。

「気を付けてね」と、言う言葉の中に、事故を、起こすなよ！

けがをするなよ！

保障なんか、ないんだぞ！

治療費も、入院費も、払えないぞ！

親子四人、心中だぞ！

と、という言葉が、すべて含まれている。

小さな、工事場に向かつて、朝の町に、車を走らせながら、急いで、仕事の手順を考える。一人で、八、キ口の鋼材を、屋根の上に、乗せる段取りは、どう考えても、安全なはずがない。

男が、生きるということは、いずれにしても、日々、命がけ。エベレストをスキーでおりたり、南極の氷の海に船を進めたり、太平洋をヨットで渡ったりしなくても、ほら！目の前に！きょうこれから、誰も知らない、誰も見てくれない、男の、命がけの、小さな、小さな、仕事がつまっている！

無事を祈る。
祈ることしか、わが身を守る方法がない。
誰か一人、やとえば良かったと、後悔しながら、
あすだって、また同じとき、
大げさに、考えることはないさ、
と、思い直して、仕事に取りかかる。

滑車にロープを通して、
二階の、はりに吊るす。
もう一度命づなを腰に巻いて、
屋根の上に、登る。
タバコを一服つけて、
あたりを、見渡す。
家々のベランダに、
カラフルな洗濯物がゆれて、
空に、白い雲が流れている。

ああ、みんな、平和だなあー。
おればかり、死にものくいなのかなあー。
五十五キ口の、この細い体に、

ロープを一巻、巻き込んで引くと、
ひたいに、青すじが走り、
まっ赤な血潮が、体中を駆けめぐり、
背中に、あせが一すじ流れて行った。

「よーし、きょうも、やるぞと、
わが身に、言い聞かせて
もう一度、引く手に、満身の力をこめる。」

(九)

夫婦の会話の中で、あるときママが、「パパ、神様って、いると思うっ？」と、聞いた。

「さあーねー、わからないなあー」と、パパが言うと、しばらく下を見ていたママが、ふたたび顔をあげる。

「いるとしたら、ちょっと、言ってあげたいことがあるの。」
「何んて？」

「神様、二人ともなんて、ちょっと、ひどすぎやしないか、って。」
二人でみつめあう互いの目に、涙がまた光っていた。

「私達は、わが子等に、涙と、汗と、命をくだいて与えながら生きているうちに、ときどき将来のことを考え、あまりにもみじめに思えることがある。」

「いつそ死んでしまおうかと、どのくらい、考えたことであるうか？」

「パパ、いつそのこと、四人で、死んでしまおうか？」

「バカヤロウ、死んで死ねるもんなら、とつくの昔に、死んでらあー。いまさら、あらためて死ねるかあ。」

「……………」
あるときは、パパがくずれる。

「ママ、生きて行くのが、いやになったよ。」

「何を言ってるのですか！子供達の顔を、よく見て下さい。パパが弱気になつたら、私達はいつたいたいどうすればいいのですか？」

こうして、気を取り直し、はげまし合いながら、私達は生きて来た。

出来の良い子供達の親のように、将来に託す夢がなくても、生きる！ただもう生きる！

生きてるうちに、生きる喜びを知り、まことの愛を知り、力強く、やさしく、互いに手をつないで、明日の幸せをさがして行くつもりなのである。

新聞にまた、精神障害児の親が子連れ自殺をした記事が載っていた。

パパとママも、何度も、死と向かい合って、死と語り合った。正直、死

に對するあこがれみたいなものが、心の片すみに成長した時期もあった。いつ死のうか、どうしたら四人で楽に死ねるだろうか？……どうせ死ぬつもりだから、何もかも、どうでもいいさ……と、そんな気持で、生きていたときもあった。

あるときは、子供達だけ、病気が事故で、死んでくれないだろうかと、虫のいい願いを持ったこともあった。

ますます子供が成長し、体ばかりが大きくなり、みじめな姿になって行くのを、正視することが出来ず、可愛い、小さい、姿のまま、死んでくれれば、想い出の中に生き続けてくれるだろうに、と考えたりもした。

健康で、明るく、はた目には何の苦労もなさそうな家庭にすくすくと育っているよその子供達の姿を見せられて、あまりにもひどいわが子への失望と敗北感にさいなまれ、どんなに努力しても、手に届かないとわかったとき、もう、あとに残るのは、絶望だけなのである。

生きている、価値のない者！

時には、こう決め付けて、死と対面するのであった。

そして、何度も、死から私達をすくい出してくれたのは、愛であった。愛こそすべてであった。これからもきつと、私達四人をとりまいてくれる。あたたかい重い、この愛が、いつまでもいつまでも、私達を守ってくれるのである。

*

子供達を連れて、
海を、見せに来る。

この港の海に、
かもめがただようさまは、
どこか二人の子達に似ていて、
あわれで、さみしい。

岸壁に寄せて返す
波を見ていると、
私達、親と子のようで、
悲しみを、さそう。

波のように、やわらかく、
何度も、何度も、
くり返し、寄せ返した愛と、

じーっと、受け止めて来ただけの、わが子達。

「パパ、ほらっ！岸壁が波に洗われて、くずれているわよ！」
「本当だ！おれ達も、いつか、子供達の心に通じる日が、来るよ！」

*

固く凍った山の雪なら、たき火をたいて、溶かしてやれば良い。春が来るまで、待つことも出来る。雪解の頃には、谷川に流れる水の歌も聞ける。下の平野から丘の頂きに向う暖かい風に乗って、若葉のうす緑色の波が寄せて来る頃、晴れ渡った春の空に、白い雲が流れて行く……。そんな幸せが、我が子に来るよう祈って、夢を見て来た長い長い望春の日々と期待を裏切られて過ごす、これからの、もっともつと長い冬の日々なのである。言葉を発しないわが子に、胸の中の悲しみといらだたしさを押えて、あらんかぎりの努力をつくして、教えようと試みた日々でもあった。

あきらめては、思い直し、あきらめては、また思い直して、「パパ、ママ、パパ、ママ」と、何千回、いや何万回、繰り返し呼びかけて来た私達なのである。そして、いまはもう、親子が傷つき合うことを恐れて、ただ、ひたすらの溺愛に生き甲斐を感じる、きょうこの頃なのである。

教師や医師が、「過保護はいけない、溺愛しては進歩がない」と言う。言われたときは、なるほどその通りであると思うのであるが、すぐその言葉を忘れてしまうパパとママなのである。

この子達が、人間として最低であろうが、したいほうだい、勝手に生きていようが、それが、運命られた生き方であるなら、彼等のために、どんなにづらいことがあっても、苦勞が続いても、もう、びくともしないぞ！と、ときにはひらきなおってみる。パパとママなのである。

何も出来なくて、何もやろうとしない、マー君！

こちらから、どんなに一生懸命語りかけても、仕掛けても、やらせようとしても、石のように通じない、マー君！でも何かの拍子に、ニコッと笑うマー君！遊園地の大観覧車の頂上で、下界の人びとやお花鳥をゆっくりとながめながら、「ウフフフ」と声を出して笑ったマー君！

風疹を患って、高熱で、身動きも出来ないほど苦しんでいたのに、枕元につきつきりで看病して、疲れてよれよれになってしまったパパに、そつと微笑んでくれたマー君。

耳に出来たおできを、毎日毎日、治療してあげたら、ガーゼを持ったママを見て、ニコニコしながら寄って来たヨ一子ちゃん！夜、寝なくて、いつまでもパパやママを困らせたあげく、やっと寝かせつけ、顔をのぞき込むと、おだやかな笑顔で寝ていたヨ一子ちゃん！

そんなとき、私達の心の中に、愛と幸せの水の輪が静かに波を打って、大きく、広がって行くのである。

*

おやすみなさい、二人の子供達。
おまえ達の、おだやかな寝顔に、
このしばられた、心が、
ほのぼのと、ときはなたれて、
パパも、ママも、とても幸せ。

おやすみなさい、二人の子供達。
おまえ達が、こよい見る夢は、
天国の、お花畑に、
星と月の、大空に、
神々と共に、遊ぶ夢かも。

他人の関係

(一)

「ヨー子ちゃん、だめっ。」
「あっち、行けっ。」
「ばかーっ。」
「おしーっ。」
「カイジユウ。」
ヨー子ちゃんが、近所で遊んでいる子供達に近寄ると、こんなふうと言われて、追い払われれたり、相手にされなかつたりすることがある。
「おねがい、ヨー子ちゃんと遊んであげてえー。」
ママがヨー子ちゃんの手を引いてつれて行くと、クモの子をちらしたように、みんな逃げてしまっ。

子供達の遊ぶさまを、遠くからじーっと見ているわが子が不欄で、よその子供をどなりつけておいて、ヨー子ちゃんをつれて、うちに帰って来てから、一人、涙ぐんでいるママ。

たまには、よその奥さんをつかまえて、油をしぼることもある。心ない親が、自分の子供に、ヨー子ちゃんをゆびさして、「勉強しないと、ああいうばかになるんですよ」と言っているとこを聞いたときなど、「もうー

度、言ってみなさい、あやまりなさい」と言つて、喰つてかかったこともある。

たまに、外で、親子で食事をしたり、仕方なしに電車に乗つたりすると、そんなときに限つて、子供達は奇声をあげて、周囲の注目をいっぺんに集めてしまつのである。

「何だ、あれは」というものめずらしげな集中砲火をあびて、いたたまれずに、親子で、食事途中の席を立つてしまったことが、何度もあった。

またあるときは、電車の中で、「この子は障害児です。何を見てるのですか？見世物ではありません」と、声を張りあげたこともあった。

行きずりの人に振り返つて見られたりするのは、毎度のことです。私達夫婦は、何百回もの、この苦い、いやな気持と心のうずきにもすっかりなれてしまつた。

(二)

他人の目

他人の目、冷たい目、

けがらわしい、気味悪いと、しかめる目、

あざけりの目、さげすみの目。

気にしない、気にしたくない。

会いたくない、見たくない。

暖かい目、あわれみの目、

はげましの目、うれいの目。

気になるけど、遠い。

手が、届かない。

たくさん見かける、身近かな目、

知らぬ顔の目、

我、関せずの、冷たい目。

苦しい目、さみしい目、

悲しい目、つらさの目、

たまに出会う、同じ仲間の目、

障害児の親達の目。

いつまでも、語り合いたい、この胸のうち。

赤い目、涙でうるんだ目、
つかれた目、
だけど、やさしい目、
ときを忘れて、我を忘れて
ただ、見つめている目、
パパとママが、わが子たちに、注ぐ目。

水晶のように、澄んだ目、
星のように、きれいな目、
遠くを見ているような、おだやかな目、
可愛い、可愛い、わが子の目、
けがれなき、この目に、魅せられて、
わが心、わが身に、むち打つ。

(三)

心ない他人のために、私達はずいぶんと泣かされて来た。
障害児を持ったことのない人が、あたり前の感覚でものを言ったことが、
母子心中にまで私達を追い込んでしまったことさえある。

私達は、いつも、ふつうに子供達を育てている社会の人びとと私達との
間に、相当な距離をおいて、歩いているのである。

私達にとって、医師や教師や相談所の所員や役所の方々は、かけがえの
ない味方でなければならぬはずなのに、「やはり、彼等も他人であった
のか！自分で障害児を持ったことがないから、あんなことを言ってるの
さ」と、私達をがっかりさせることがあまりにも多過ぎるのである。

籍を一年猶予したヨ一子ちゃん。今も学籍を免除したままのマー君。

この子供達の学籍のこと一つを取ってみても、役所にも教育委員会にも、
学校にも、数々のうらみつらみがある。朝夕に、わが家の前を子供達がラ
ンドセルを背にゆらしながら通り過ぎて行くのを見るにつけ、にがい想い
出を新たにする私達なのである。

「教育不能ですね」と、ただ一言の言葉で、申し刺しに刺されてしまった、
この親の胸の中の傷を、痛みを、誰もいやしてくれないことではないのである。
逆の立場で、自分がこう言われたらと、少しでも考えてくれたら、こん
な二言で、母と子を追い払ってしまうようなことはないだろうに、と思う
のは、障害児の親のひがみであるうか？

きつと、将来、障害児のための、特殊学級やその他いろいろな施設が出
来て、子供達が明るく治療を受け、教育を受け、少しでも進歩が見られる
日が来ても、この他人の関係が、障害児の親をいつまでも依沾地にさせて、

なかなか親まで救われる日が来るのは遠いのかも知れない。
この社会福祉のかけ声の中に、一つ忘れてしまったもの、それは、心ではないだろうか。老人をうやまう心も、いたわる心も、子供達に教えないで、老人福祉を叫ぶ世の中。障害児をいたわり、障害児を持った親の悲しみをわかつてもしないで、障害児(者)の福祉をとなえる世の中。他人のことなどどうでもいいと、押しわけへしわけながら突き進む、狂ってしまったような、この世の中！
弱い者が、生きて行くために、本当に必要なもの、それは、心のささえではなかったのだろうか？

ゴキブリ

(一)

人間、私達から見ると、たいしたことでもないことを苦にして、自殺までしてしまう人がいる。

この間も、私の友人が首を吊って自殺をしてしまった。あとに残った奥さんと子供達が、とてもあわれで、見るにしのびないのであった。

事業を始めて、資金がうまくまわらなかったとかで、本人はとも思いつめていたようだが、私達が感じたことは、「何も、死ぬほどのことはない」という一言につきる。

「立派な子供が三人もいて、ばかなやつだ」と、パパ。

「世の中に、甘ったれているのよ」と、ママ。

「おれ達だったら、きつと、命がいくつあっても足りんな。」

「本当。パパなんか、会社はつぶすし、夜逃げは子供の手前できないし、借金取りにはいじめられるし、金はないし、仕事はないし、もうめっちゃくちゃでも、ちゃんと、立ち直ってくれたもんね。」

「うん、だけど、つらかったなあ。」

「パパって、ゴキブリみたいね。」

ママはあらためて、当時は思い出して言う。

まったく、ゴキブリとはよく言ったもので、私達親子は、四人とも、ゴキブリのようなものなのかも知れない。

生きていても、社会のために役に立つことは、おそらくあり得ない、子供達。

むしろ、他人が納めた税金を、喰いつぶす一方なのであろう。

しかし、ゴキブリ親子は、たった一つ、他人に真似ができないほど、尊

い、美しいものを持っている。それは、親子の愛である。私達が子供達にそぞく愛は、神様だつて、うらやましがっているにちがいない。

どんなに光り輝くものと比べたつて、こっちの方が、ずーっと何億倍も、かがやいている。

みんなに、教えてあげたい、みせてあげたい、この光を！

我等、ゴキブリ親子、バンザイ。

(二)

パパは、最近まで、一人で仕事を見つけて、一人で仕事をして来た。別に人に助けてもらつたり、何人かの会社にしたりすることがこわくてかもう二度と事業均大きくすることがいやだとかいうわけではない。一人でやる分しか、仕事が入らないだけのことである。

三年近くも仕事を続けているうちに、レパトリーも増えて、そのうちに、鉄骨の小さな仕事から、外装吹付、左官屋等の内外の壁の仕事やペンキ屋さん、内装や床張りの仕事まで、こなしてしまふようになったのである。

建材屋さんに仕入れに行くと、店の人が、「あんた、いつたい何屋さんか本職なの？」と聞かれる。パパはすました顔で、「総合建設業だ」と言つて、店の人を笑わせて帰つて来る。

パパの胸の中には、いつか子供達のために、最後に死ぬまでいつしよに暮らせる、障害者の成人施設を作りたいという熱い願いが、いつも、ふつふつとたぎつていて、自分の職業のことなど、自分の生活のことなど、ぜんぜん考えていないのである。

パパの一生の仕事は、子供達のために造る施設なのである。そして、自分の造つた施設で、子供達といつしよに暮らすことが、いや、それを考えることが、楽しみのすべてなのである。

「ああ、早く施設を建てて、子供達といつしよに暮らしたいなあ」と、いつもため息をついているのである。

(三)

ママは、あまり体が丈夫でない。

いつも、貧血やその他の病気に悩まされている。心がまっすぐで、口数が少ない方で、少し暗い感じではあるが、ここぞというときは、言いたいことをきちつと言つ半面、甘えん坊でもある。

そして、何よりもパパがほれている点は、我慢強いことである。

北の雪国生れ特有のねばり強さは、天下一品で、相当がんばり屋のパパ

でさえ、舌を巻いている。

一年半ほど前から、パパが施設造りに飛び歩くようになったら、私が働いて食べて行かねばならないからと言って、小さな和風スナックを始めた。パパの友人が一人で事務所に使っていたところがあいたので、それを安く借りて、店の内装を全部、パパが仕事の合間や夜なべをしながら、こつこつと、三月もかけて造りあげた、自作の店である。

和風スナック“宴”は、三坪半の広さしかないが、私達家族の、新しい、小さな小さな、皆でもある。

毎日、お店には、いろいろな人びとが来て、ママと話して行くが、なかには、人生の悩みを打ち明けにくる人もいて、相談相手をつとめることもある。

若いアベックが愛の相談に来ると、自分達のことを心に思い浮かべて、愛とは、捧げることであるとか、耐えることでもある、と言って聞かせる。

仕事に行きづまった中年の男の人が来ると、パパのことを考えながら、働きなさい、がんばりなさい、と言う。

子供のもで悩んでいる初老の人には、世の中には、もっともっと、子供のことで悲しんで悩んでいる人もいると、自分達のことを話す。

夜遅くまで、客が帰らないときなどは、眠い目をこすりながら、がんばっている。

体が弱いくせに、まるでゴキブリのように、たくましく、ねばり強く、雨の日も風の日も、客が来る日も来ない日も、ほとんど休まずに、働いているのである。

(四)

マー君は、施設で、ごろねをしていないときは、いつもつろつろ歩いて、下をあまり見ないで歩くので、ときどき、寝ころがっているよその子をふんでしまう。

マー君は、平然とふんで通る。先生やお友達が、キヤーキヤー騒いでも、何喰わぬ顔で、平然としている。

まるで、雲が流れて行くように、ゆったりと生きているマー君が、一日数回だけ、突進するときがある。食事と、おやつときのマー君の目は、鷹の目のように輝き、のろまのようであったマー君の手が、食物に向かつて、さーっとのびる。右手を押えると、左手が、間髪を入れずに出て来て、目的の食べ物はたちまち、マー君の口の中につめ込まれてしまう。

食べることは、まさに生きることにつながる。マー君の、ゴキブリのようにたくましい生命力に、感心するのである。

ヨー子ちゃんが、きれいな服を着たときは、大変な喜びようである。鏡

の前に立ち、何回も何回も、のぞき込んで見ては、胸をたたいて飛び上がって喜ぶ。

大きくふくらんで来た胸を、ブラジャーで押えて、ワンピースを着せると、もう一人前の娘である。知能が赤ちゃん並みで、あとはすべて普通以上に成長したのである。

赤ん坊のとき、赤毛で薄くて心配していた髪の毛も、黒く艶やかにのびてくれたし、でべそになるのではないかとパパが心配して、十円玉をガーンゼにくるんでおなかにのせて腹帯をしてあげたおへそも、きれいに収まってくれたし、乳歯が抜けなくて、二重に出て来た前歯も、ちよつと出っ歯になつたけど、大きくしつかりと収まってくれた。

浅黒い方だけど、まあ十人並みの、可愛い娘に成長してくれたのである。病院での一日は、彼女にとっては、大変楽しいらしく、あんなにわが家で可愛がっているのに、ふだん外泊が終わつてもどるときは、ニコニコしながら帰って行くので、親をがっかりさせている。

そうかと思うと、土曜日の迎えがちよつとでも遅れると、メソメソ泣いて待っている。

病院内の特殊学級の中学校一年生である彼女は、言葉もしゃべれなく、字も書けるわけでもないのに、保育クラスの「E」クラスのメンバーでもある。四人のクラスの仲間達は、年齢こそまちまちであるが、みな同じ重度の子供達である。

パパは、「どうでもいい」「E」クラス」と呼んで、学級の先生にうんと叱られたことがある。

クラスの子の中には、ヨー子ちゃんのお友達はいない。大好きなお友達は、よそのクラスのもっと小さい、男の子なのである。小さなNちゃんをブランコに乗せて、押してあげている姿は、ほほえましくて、愛らしさにあふれていて、みんなの微笑みをさそうのであるが、かんじんのN君は、いつもめいわくそうでいるのが玉に傷である。

ヨー子ちゃんは、もうおしめをはずして三年にもなるのに、まだおしっこを教えない。そのため、一時間おきにトイレに連れて行くことになっている。気分が落ちつかないときなどは、十分くらいでおもらしをしてしまい、パンツを一日に何枚も何枚もはき替えさせてもらう日もある。そればかりか、たまには、大きい方ももらして、君護婦さんや保母さんの目が届かないときなど、手でこねまわして、大騒ぎになったりするのである。そして、これもまたゴキブリのような、いやがらせなのである。

マー君は、すさまじい食欲だ。パパよりたくさん食べる。おかげで、この二、三年は、めきめきと大きくなり、今では、ママより十センチも背が高い。

大きくても、まるつきり赤ちゃんなのである。

小さい頃、「どうせ治らないなら、このまま、小さいままで、育たない薬つけないかしら」と、ママが言ったこともあった。

ヨ一子ちゃんは、顔立ちも骨格も異常がないのだが、マー君は、大きくなるにつれて、可愛かった顔がゆがみ始め、おまけに、背骨まで少し横にねじれて、胸の厚みも右と左が違って来て、すべてが変わってしまった。そして、いまは、大きくなり過ぎるほど大きくなった。

そのため、パパとママに、また新たな闘いが始まるうとしているのである。

マー君は十五才である。あと三年で、いまの児童施設を出なければならぬ。ヨ一子ちゃんは十二才である。やはりあと三年の十五才で、小児精神病院を出なければならぬ。

成人重度障害老のための施設は、十人に一人分位しかないと言われている。この子達の安住の地は、東大に入るよりむずかしいのである。

四人の家族の幸せのために、どうしても、成人施設がほしい。

パパは、大きくなったマー君を背中におんぶして、「ちきしょう、こんなに大きくなりやがって、くやしいなあー」と言って、涙を目にためて、空をにらんでいるのである。

第一部

不毛の荒野から

親の会懐戦記

親と子の血のつながり、絆、生きている限り、忘れよう逃れようとしても、とても忘れられるものでなく逃れられるものでもないのに、一度は、わが子を隠してしまったり、愛を失ってしまったりする親達。愛するが故に、極端に絶望して、子を道連れに死を考える親達。

親の力で、親の努力で、何とか、わが子をまともにしたいと、一生懸命教え、しつけながら、ひよっとしたら、甲斐ない努力かも知れないと、も

がき苦しんでいる親達。絶望を諦めに変えて、無気力になってしまった親達。

親子の愛を失って、これをもう一度取り戻そうと、懸命になっている親達。絶望からはいあがって、わが子達のために、いままさに、この歴史の浅い社会福祉のかけ声の中で、どちらを向いても、不備、不備だらけの矢面に立って、悪戦苦闘をしながら、生き抜いている親達。

いずれにしても、わが子を、障害児として判定されたときから、苦しみを胸に秘めて生きてきた人達の集り、これが「親の会」なのである。

私達夫婦が、悪戦苦闘型の親に変身するまでには、長い長い、人生への煩悶の道程があった。

そして、子供達のために、生きて、働いて、ボロボロになっても、悔いなんかない、と思うようになった今日この頃なのである。二人とも、ちょっと調子が良いのかも知れないが、泣いて沈んでいるより、よっぽどいいと思う。

そんなわけで、二人とも、親の会のことなら何でも引き受けてしまう。いわく、県××児親の会代表、市××児親の会役員、施設親の会会長、病院親の会副会長、親の会会計、親の会書記、その他……。

「親の会バカ」のパパとママなのであるが、自分の仕事も忙しいのである。

(11)

親の会運動の、ここ五、六年を振り返ってみただけでも、今昔の感が胸の中に去来する。

あれからずいぶん世の中が変わり、障害児のためにいろいろと施策が出来る、すべての面に進んだものであると、感心するのである。右を向いても左を向いても、まだまだ不満であるが、しかし、親達がかち取ったものが、与えられたものであるかは別として、とにかく、今日のこの社会福祉の「はやりぶり」は、当事者の親の一人として、隔世の感がするのは否めない。

何年か前の親の会運動の中で、文章に書いて寄稿したものの、大会会場で話した原稿、陳情書として県や役所に出して頭を下げて歩いたもの等を引き出して整理しながら、ここ数年の、親の会のことを振り返ってみたいと思ふ。

七年前、子供達は、医師の診断では、自閉症だということ、私達は、まだ出来てほやほやの東京都の自閉症親の会に加入していた。

加入して半年か一年後、私達は千葉県自閉症親の会を結成し、毎月のように、どこかの親のうちで、県内在住の親達を集めて、しきりに会合を開

いていた。

昭和四十七年の十一月、千葉県自閉症親の会の会員三十人で、千葉県特殊教育振興大会に初めて参加したパパは、発言の機会を得た。そして、県内の育成会、手をつなぐ親の会の会員、それに教育にたずさわる先生方、役所の方々、児童相談所の職員達、県議会議員、国会議員の諸先生方等、八百人の聴衆を前にして、身ぶるいをしながら、絶叫したのであった。

あまりにもひどい行政者の無知、無能と、たらいまわしに会って来たいきどおりと、情ないほどの自分達親の無力ぶりに、業を煮やして、憤まんやる方なきをぶつつけたと言った方が適切かも知れない内容であった。

次に紹介するのは、そのとき話したことの一部である。この訴えの中のある一部の問題は、すでに解決されつつあり、過去のものになるうとしている。しかし、ある問題は、未解決のままである。パパの所属する親の会は、子供の病気の診断が自閉症から精薄に変わるにつれて、自閉症親の会、さらに精薄者育成会へと変わったが、引き続き未解決の問題と闘っているのである。

*

この子達を、どうしたらよいのだ

みなさまがたの中には、自閉症という病気の内容について、おわかりにならない方もいらっしゃるでしょう。一般の方々が理解出来ない、大変むずかしい病気で、治ることがとても少ない病気だと言われています。そのため、親達も、病気の子供を精神的に支えることが出来ず、連日のストレスに疲れ果て、ともすると無気力になり、親子ともども参ってしまふ、というケースが大変多いと言われています。

お集まりのみなさまがたの中にも、同じことを経験なさっている方々が、大勢いらつしやると思いますが、最愛の子供が、治るか、治らないかわからない病いに冒されているということは、親子双方にとって、こんなに不幸で、悲しいことはありません。

家族に、精神障害者が出たということは、大きな災難におそわれたようなもので、この災難も、終わったのではなく、始まったのであって、しかも、これから大きく広がるがんなようなもので、単に病児の身の上だけに限らず、その影響を受ける兄弟の問題、治療教育にからむ家庭の経済の問題、親の精神的な悩み、近所との交際、はてはお父さんの職場にいたるまで影響を受け、子供の成長につれて、いよいよあらゆる難問が両親を徹底的にせめつけて、また、治療教育機関の先生方にも、成長するほどに御苦労をかけるのです。

しかも、この苦労は出口がなく、いつまでも過去のものにならないかも

知れませんが。生きている限り、むしろ、これからぶつかると壁の方が厚く、遠く、困難であるとしたら、私達は、いったい、どうしたらよいのでしょうか？ どうやって、生き抜いて行けばよいのでしょうか！

先日、新聞紙上に、三十才の精薄者のわが子を殺して、自首した、七十才の老人の父親のことが書いてありました。私は、その記事を読みながら、あなたただけではありません、この私だって、心の中で何度も、わが子を殺して、と口ずさみました。

早く死んでくれた方が、お前も、おれも、幸せなのにか、何で私ばかりに、神はこのような子供を授けたのだろうかとか、大きくならないうちに、病気で死んでくれないだろうかとか、望みのないお前を殺して私も死にたいとか、と思ってみては、考え直しているうちに、夢の中で、わが子と話し、現実、目がさめて、涙をこぼしたことも何度かあります。

こんな感情におぼれて、取りみだしたあと、私は、自らを、一瞬とはいえども人非人であったと深く反省し、愛する子供のために闘う人生は、たとえつらくても、悲しくても、生きるに値する、と考え直すのであります。

親の会の仕事を数年間続けてまいりましたが、障害児を持つ親の悩みは、みんな一人一人が、その症状により、年齢により、地域により、家庭により、経済状態まで含めて、さまざまな形でちがうのです。重度だから、軽度だからといって、一概にかたづけられません。

そのため、私達親の会の訴えとか陳情書をまとめて、役所などにつたえ飯に聞き届けていただいたとしても、私達自身は、その施策から洩れる方が多かったのです。私達は、自分が救われることより、他人が救われるのを見る余裕が出来るほど、待つて来ました。

これから申し上げる私達の訴えも、そのつもりで、未長く運動の中に取り入れて、消化して行くつもりで、提案してまいりたいと思います。

まず第一に、私達が最初にぶつかっている問題として、県の総合治療教育センターを作った戴きたいのです。自閉症も精神薄弱も、分裂症も、肢体不自由も、難病も言語障害も、精神障害も、病弱も、みんな、教育と治療と心理の相談を受け、入院、入園、入学の悩みを相談し、指示し、解決してくれる、総合治療教育センターこそ、これなくしては一步も前進することが出来ない、児童福祉の第一関門だと思えます。

現状では、バラバラ状態の中で、不足、不備、不満をかこっているのです。児童相談所から病院、病院から他の病院へ、そして児童相談所へ、児童相談所から病院や施設の入所を指示され、行ってみると空きがなく、また児童相談所へと戻って、やっと決めて戴いた養護学校や特殊学級は、またもや空席なしとか、遠くて通学不能……思いあまってまた、児童相談所へと戻っております。

どこで、私達のまことの悩みを、相談を、受けとめて下さるのですか？

どこで、子供の治療をしてくれるのですか？
教育を、どこで受けさせるのですか！

私達は、決して、立派なセンターの建物を望んでいるわけではありませ
ん。

私達が望んでいるのは、場所なのです。制度なのです。そして、もつと
も望んでいるのは、受けとめて下さる人なのです。親といっしょに考えて
下さる先生方や、保母さん、カウンセラーやケースワーカーなのです。そ
していっしょに困って下さる役所の方々、専門教員や心理学者なのです。
社会福祉の旗印の下で、建設会社をもうけさせても、私達は決してうれ
しくはないのです。

第二に、精神障害児は、早期発見、早期治療が叫ばれておりますが、発
生を止めることが出来ないまでも、早く治療することによって、軽い症状
で済ませることが出来る段階でとらえて行けるよう・私達と同じ苦しみを
人びとが味わわないためにも、ぜひ県下に、二、三才児専門の治療教育が施
せる公立の病院を、いくつか設置して下さい。

第三に、自閉症児に対する児童扶養手当を戴きたいのです。現行の障害
児扶養手当は、自閉症児には適用されておりません。また受けたとしても、
この物価高の中で、一児童あたり二千元や三千元では、何も出来ません。
私の子供達は重度で、二人とも入院しておりますが、国民健康保険が適用
されても、入院負担が月一人二万円以上掛かり、諸費用まで入れると、二
人で五万円以上の支出になります。このため、私はいつも人の倍働かねば
暮らして行けないんだと、自分に言い聞かせてまいりました。

どうか、政府、その他の地方自治体にいたるまでの関係機関の方々に申
し上げます。児童福祉手当を充実させて下さい。

第四に、高齢児童に対する施策を、早急にやっってもらいたいです。
養護学校高等部はもとより、職業訓練の場、制度、先生等等です。また、
実社会に出ることが出来ない重度の子供達のために、集団農園、共同作業
場、コロニー、授衆所等、大きい子供と、小さい子供と、幼い子供達が、
先生達と家族といっしょに暮らすことが出来、いつでも社会への適応を前
提としての、心あたたかい環境と暮らしこそ、私達親の望みなのです。

私達は子供達より先に死ぬことをいつもおびえております。親が先に死
んだら、かわいそうなわが子を、誰が面倒みってくれるのだろうか？と思っ
と、心が寒くなる現状です。

誰しも、わが子の中からがすこやかで、心も頭脳も健全であることを願
わない人はいりません。子供が泣くと、親も泣きたくなります。子供が笑
うと、親の心まで晴れます。何か望まれれば、かなえてあげたいと必死に
なります。出来のよい子なら、親はきつと将来の夢と希望に胸がふくらみ
ます。出来が悪くても、いとしい気持に変わりはありません。いや、もつ

と、私達は、この子らがいいのです。この子らの幸せを願って、一生懸命生き抜いて来ているのです。この子らに、人生を教えられ、強く正しく生きることを教えられ、この子らが無言のうちに、愛と道徳と、哲学までも、この私達に向かって語りかけてくれるのです。

社会のために役立つ、一生懸命働く、子供達のために何かしてあげよう、かわいいそんな仲間達と語り合おうと、じっとしておられない気持ちに、子供達の目が、その姿が、私達をさそい込むのです。

国をあげて・社会福祉が叫ばれ始めたこの頃、小さな地域社会の片すみで、私達の願いが、大きな夢となつて広がるのはいつの日だろうかと思いつながら、最後までやり通すことを、も三度心に誓って、私達の訴えを終わりたいと思います。

*

パパは、この訴えの草稿を書きながら、あふれる涙に、くしゃくしゃになつていた。

書いては泣き、泣いては書き、夜があけて、朝になつたのを知らずに、午後には演壇に立つことも忘れて書きつづけた。

晴れの演壇に立つたときも、涙でくもつて、原稿を見ることが出来ないほどに泣いていた。八百人の母親達と先生方も、ハンカチを目に当てて、泣いて聞いてくれた。

楽屋に戻ったら、ママも目を赤くして泣いていた。

「パパ、よかつたわよ、すばらしかつたわよ。」

「何がいいもんか、よければどうなんだ。」

誰に向かつてとも言えない、誰にもぶつけれない、悲しみといかりのよつなものが、胸の中につづげざまにこみあげて来るのを収めることが出来ず、また、あふれる涙をふいていたのであった。

(三)

千葉県自閉症親の会代表や千葉市立病院親の会の指導者として、両会の仕事をやっていた頃の思い出に残ることの一つに、S君の事件がある。

S君は軽度で、普通学級から病院に入院して来た子で、中学三年の十五才で病院内の特殊学級を卒業と同時に、年齢制限で病院を退院した。しかし、十五才以上の子が行ける他の施設もないまま、家庭に引き取られて行ったのである。

家に帰ったS君は、毎日がともつまらなかつた。第一、友達がいらない。中学校を遠くはなれた町の特殊学級で過ごしたS君に、友達が出来るはず

がなく、近所の同じ年頃の子供達は、「あいつ、病気だそつだ、狂っているらしい」と、なおさら近寄ろうとしないから、ある程度回復して、とても良い子になって退院して行ったにもかかわらず、何もすることがなく、親も何をさせることもなく、ただ一日一日を口がなぶらぶらと過ごす毎日であった。

そうしているうち、あるとき、S君が銀行に強盗に入るといふ事件が起きたのである。

毎日テレビを見て過ごすうちに、テレビのドラマに出て来た銀行強盗を見て、彼自身という精神的な経過をたどったかはわからないが、とにかく事件が起き、警察に突き出されたとき、なぜやったか、と聞かれたら、テレビでみてカツコウ良かったから、と答えたというのである。

親が面会に行くと、警察では、検事と相談してくれということで、担当の検事の方に出ってきたらしいのだが、さっぱり要領を得ない母親の説明に、担当の先生であったA先生と私達親の会は、さっそく行動を起こすこと決めて、まず次のような嘆願書を書いて、会員全員の署名のうえ出かけて行ったのである。そして、同時に、県議会や県社会部の方にも、施設の設定についての要望をまとめ、お願いに行つたのであった。

*

嘆願書

私達は、千葉市立病院児童精神科に入院している、情緒ならびに精神障害児の親達ですが、日頃、病棟職員の御苦労のおかげをもちまして、中学卒業年齢の十五才までは、なんとか保護して戴き、治療教育を施してまいっております。

しかし、この上の教育や治療の場がないために、退院帰宅を余儀なくされ、児童が大人になる最後の段階で、不安を抱いたままに、自宅療養がせいっぱいの現状であります。

精神医療にたずさわる先生方や特殊教育の現場の先生方みなさまが、このことを心配して下さっておりますが、私達親の会は、年長児および成人の施設の必要性を痛感し、一昨年の県議会に、施設の設定を強く要望請願してまいりました。

このたび、院内特殊学級中学卒業退院のS君が、不詳事を引き起こしたことは、私達親が、常日頃、危惧していたことであり、また保護者として、その責任の重大さを身にしみて感じております。

しかしながら、施設を出たのち、行くところのない、この子供達の行く末を考えますと、大変暗い不安な日々でありますと同時に、一方では、一

日も早く、しかるべく施設を作り、不安を取り除きたいと念じております。今回の不詳事にしましても、S君が強盗傷害の目的をもってやったことではなく、精神障害を持った子供が、ただ単に、衝動的に行なったもので、害意はまったくなかったものと確認致しております。

親の会としては、今後、県立精神障害児施設を設置を強く要望して行くことが、県下に潜在する同じ境遇の子供達も含めて、不幸を背負った障害児の親の努めであり、社会責任でもあると思います。

今後のお力添えをお願いしますと同時に、今回の不詳事に関しては、十分に事情を御高察の上、書処下さるようお願い申し上げます。

昭和四十八年五月

千葉市立病院情緒障害児親の会

*

義務教育以後の児童精神医療教育施設の設置についてお願い

・現状説明

現在、県下におけるこのような施設として、十五才までの児童に対する施設は、数カ所ありますが、これ以上の年齢対象児に適應する場所がなく、中学卒業と同時に、退院帰宅し、自宅療養を余儀なくされております。

今回、S少年が、三月卒業退院後、自宅療養中、銀行にて不詳事を起こし、関係機関に御迷惑をおかけしましたが、当局と引取り交渉の結果、あずかる施設があればお帰ししますとのことでした。

しかしながら、当事者の両親も、また私も市立病院親の会も、八方、他県にいたるまで手をつくしており、享が、S少年あずかる施設がなく、ほととに困っております。また、現在入院中の児童も、いずれは中学卒業年齢に達し、このような事件がいつまた発生するかと考えますと、将来が不安であります。

・お願い

- 一、県立の、治療と教育がともなった、十五才以上の施設を作ってください。
- 二、運営においては、授産所のような、社会復帰を前提とした運営をして下さい。
- 三、設置場所は、市街地に近く、一般社会環境からあまりかけはなれないような場所に選定して下さい。

昭和四十八年五月

*

私達の懸命な努力によって、ついに、仮ではあるが、大学病院の大人の精神科に空席を見つけて、S君を留置場からやっと引き取ることになった。まだ子供であるS君を、一人、大人の患者の中に入れるのはかわいそうでのびなかつたのであるが、背に腹はかえられず、あきらめて、入院させることになった。

入院の日、大学病院精神科の扉の前で、不安そうな顔で、しょんぼり立っていた母親の顔が、いまでも、私達の脳裏からはなれずにやきついているのである。

その後、一年ほどして、S君は他県の施設に入所したと聞いているが、いまでも、あの暗いよこれた廊下と、閉ざされた部屋の印象が強く残っていて、その中に、わが子が姿を置き換えている夢を見るのである。

親の会の仕事は、空しい、砂をかむような結末に終わることが多い。

これで本当に良かったのだろうか、疑問を感じさせることが、ほとんどなのである。間に合わせの結果が得られたものは、まだ幸せの部類に入る。だが、いつまた追われて出るのやら、それより、子供がこれで本当に良いのだろうか、いったい幸せになれるのだろうか？

母親や父親は、何を感じ、どうしようとしているのだろうか？

子供のことを深く、一生懸命考えているのに、自分では何も出来ず、いつも他人に振り回されている親達。いちばん愛しているのに、自分では何一つ出来ず、おろおろするだけの親達。それが、障害児の親達なのである。

仲間達の中に、「会長さん、もう疲れました。どうしたらいいかわかりません」と言って、相談に来る人が多い。

絶望の淵に追いやられ、そこでもがき苦しんでいるうちに、死をもえらびかねない状態にいる親達に、パパは何と言って慰さめても、だめだと言うことがわかりすぎているので、そんなときには、「私達をみなさい。私などは二人とも重度障害児でも、がんばっているではありませんか」と言っただけのことになっている。

しかし、この言葉の裏側には、「あきらめろ、もつとひどい者もがまんしているのだぞ!」という意味が多分にあって、これでは相談にならないということ、私はよく承知している。

そして、「がんばりましょう、子供のために、明日のために、がんばりましょう」と言っただけ、言葉をつけたすことでお茶をこしているのである。

ここ数年、次々と出来る特殊学級の増設に、わが子がお世話になれなかつたぶんも含めて、良き時代が来たもんだと喜んでいたところ、ある親から、重度差別のことで泣きこまれたことがあった。

ちよとど、特殊教育振興大会の推進委員の一人であったパパは、県内特殊学級の機関紙に寄稿提言を依頼され、さつそくいささかのうらみもこめて、次のような提言を書いて寄稿したところ、全文を載せてもらえた。それからもう三年も経過しているが、現状と比較してみることも意味のあることと思ひ、あらためてそのまま紹介してみることにした。

*

〔提言〕 地域社会が特殊教育に期待するもの

初めに申し上げますが、福祉社会のスローガンのもとに、最近、特殊教育のための学級、学校の新設、増設が目立ち始め、障害児を持つ親の一人として、大変喜ばしいことだと思ひます。また日々これにたずさわるみなさまがたにも、感謝の念を忘れておりません。

願わくば、すべての障害児に、あたたかい教育の手がさしのべられるまで、この喜ばしいブームが続くことを念じつつ、木論に入りたいと思ひます。

戦後の学校教育の流れの中では、社会的適応と教育の進展度が重視され、当然手のかかる児童は、普通児の学業の低下を来たすおそれがあると考えられ、教師の立場としては、学級全体の管理のため、問題児をはぶく方向に進みがちです。しかしここで、いったい教育とは何か？ということを考えてみたいと思ひます。

学校は知識の習得をするところだ、という発想だけなら、できる者はどんだんのばせるが、できない者は、ほったらかしにされ、いじけさせられて、そのために、非行に走るかも知れません。

これらの裏には、学校長や担任教師の名誉心とか、父兄の欲望に応じるための受身の姿勢があり、心にもなく知識の注入に力をそそぐ、という実状がないとは言えないかも知れません。こうした教育のもとでは、できる子供は、できない子供が、そのできないことのためにどんなに苦勞をしているか、また具体的にどんなところでつまづいているかなどには一向にかまわず、人がいやな思ひをしていふことも考えないのです。

できない子供がいたら、その悩みを分かち合ひ、できる子供の能力をすなおに認める雰囲気なくては、真の教育ではないと思ひます。

そこで、もし障害児が学級にいたとしたら、困ることもありませんが、教師がまず良き理解者となって、積極的に関心を寄せれば、他の児童がこれを見逃すはずはないのです。クラス全員が障害児の良き理解者となることは、もはやすばらしい道徳教育であり、心の豊かな人間を育てる本当の教育の意味が、ここにあるのではないかと思います。

最初に、普通教育の場における、何らかの障害児について、一言申し上げたのは、私達は特殊教育の意義を深く考え、対象児に対して軽々しく扱うべきでないと考えるからです。

特殊教育とは、字で書いた通り、特殊な教育方法と手段であり、特殊な児童生徒を対象とするものであると思います。必然的に、特殊教育を必要とする児童に対して行なわれるべきであり、クラスや学校側の事情によるものではない、と私は信じております。特殊教育の対象者として児童が選別されたときから、障害児のレッテルがはられ、障害児を持つ親が出現することを考えた場合、特殊教育の手段と方法は、児童と親に対し、刃を向けることにもなりかねないからです。

人間の価値を、少なくとも児童期においては、できるだけ平等にしておいてあげたいと思います。おとなの社会における生存競争が始まる以前に、知能の良し悪しや、社会適応の順不順が、児童の将来に暗い影を落とさないよう、対象児を選別する時点で気を付けていただくのは勿論のこと、選別基準、方法については、すべての機関を総動員する必要を感じます。

さて、教育の理念から考えますと、就学免除や就学猶予はあり得ないことと考えられますが、未だに在宅児を放置してあるとか、福祉施設の子供の教室不足、普通学級から特殊学級へ編入のための教室不足など、種々の困難が横たわり、加えて一番大事な専門教員の養成が先決されなければならぬということがあるようです。特殊学級には、精薄なり、自閉症なり、その他情緒障害児の心理治療や教育に関する基礎的訓練を経た先生が必要なのであります。ところが、現在大学の中で臨床心理学の実習はあるが、講義すらもカリキュラムにのっているところは、日本の大学多しといえども、ほんの数えるほどしかないのです。しかもそのうちで、心理治療の実践にたずさわっている人が講義を担当しているものをさらに選んだら、ただ啞然とするばかりです。

それでいて、もしかりにやたらと、特殊学級を増やしたら、いったいどういふことになるのでしょうか？

しかし、それでも私達はあらゆる困難を乗り越えて、心身障害児のすべに、一貫した教育体制を確立し、障害別の特殊学級を設置し、教育と医療と福祉が一体となって、これを推進する日を待ち望み、またこれを行なうことが、文化国家としての当然の責務であると信じております。

地域社会はこのことのすべてを要求し、これが行なわれることを期待し

ております。

いま、日本の地域社会は、高度な経済成長と文明文化の発展を成し得て、まさにその余力を福祉社会の建設に向けて種播きを始めましたが、あまりの急成長による社会の発展が知識と知能の吸収作業である片寄った教育に熱心であるがため、または多種多様にわたる社会性の要求が、またはこの発展成長にもなう種々の公害が、または生活様式と生活環境の急変化が、あらゆる面で児童の障害に係り、発生の一因となっていることも考え、深く反省しなければならぬと思います。そして急成長、急発展をとげたからこそ、数千年の人間の歴史の中で、いまほど人間の価値観における自由と平等の思想を、もう一度、問い直さねばならない時期はないと思えます。

高度成長社会では、ますます知的能力の開発に拍車がかかり、これが生産に寄与する重大な決め手となり、知的無能力者はごくつぶしの存在と化し、受けた教育の個人差が人間の価値観を決める重大な要因と化するおそれが多分にあります。

教育がこのように重大な意味を持つ、この時代に生れて来た私達は、子供の教育については、間違いのない方法と手段を選び、そして来たるべき次の世代にこれらを確実に引き継ぐべく責任を果たさねばなりません。障害児に対しての特殊教育は、この意味においても、高度成長社会がせひとも果たさねばならない課題であると思えます。

私達は、普通教育を受けられない障害児が、社会におけるごくつぶしの存在になるような地域社会を、断じて作ってはなりません。また特殊教育を、地域社会の中で行なうに当たっても、ごくつぶしの収容的なものにすることも、断じて許すわけにはまいりません。あくまでも人間尊重の主義、方針をもって、この仕事を進めて行かねばならないと思います。立派な建物を建てたあとから住みつく人をさがすような、まずい施策はもう通用しませんし、数字の上での目標達成などの考えも、この仕事には通用しません。障害児を一人の人間として扱い、教育するためにどれだけ努力したか、という事実のみが評価されるのだと考えなければなりません。

プレハブ小屋でも良いじゃありませんか。教材が足りなくても良いじゃありませんか。障害児や親が望んでいるのは、人と人との生命のふれ合いの中には、ごくまれて行く愛情であり、心であると思えます。

人は、母と子の一人対一人から出発し育ちます。障害があるからこそ、特殊学級を必要とし、原点にもどって人と人のふれ合いを切に求めているのです。どうぞ特殊教育を行っている学級、学校に合わせて教師を選び、また人員の配置を行なって下さい。また子供の症状に合わせたきめのこまかい施策を行なって下さい。決して「二学級三担、頭かず十三名」などの制度を、障害児に押しつけることはしないで下さい。

地域社会は、今日すぐすべて満足することを願っておりません。一歩一歩、親と子供が満足し、教師が満足することこそ進歩であって、頭かすをそろえるだけの仕事を、私達は一番恐れております。数的、量的拡大に、ともすると中身を忘れて、安易な方向に走るのではないかと心配です。

県が、四十八年に策定した第四次五カ年計画のうち、特殊教育の拡充(五カ年の目標)案や、国において検討されている養護学校の義務制実施計画と柑まって、県でも五十四年度から、養護学校も含め、百パーセントの義務教育制実施計画案など、次々と私達を喜ばせる計画が出てまいりましたが、これらの計画が、すべて人間尊重の精神に基づいて実施されることを切に望みます。

終りに、一つ提言したいこと、現場のみなさまがたにぜひお願いしたいことがあります。

それは、障害児に接するに当たって、むずかしい重度の障害から逃げないでほしいということです。重障害があればあるほど結果が実らないかも知れません。がしかし、やらねばならないんだ、という気持で接してあげて下さい。この仕事だけは、やさしい楽な方から入る方法も、手段も、許されません。また、将来にぶつかる問題の壁が、ますます厚く困難であるかも知れません。

障害児を持つ親達の悩みは、一人一人の症状により、年齢により、地域により、家庭により、経済状態まで含めて、さまざまな形でちがいます。重度であるから、軽度であるからと、一概にかたづけられません。受け入れる側に、人手不足や施設の不備を理由に、重障害児をはぶく傾向がないとは言えない現状です。私達障害児を持つ親は、今日この日まで、その悩みを、国に対して、地域行政に対して、教育委員会や先生方に対して、訴え続けて来ましたが、聞き届けていただけるとは少なく、私自身はまたこの中からもれる方が多いのです。自分の幸せより他人が救われるのを見る余裕が出来るほど待つて来ました。いつまでも待ちます。待つことの中には、未来への夢も希望もあります。だから、どうか逃げないで下さい。むずかしい問題から一つ一つ力を合わせてやりとげて行って下さい。

昭和四十九年十一月六日

特殊教育振興大会推進委員 鈴木 栄

*

年を新たにすることに、親の、特に母親達の、わが子に発達保障、教育保障をとの推進運動は、力強く全国津々浦々にまでしみ渡って行ったような感じがし、私の子供がちょうど入学のとき、すなわち、いまから八年前と比べると、隔世の感がするのである。

そして、あのときの私の提言の内容は、いままさに、特殊教育や養護学校の制度がかかえている重要な問題となって、目の前の大きな壁となって立ちただかっているのである。

(五)

施設には、何れ月も、子供の顔を見に来ない親もいる。

私は親の会の会長として、ときどき家庭訪問をしながら、そんな親達を説得して歩くこともある。どんな事情があろうと、月に一度くらい子供に会いに来るべきで、会うことが親の心の救いにもなるのではないかと説得して歩くのである。

施設は、子供の教育指導と治療更正のためにあるのであって、厄介者を捨てて来るところではない、とどなりつけたこともある。しかし、こんなことを言っ歩いていて自分自身が、過去のある時期、わが子に絶望し、かえりみようとしなかったことがある。それゆえに、子供捨ての親の気持がよくわかるのである。

親はこの子を持ったがゆえに、苦しみ、あまりの苦しみからつい逃れてみようととして、遠ざかってみたり、近づいてみたりするのである。そして、忘れようとしても、逃れようとしても、もがけばもがくほど、悩みは増加するのである。障害児の親が、自らおかれた境遇を知り、親と子の幸せ作りに参加するようになるまでには、何年も悩み続けねばならず、またそこまですれど達しなくても、親としての義務感を持つにいたるまで、長い長い悩みの期間が続くのである。

子供に会いに出て来ない親達に、理由を聞くと、暮らさし向きがきびしい、忙しい、他の子供に手がかる、と言う。中には、面会に行っても子供が喜ばないとか、別に良くなるわけではないとか、たいして用事があるわけではないのに一日もつたいない、にはじまって、もうくたびれた、あの子さえいなければこんなに苦勞をしないで済む、もうだめなんだから、と言って、子供との愛情に赤信号が出ている親もいる。

しかし、この赤信号は、ときには黄色に変わり、あるときは青にかがやき、陰で子供に向かって手を合わせ、泣いているのが親達なのである。

出て来ない親達は、はじめそれらしい理由を並べてみるが、どの理由も

理由にならないことを、親自身がいちばんよく知っていて、パパが「あなたの子供さんが、来ない親をいつまでも待って泣いていますよ」と一言いうだけで、みんな涙をうかべてしまう。子供のために、強く生きて行きましようと言って肩をたたいて帰ると、次回の面会日には必ず出て来ていて、私と目を交わすと、心の中で「ありがとう」と互いに言っているのである。

親の会は、親同士語り合い、悩みを分かち合うためにも、必要なのである。自らの不幸に閉じこもってしまう親のためには、なおさら必要なのである。

そして、いちばん必要なことは、わが子の将来の展望をし、わが子の幸せを見つけ出し、それを確信するために、力を合わせるために、存在するのである。

*

他人の道は、

平らも、下りも、登りもある。

だけど、私達の行く道は、

断崖をよじ登る、山道。

「パパ、手をはなしたら落ちるわよ。」

「ママ、しっかりつかまっとれよ。」

不毛の荒野から

(一)

最近のことで、私達自身がとても考えさせられ悩まされていること、親の会全体でいちばん困っていることを紹介していきながら、「このことが、この本を書くきっかけになったことをお伝えしたいと思います。」

前に病院を年齢制限で退院させられ自宅に戻ったS君が、銀行強盗をして、親の会がこの子の引き取り先を探したことを書いたが、S君の症状はてんかん発作による軽い脳性麻痺だったのである。そのS君が、なぜに大人精神病患者達の中にまじって入院しなければならなかったのだろうか？わが子のことしか知らない、精神病に對しまったくずぶの素人の私達にさえも、あの病院の雰囲気は、全然S君とは異質のものであることは理解できた。

そして、つい最近、私達の親の会の中に、同じようなことがまたあった。

私達の長男M君がお世話になっている施設で、M君が二十才で退園して行った。M君は、施設では割合おとなしく、小さい子供の面倒もよく見て、知能は低いなりに、先生の言うことをよく聞き、まあまあの子であった。十六才のとき県立の成人施設に入所を申し込み、十七才のとき入所が内定しているということで、私達の会員の中でも、この問題に関しては、比較的子供の症状が良い方であったことも含めて、心配のない方であった。なぜならば、まだ施設には、十八才を過ぎて行く先も定まらないまま措置延長をしている重度の子がたくさんいるからである。

しかし、M君は、成人施設に入所が決まっているとは言うものの、先方に空きが出なければ、行くことが出来ないということで、待っていた。成人施設に空席が出るということは、要するに、施設の入所者が死ぬか、施設を増設するか、どちらかなのである。

最初の二年は施設の空席が出るのを待っていたが、次の二年は施設の増築にさいしての入園待ちの組に入ってしまった。そして途中で児童施設の年齢制限二十才を過ぎて、自宅に戻されてしまったのである。

母親と父親は、M君が十九才の頃から、必死になって町役場や福祉事務所に交渉に通ったが、ついにやむを得ず、わが家に引き取って行くことになった。M君は施設ではおとなしいのだが、在園中も、自宅に帰ると狂暴になり、近所の駐車場の車のバックミラーをもぎ取って歩くなど、とかく問題を起こしがちなので、親は、役場や福祉事務所に泣いてたのんでいたことだった。

この親が役場の人から聞いたことや、私達が世話になっている施設の関係者の説によると、施設に入れてもらえる条件の最優先順位は、両親が死ぬか、措置対象者があばれて近所に多大のめいわくをかけるかでないかは入れないということで、児童施設も成人施設も、そのためのいくらかの余裕を残してあり、通常の事態でいくらか措置者が待たされても入れないが、いったん何か問題が起きると、さっさと入れてしまうということであった。M君は自宅に帰ると、さっそく、親が心配していた通り、車のバックミラーをもぎ取って歩き、近所の店のショーウィンドウを割り、店の中へド口をほつり込んで歩き、そのたびに、親が泣いて謝りながら弁償して歩く毎日が続いた。

そして、幸か不幸か、近所の人達の苦情が、町役場や福祉事務所に殺到するに及んで、やっと措置してもらうことが出来たが、行った先は、成人施設に空きがないため、S君の場合と同じように、大人の精神病院だったのである。

問題が起きなければ手を打つことが出来ない状態、これが障害児(者)に与えられた福祉なのである。しかも、人間をまるで動物のようにほつり込んでしまう。動物だって、仲間のちがうおりに入れれば、どうなるだろう

か？

いま、世をあげて、社会福祉のかけ声と教育権保障の高まりの中で、くに児童施設を始め養護学校、特殊学級等の増設と改善がなされ、比較的重度の在宅の障害児にまで陽の当る機会が増え、このこと自体は、大變に結構なことだと私達も思うし、そうあってほしいと念じてきた。

がしかし、これらの教育の恩恵を受けた障害児達が、いずれ卒業し、何の対策もなしに、社会に、家庭に、戻ってきたときのことを考えると、ぞーっとするのは、単に私達だけの危惧なのだろうか？

まるで、障害児は、成人の年齢や卒業の年齢で、育ちが止まっているとも思っているのだろうか？

特殊教育を受ければ、養護学校を出れば、年齢に達して施設を追い出せば、それでこの子達は、障害が取り除かれるのだろうか？

私達親から始まって、すべての関係者が、じっくりと考えねばならない大事なことは、すべての障害児に教育を施せば、施したがために、次の段階の受け皿を用意し続けて行かねばならないということなのである。

水を掛けるようなことを言うかも知れないが、特殊学級や養護学校にわが子を通わせたり、施設に措置してもらって、とても良くなったと手ばなしで喜んでいる親達に、警告したい。

「あなた方が申しておられる、とても良くなったのとてもは、どのくらいのとてものか、一度じっくり考えて見ていただきたい」と。

この目まぐるしい生存競争の社会に適応出来るほどのものが得られたとしたら、大變結構なことであるが、おそらく、そんな障害児はいないのではないかと思われる。数パーセントの児童は、曲がりなりにも、社会復帰の道をこの中から歩み出すだろうが、残りの大半は、生涯をなんらかの形で保護してあげなければ、生きて行くことが出来ないと思う。

昔は、大家族の中で、こつした障害児達が一生を埋もれて、むしろいまより幸せに生きた子がたくさんいたと思われる。また、医療等の未開発により、生命の存続期間も短かったとも考えられる。さらにいくらかの軽い障害児では、さほど生命をおびやかされるほどではない、おあらかな社会であっただろう。声を大にしなくても、教育を施さなくても、施設がなくとも、自然の中で、家庭の中で、守られ、それぞれに命をまっとうするこ

とが出来たのである。

しかし、この現代の大変化してしまった世相の中での障害児達は、まったくの不毛の荒野の中に、置き去りにされようとしているのである。

私達は思う。

現代社会は格段の進歩をとげて、逆に彼等を住みにくくしてしまっただからこそ、本当の福祉が必要になってしまったのだと！

いや、現代社会は進歩しながら、むしろ障害児を生み出し、そして、障

害児が生きて行くことをこばむ世界を新たに作り出ししているのだと！

そして、名ばかりの福祉でお茶をにごしているのだと！

もう一度、声を大にして叫びたいと思う。

全児童就学体制の中から、続々と出て来るであろう障害児達の成人になったときのことを、いったいどうするのか、どんな対応策があるのか、どんな準備があるのか、ということをし！

児童期のたった九年の教育のことではないのである。彼等の一生のことなのである。親が死んだあとまで続く、長い長い彼等の生涯のこの世の生存競争の格差は、ますます広くなり、生きて行くことをこばむ社会が立ちふさがって、嵐が、不毛の荒野に暗雲をともなっておとずれようとしているのである。

子供達の将来のことを心配していると、いろいろと自分達自身のことも含めて、深く考えさせられるのである。

そして、死ぬほど思いつめて、枕を涙でぬらしている仲間の母親達のことを想うと、もつと胸が痛むのである。子供達の将来のことを心配していると、いろいろと自分達自身のことも含めて、深く考えさせられるのである。

そして、死ぬほど思いつめて、枕を涙でぬらしている仲間の母親達のことを想うと、もつと胸が痛むのである。

ときどき、いても立ってもいられなくなつて、母親達をつれて、県議会を始め、県社会部その他の機関に陳情に行くと、えらい先生方は、「わかりました。お気の毒ですね、まあしつかりがんばって下さい」とおっしゃる。「本当にわかっているのか」と疑問を感じながら、まるで乞食のように、お願いします、お願いしますとしか言えない私達なのである。腹の中では、ピカピカにみがき上げた石造りの庁舎や、ふかふかのじゅうたん敷の議会応接室の豪華さに、やり切れない怒りを感じながら、この何分の一、いや、何十分の一の費用で、子供達の一生を託せる施設が建つのに、と思うのは、障害児を持つ親のひがみだろうか？

何もわからない母親が「会長さん、政治って弱い者の味方なんですよ？」と、パパに聞いても、何も答えてあげられない。

もうだいたい以前のことであるが、障害児の教育後や成人したときのことを役所に陳情に行つて話していたら、結局親が面倒みるのがいちばん子供にとって幸せなんだから、家庭に帰せば良いというのである。いまでも役人の中には、だいたいこんな考えでいる人達が多いのではないかと思う。言いたいことが山ほどあつても言えないくやしさと、「このわからず屋め」ということが頭にカーッと血をのぼらせて、そのときは役人のえり首をついつかんでしまったおぼえがある。

あるとき、地方政治家にお願いに行つたら、その政治家は、授産施設や

更生施設を作るのに、障害者一人当たりの施設建設費が約一千万円かかる、それに施設運営費はその何倍もかかる、だから一千万円ずつ親にくれてやったらどうだろうか、と言うのである。パパはその言葉を聞いて、「ばかやるう」と言って立ち上がった、みがき込んだ床につばをはき捨てて出て来てしまったのである。

こうした無理解、無知な人間は、役人や政治家だけではない。私達障害児の親達の中にも、たくさんいるのである。

私達が親の会のメンバー達と相談して、施設作りを始めた初期のことであるが、ある重度障害児の家庭に、仲間に入らないかと相談に行ったら、子供を施設に入れると障害児扶養手当をもらえなくなる、家を新築した月賦の足しにしているので断わる、というのである。十七才にもなった自分の子を、四畳半の部屋に鍵を掛けて閉じ込めておいて、手当を家の月賦に回しているという。まるで昔の娘を売り飛ばす親の心境にも似ていて、子供をどうしようが、自分の勝手だというのである。結局、私は考えるに、与えられた福祉なんてものは、大なり小なり、こんなものじゃないかと思うのである。

それだけに、最近ますます考えることは、親自身で仲間達を募って、自分でかち取ったわが子の将来でなければ、そして、自分達が最後まで死ぬまでかかわり合うものでなければ、本当のわが子の幸せはかち取れないのだ、と思うに至ったのである。

病院や児童施設での子供達の親は、いつもびくびくしている。先生や施設長に余計なことを言うと、気に入らなければつれて出て行け、と言われるのが恐ろしいのである。

まるで、いも虫のように小さくなっている親達も、いつかは爆発することもある。それが、薄光会なのである。(薄光会については第三部で詳しく紹介。)

(11)

おこりついでに、もう一つ、この胸の中の怒りをぶちまけてみたい。

これも、もうすでに何年も昔のこと、いまでは笑い話にしかないが、当事者のパパにとっては、苦い思い出の一つなのである。

パパが県自閉症親の会の代表であった頃、さかんに県社会部を始め、県議会などに陳情していたことで、コロナーの建設の件があった。私達の団体の数倍も数十倍も人数をかかえている千葉県精神薄弱老育成会の方々も、さかんに陳情、運動していた様子であった。

そのうちに、建設計画の具体化が進み、学識経験者と一部の医師等も含めたコロナー建設委員会のようなものも発足し、場所も千葉県夷隅郡大多

喜町ということ、いよいよ軌道に乗ったかに見えた。県議会への予算上程待ちとも聞いていた。

建設地の地元町も誘致体制が固まっていて、計画は不動のものであるとのことだった。長年の夢と希望がかなえられるうれしさに、親の会はこおどりして喜んだのは勿論のこと、そのコロニーの中に、自閉症も扱っていただけのように、また陳情を行なう私達なのであった。

そして、ある夏の日、洪水が出るほどの大雨が降った。大多喜のコロニー建設予定地も洪水による土砂くずれに見舞われ、消えていた。私達の希望の星も夢も、夏の日の一晩の雨水と共に消えて流れてしまったのであった。

怒り心頭に発したのは、それだけではなかった。お流れになってしまった計画が、二年後まで私達を待たせ、まだかまだかと待っていた私達がしびれをきらして問いただしたところ、実はあの計画は土砂くずれがあったため中止になり、今度、袖が浦にある現在の施設を拡張することになったというのである。ついては、お宅の会の会合に説明にあがりたい、ともいうのである。

あいた口がふさがらないとはこのことで、当初の話では、あまり大きな施設を一カ所に集中させるのは良くない、だから、県内に三カ所ほど分散させてコロニーを建設する計画で、その第一番目が大多喜である、とうかがっていた。

そして、なぜに三カ所説が消えて、一カ所集中拡大に変わってしまったのかも、未だに説明を聞いていないのである。

勿論・当時の役所の方々も全部入れ替っていて、私達は文句の一つも言えず、ただよろしく願いますと言って引きさがって来たのである。

その後の県議会で、数十億円の予算案が通過し、袖が浦福祉センターは建設の途上にある。

そして、うかがうところによると、県内の要措置者の七割が収容できる予定だというのである。そして成人施設のみをこの計画からとって見ると、計画書の内容では、従来、更生、授産両施設で二百名分あったものが、取りこわされたあと、第一期工事で三百名に増えるだけなのである。そして第二期工事が予定通り行なわれるという保障はどこにもないのである。

いったい七割という数字は、私達をまた安心させていたのであるが、よく考えてみると、完工時時点の七割は、すでに三割があぶれて、収容児が一斉に入ってしまうと、翌年からまた零割ということなのである。いま、十四、五才前後から下の年齢の子供達は、先に入った者が死んで出ないことには、どうにも行くところがないのである。つい最近の情報によると、いよいよこの昭和五十三年度に三十五億円をかけた千葉県福祉センターはオープンすることになったさそうであるが、その中の精神薄弱者更生施設

成人棟は、百人分増設に対してすでに百八十人の申込者が殺到しているとのことである。

(三)

この世の中でいちばん腹が立つことに、いま私達は出くわしている。それは、福祉を食い物にするダニ達のために、私達の薄光会の計画が先に進めずに困っている、ということである。

去年、県内のある認可法人が起こした二つの事件は、県社会部障害福祉課の私達薄光会に対しての指導にまで影響を及ぼした出来事だった。一つは施設措置費の食い逃げと出入業者に対しての未払い、一つは施設建設費の資金的裏付がないのに建設工事を強行して業者とトラブルを起こすという、いずれも金銭上の問題であった。

このため、薄光会設立中の私達にも、特に資金問題では相当きびしい条件が付けられ、親達といえども補助金以外は百パーセントの資金調達を指示され、事務局長をやっているパパを徹底的に悩ましていたのである。たとえば、第三者の寄付金の申込は、銀行預金の残高のみでなく凍結されていることが証明されなければならぬとか、相当なきびしさなのである。この大事な時期に、なんとというばかり達の事件なのだろうと思うと、くやくしてくやくして、夜も眠れないのである。

願わくば、二度とこんな事件の起きない世の中であってほしいことと、世の人びとがみんな監視することこそ大事なことでと思うのである。

かわいそうな障害児(者)を、食い物にするなんてことは、重罰にあたいするようにしてほしいと思うのは、単に私達だけの気持であろうか？

*

「」のおろかな父と母

おまえ達、

一度でいいから、

この父に、この母に、

「なぜ生んだ」と叫んでみてくれ。

この手を合わせて、

祈りつけて来た私達親が、

おまえ達の蘇生を期待するのは誤りなのだろうか？

まるで、春になったら、

草木が芽をふいて生きかえるように、

思いもよらない出来事が、
私達親子のあいだには、ないのだろうか？

精神薄弱は、
なおるものではないと、知りつつも、
神がもし、この世にいるのならと、
おまえ達のために、手を合わす、
このおろかな、父と母。

誰かの詩に、

「働けど、働けど……………」

というのがあつたけど、

私達には、

「祈れども、祈れども……………」

ということになるのだろうか？

私達の心の中に、

おまえ達二人を生んで育てて来た、

遠いはるかな、日々からの悶え！

知恵！

与えてあげられない、このもどかしさよ！

いつの頃からか、

おまえ達が代わるがわるわが家に帰るようになった時から、

そい寝して、

赤ちゃんの目のような、

ひとみの奥をみるくせが、

ついてしまった、私達。

この目のにこりなき光の中に、

大脳の、奥につながる、

みえないけど、神経の―とすじ―とすじに、

悲しき願いをこめて、

つながれよ、とどけよと、

あふれ出る涙にむせびながら、

祈り続ける、

このおろかな、父と母。

夢！

明日の夢を、明日の願いを、
子供達に託すことが出来たら、
世の苦しみをなんて、なんてつらからう。
流す涙も、なんでにがからう。

胸を切りさかれてしまった、
この心の痛みを、
お前達を抱きしめることでしか、
いやすことが出来ない、
このおろかな、父と母。

*

拜啓、総理大臣殿
水上勉さんのように、
拜啓、総理大臣殿と、
私も手紙を書きたい。

ヨ一子ちゃんのために、
一枚と、
マー君のために、
一枚。

そして、
悲しみにたえられなくて、
死んで行った、
親達のためにも、
一枚。

それから、
うんと大きい紙に、
マジックペンで、
いま、十五才以上の子供を、
施設にあずけている、
日本全国の親達のために、
もう一枚！

十七年前、パパはダムの男であった。鹿島建設黒四ダム作業所に働いていた。パパとママの出会い、北アルプスの麓の大町というところの、古びた病院の一室であった。

木造の戦争前に建てられたらしいこの病院は、以前は町立で、いまは市立ということらしく、大きな桜の木が植えてあって、パパが胃を悪くして入院したのは、ちょうど、この桜の木が満開の頃であった。

病室の窓をあけると、北アルプスの山々が目の前にせまっていた。手を出せば届きそうな平野がちょっとだけ広がっており、その先に小さな山がかさなり合っていて、その上に高く高くそびえる北アルプスの山々が真っ白い万年雪をかぶって、まるでぬけるような青い空といっしょに下界を見おろしているようなそんな景色が、パパの記憶に残っている。

二人部屋の病室の、三十才くらいの相棒のところに、毎日見舞いに来る二十四、五才の女の人があった。それがママであった。

最初は、相棒の奥方かと思っていたら、妹だと紹介してもらって、急にどぎまぎしてしまったのであった。

二カ月の入院中と、一カ月の通院加療中に、私達は深く愛し合うようになり、東京本社と呼ばれて大町を去る頃には、泣いて別れるほどにたっていた。愛し合ってちょうど一年目に、現場に復帰したパパは、工事現場の片すみの社宅に、愛の巣をかまえた。

とても幸せであった。そしてマー君が生まれたのであった。

長野県大町市大字平、鹿島建設黒四ダム工事骨材プラント

十五年前の一月二十九日の夜は、粉雪が降っていた。工事現場の投光器に照らし出された粉雪の降るさまは、幻燈機の中の絵写真のような不思議な世界であった。雪はまるで光の中で、乱舞する紙吹雪のように、静かにキラキラと光って降り続いていた。

工事連絡用のほろがけジープのハンドルをにぎったパパの手は、いつになく心の高鳴りを伝え、「丈夫で、かしこい子が生まれますように」と祈る気持が、胸をキュツとしめつけるのであった。

ときどき助手席のママの「あなた、痛い」といううめくような、そして少し甘えるような声を聞きながら、町の産院に向けて、ゆっくりと、出来るだけゆれないように、そして心は早鐘のように急ぎながら、車を走らせて行くと、二本のヘッドライトの光が夜の山道のカーブを曲がるたびにいたずらに空のあなたにほろり出されて、降り続く雪の乱舞を浮き上がらせる、そんな夜であった。

翌日の朝。明るく晴れて、ピカピカの屋根の雪が真つ白にかがやいていた。道路も畠も、森も遠い山も、空までもが、白く神々しく光っていて、どこからか鐘の音がひびき渡って来そうな、そんな朝であった。

産院のおばさんが、赤い頬と白い歯を見せて、ニコニコ笑いながら、庭の雪かきをしていた。

遠くから私を見つけて、「お早よう」と声をかけて来た。

私は走っていた。長くつの下で、キュッキュツと雪が泣いて、ひたいに汗がたまっていた。

おばさんの「男の子。母子とも元気ですよーっ」という大きな声を背中に聞きながら、パパは、体の中の熱い、何かつかえていたようなものが、一気にこみあげて来て、ただもう急いで、礼をすることも忘れて、ママのところへ走り込んで行った。

「おれ、きょうから父親。」　ニコニコ、

「おれ、今日からパパ。」　ニコニコ。

職場で働いていても、自然と笑いがこみあげて来るのをどうすることも出来ない。

「おーい。お目出とう」と声がかかると、また、頬がゆるむのであった。名前を決めるのに、三日も考えてしまった。可愛くて、大きくて、丈夫そうで、かしこそうで、どこも何ともなかったマー君であった。

社宅の共同風呂にマー君を抱いて行くと、仲間達が「おーい、いい子だなあー」と言っただけでほめてくれるのがうれしくて、いつも抱いて通ったものである。

仕事が終わってうちに帰ると、ママが田舎のおばあちゃんといっしょに夕げの仕度をしており、背中にマー君がちょこんとおんぶされていて、「パパ、お帰んなさい」とママが言っていると、マー君が、ピョコピョコと頭を振って見せて、みんなを笑わせたりしていた。

(二)

男達の戦争のようなダムの工事が完成して、ママとマー君といっしょに暮らした二度目の冬も過ぎ、暖かい春の日ざしが、出来あがった黒四ダムの長い長いコンクリートの堰堤の上にもそそぎ始めた頃、ヘルメットの仲間達が一人、二人と姿を消して行き、大自然の静けさが山々に戻り、黒部はパパの青春の石碑のようにだまってしまった。

骨材プラントの現場事務所には、ほんのわずかの人びとが机に座って報告書を書き、パパも最後の機械の点検をして歩きながら、マー君の将来のことや、自分のこれからの人生のことを考えながら、日一日を過ごして行った。

幅広い工事専用道路をうなりをあげて走り廻った六十台の二十五トンダンプも、河の中で巨岩を押しころがしていたD ナインブルドーザーも三十万トンの骨材ストックヤードと数千メートルもの長いペルトコンベヤーも、数百万トンの河砂利をすくいあげて来たマリオンのパワーショベルも、どの機械もどの設備も、戦いに勝った勇者の面影はなく、まるでいまはスクラップヤードに引きずり出された製鉄所の鉄くずのように、地べたにはいつくばって眠ってしまった。

ブレハブ作りの独身寮の方から毎晩聞こえて来た男達の酒盛りの歌声も、聞こえて来なくなった。あのやかましかった機械整備工場のカミンスエンジンの調整テストの爆音も、消えてしまった。

野に渡る風の音がよみがえり、小鳥のさえずりまで聞こえて来る。

そして、野山の緑の色がさわやかな風に乗って、北アルプスの頂に向かって、日一日と広がって登って行くのである。

大町に春が来ていた。パパにも幸せな春であった。

(三)

東京の下町の生活が始まった。ダムの仕事終わって、会社を移ったパパは、気が抜けた風船のように少しフワフワして、都会生活が初めてのママは、反対に力チ力チになっていたようである。ママの固くなっていた理由は、姑である実家のおばあちゃんといっしょの暮らしのせいでもあった。

あの頃の東京は、オリンピックの工事が始まっていた。道路にはやたらと穴があいていて、機械があちこちにのさばっていて、まるでまたダム工事のようなところに一家が移り住んだのであった。

マー君の教育のために東京に行こうと言ったのは、ママであったのだが、そのママが、先に悲鳴をあげた。

「パパ、東京ってうるさいところだね。」

私達夫婦は、山の中から出て来ての忙しさと、やかましさに、きりきりまいさせられながらも、平和な日を送っていたのであった。パパは、ダムの建設機械の技術を生かしてある会社の技術者として迎えられ、電車に乗っての毎日の通勤が始まり、マー君は、ママと手をつないで、買物や散歩にあけられて、近所の人達に愛敬をふりまいて過ごしていた。

「マーちゃん、どこ行くの？」と、近所のおばさんに声をかけられると、ゆびを差して見せたり、「マンマ」「ママ」「パパ」「アンヨ」「ヨイチヨ」の順に、言葉が出て来て、私達やおばあちゃんを喜ばせていたのである。

そして、東京の下町のどぶ板をふんで歩く暮らしは、あつという間に半

年の月日が通り過ぎて行き、ママのおなかには二番目の子が出来て、パパは、もとのダムのときのようにな仕事仕事に追われて、忙しい毎日を送るようになった。

やっと取れた休みの日など、パパはマー君をつれて散歩に出たり、近所の神社のハトをみせにつれて行ったりもした。

マー君は「パパ、ポッポ、ポッポ」と言いながら、ハトを追いまわし、神社に来て腰を下ろしているお年寄りの目を細めさせていた。

「パパ、マーちゃん、ちよっと知恵が出るの、遅いのじゃないかしら。」

「そうかい。でも男の子は遅いっていうぞ。」

「うーん、だけど、それにしても、少し遅いみたいよ。」

「心配ないさ、うちはみんな頭は平均以上の血統だから。こいつ、いま、出しおしみしてるのだよ。そのうちにどんどん物をおぼえて、ママがびっくりするぞ。」

「でも、おばあちゃんが言うには、私の教え方が悪いというんだけど。」

「そんなことはないよ。親が子供に言葉を教える方法なんてないさ。いつもお前がやっているように、子供に語りかけているうちに、自然におぼえるんだよ。」

でも、やっぱり心配だから、一度小児科に行ってみようと思うのだけだ。

「そうかい。そんなに心配なら、一度行って来いよ。それに、こここの夜泣きが多いみたいだね。」

「そうするわ。だっておばあちゃんが心配してるし、私だつてとても心配なんだもの。」

ママが実家のおばあちゃんと折り合わず、とうとう一家で、東京を出て千葉に移り住むことになった原因のマー君の知恵遅れは、こうして始まったのである。

(四)

国電・検見川駅を降りて・ゆるい坂を少し登ると、広い、長細いあき地を中にはさん釜が両側に広がっていた。

あき地の高い空の上には、送電線が何本も、東西に向かって走っていて、電線の下は、はげちよろけの枯れた芝生と、ところどころに近所の人達が思い思いに作った花壇に、いまは冬のため花がなく、レンガと石ころだけがやけに目立ち、荒れていた。

道の両側に家々が軒をつらねて建っていて、道が幅広いせいか屋根が低く感じられ、家のつらなりが東のはずれでぶつとりと切れて、その先は畠がどこまでも遠く、広く広がっていた。

家のつらなりが切れたその畠のすみに、二階建てのアパートが一軒建っていて、鉄製の階段をカンコン、カンコンとひびかせて登りきると、三番目の扉に手製の表札がかかっていたのである。

「マーちゃん、ほら、電車が見えるぞ」と、パパがゆび差す方向の畠の中を、黄色い電車が見えがくれに走って行くと、乗物好きのマー君は、喰い入るようにじーっと見ているのであった。

そして、パパが会社の車に乗って帰って来ようものなら、「ブーブー、ブーブー」と言っ、いつまでも窓から身を乗り出してせがむので、ついには助手席に乘せて、ひと走りさせられてしまうのであった。

三人で、いや、ママのおなかの中のヨー子ちゃんまで含めて四人で、ここに引越してから、マー君の夜泣きが前より少しひどくなっていた。そしてそれだけでなく、昼間も奇異な行動が目立ち始めたのであった。

「マーちゃん、近頃元氣ないね。」

「パパも、そう思う?」

「うーん、ちょっと変な感じがするんだけど、ママ、気が付かないかい?」「そうなの、それが変なのよ。すぐくあばれて、元氣がいいと思っっている、急におとなしくなっ、何かをじーっと見つめて、放心したようにしていたりするの。」

「この前行った小児科のお医者さん、何て言っただ?」

「別にどこも悪くないって、言うんだけど。」

「うーん、もう一度、ほかのお医者さんにみてもらったらどうかなあー。最近、また夜泣きがひどいしなあー。」

こうして、マー君のことを、パパとママが心配し始めたのがまるで合図のように、毎晩のひどい夜泣きが始まったのであった。

ミルクも、パイパイも、抱っこも、おんぶも、おもちゃも、何も通じなくて、「ウエーン、ウエーン」と、高い調子の泣き声を真夜中のアパート中に響き渡らせるわが子に、若い私達は、ただ、もうオロオロするばかりであった。

そして、何より近所にめいわくを掛けることを恐れて、あるときは抱いて、あるときはおんぶして、あるときは車に乗せて、夫婦がかわるがわるに、真夜中の散歩に出るのであった。

子供を育てることがこんなに大変なことであったのか、と、あらためて思い知らされ、そして悩む日々であった。

小児科や神経科の医者は、「別に異常ないと思いますが、一応調べてみましょう」と言い、そして、何度目かの診察の結果、「もう少し、様子を見ないとわかりませんが、そう心配することはありません」と、まるで判でついたように同じことしか言わず、当のマー君は、日一日とマー君の頭

の中に何かが住みついたように、何かが狂ってしまったように、あるときは泣いて泣いて泣き通し、またあるときは緘黙し、二時間も三時間も同じ物に目の焦点を合わせたまま動かさず、呼んでも振り向かず、そしてあるときは、多動が始まり、うちじゅつのあらゆる物にぶつかって行って、ちらかし、やぶり、こわすのであった。

(五)

ヨ一子ちゃんが生まれ、相変わらずのマー君は、三才を過ぎていた。言葉の数は十五から二十くらい単語があったのに、だんだん少なくなつて、五つか六つしか残っていなかった。

ママの必死の病院通いが続けられていた。毎月の生活費は、ただでさえ足りないのに、二人の子供をつれて歩く病院への交通費と治療費に消えて、あすの米代にもこと欠くのであった。

たずね歩く病院では、病名すらも教えてもらえず、大学病院の待合室や研究所の廊下でぐずって泣く二人の子供をあやししながら、不安と焦燥の日を、来る日も来る日も、過ごすママなのであった。

ときどきパパも仕事を休んで、いつしよに行つたが、これという情報を得られず、失望のうちに、わが家につかれて帰る日が続いた。

沈んでいるかと思うと多動が始まり、多動のあとは黙りこくるといったり返しが続き、週に何回かは、夜泣きが止まらず、二時間も三時間も泣き通しに泣かれ、パパもママもくたくたになるまでつきあわされるのであった。

夜中の十二時や一時頃、泣きわめくわが子の口を押えて、静まりかえっている住宅街を、どろぼうのようにぬき足さし足でかけ抜けて行くとき、あまりのつらさと情なさに、思わず涙がこみ上げて来るのをどつしよともなかつた。

子供をつれての夜中の逃避行は、ときには夜が明けて空が明るくなることさえあった。そして、パパは寝るひまもなく、赤くはらした目をこすりながら、会社に出掛けて行った。

こんな状態の中では、生まれたばかりのヨ一子ちゃんをかえりみる間もないほどであったが、ひよっとしたら、この子もという不安におびえ、私達夫婦は、生きた心地のしない暗い思いの日を送っていたのであった。そして、ますます病院通いに精を出す毎日が過ぎて行った。

(六)

診察の医師達に「夫婦の家系に、精神異常者があるか」とか、「出産の

ときは正常であつたか」と、同じ質問を何度も何度もあびせられ、そのたびに、もうほとんど暗記したように同じことを答えていた私達夫婦であつた。

そして、何人かの医師達は、骨親の愛情をつたぐるような発言をし、それだけでなく、もうギリギリの精神状態に追い込まれていたママの心の中心に、するどい刃物で切り立てるようにして、新たな傷を作るのであつた。このために、ママは、「本当に、私の育て方がいけないのだろうか？」と考え始め、狂つたように自分の心を責め、反省し、そしてだんだん無口になつてしまつた。

マー君の状態は、目を追つてひどくなり、四才を過ぎた頃には、二人の親の手が届かない、どこか遠くの世界に生きて行こうとするわが子を見ているようであつた。

たとえば、いちばん気になることは、二人の親と目が合わないことである。そして、抱っこも、おんぶも好まなくなり、パパやママが、「マーちゃん、マーちゃん」と呼んでも、振り向くことさえ少なくなつていたのである。

ときどき多動が始まると、ママの鏡台の引出しを引き抜いて、化粧品類を二階の窓から投げ落とし、食器を柵から持ち出して投げ落とし、障子の棧をはしこのようによじ登つて、棧を総なめにへし折り、ふすまやカレンダーに手をかけてベリベリとやぶり捨て、あるときは、本や新聞雑誌類をかたつぱしからやぶりまくつて紙くずの山をきずき、あるときは、流しの中や回転中の洗濯機の中にまで入つて立つていたりして、ママをふるえあがらせるのであつた。

買つて与えたおもちゃをあまり好まなくなつたのもこの頃からで、むしろ、食器やスプーンなどをガチャガチャといじつて何時間も遊んだりすることが多く、うちの中では、必ず親のいない方の部屋の片すみに行き、おしりを向けて、何かをやつてることが多くなつたのである。

ママは、そんなマー君を、うちの中にはかりおいてはいけなかつたと思つて、出来るだけ外につれ出して、お友達と遊ぶように仕向けるのであるが、よその子供達と交わることが出来ず、一人置きざりにされて、土や石ころをいじりながら遊んでいるようであつた。

(七)

あるとき、ヨー子ちゃんを背中におんぶして、いつものように、マー君を砂場で遊ばせながら、洗濯物を取りこんでいたママが、砂場にしゃがんでいるはずのマー君の方に目をやると、そこにいままでいたマー君がこつせんと姿を消していた。

半狂乱になって、ママは近所を走り回ったが、マー君の姿はどこにも見当たらなかった。その

うちに、近所の奥さん達もいっしょにさがしてくれて、騒ぎがだんだん大きくなった。ちよつど会社の仕事の都合で千葉まで出掛けていたパパは、何か胸さわぎをおぼえ、会社に戻る途中、検見川のアパートに寄って見ると、案じていた通りであった。

「いつ頃からいないのだ?」

「二時頃よ。あれから、ずーっといままで近所の人達といっしょにさがしているの。」

「三、四、五、いまは五時。どこへ行ってしまったのだろう?」

まず交番だ。会社の車が来たばかりの道をうなりをあげて走った。

「おまわりさん、うちの子供をさがして下さい!」

私達夫婦の泣き出しそうな顔をじーっと見ながら、交番のおまわりさんはちつともおどろかないふうで、立っている。

「あー……………」

たまりかねて、ママが横から口を出すと、

「困りますね、お宅のお子さんはい。線路を歩いておったのですぞおー。それに、電車を急停車させて、もう少しのところで死ぬところだったので、駅長室に保護されているから引き取りに行ってください。あ、それから、お父さんは帰りにちよつとこちらに立ち寄ってください。調書を取りますから。」

ああ、良かったと、私達夫婦がやっと生きた心地になって駅長室をたずねると、マー君と駅長さんが二人、すみの方で、

「坊や、おうちどこ?」

「……………」

「名前は?」

「……………」

「どこに住んでるの?」

「……………」

「おじさん、おこらないから言ってみな。」

「……………」

一方通行の会話をやっているところであった。

病名のわからない病気であるとわけを話し、職員の方に頭を下げて、わが子を引き取り、ママに先に帰ってもらって交番に戻ったパパは、油をしばらくられながら、始末書を書かされたのであった。

うちに帰ると、マー君は疲れたのか、もう寝ていて、ママが赤く泣きはらした目でパパを迎えてくれた。

やれやれと思いながら、じーっとわが子の顔を見ているうちに、あついても私の目にこみあげてくるのであった。

(八)

心ない医者に、また母親の愛情論をぶたれたママはその日以来、完全に心の病いに取りつかれてしまい、パパに内緒で、死を覚悟していた様子であった。

有方、少し早目にうちに帰ったパパはアパートの扉のあいだにはさまれていた白い紙を手にして、立っていた。

夕暮れのうすあかりの中で、走り書いてあった文字を、三行も読まないうちに、パパは階段をひとつ飛びに飛びこえて、いま来た道を脱兎のごとくかけ出していた。

「電車に轢かれたら一瞬のうちに即死だろうね」と言っていたママの言葉が思い出されて、まず踏切りに向かったのである。

「神様、私からママを奪わないで下さい！」

まるで呪文をとなえるように、同じ言葉が頭の中でグルグルとまわっていた。駅前の踏切りまで走り通しに走った。息が苦しくて、途中で止まりそうになったが、止まると、ママとマー君とヨ一子ちゃんがこの世からつれ去られてしまうような気がして、死んでも止まらないぞと、心に言い聞かせながら走った。

ふだん歩いて十二、三分の距離を、三、四分でかけ抜けていたのに、駅前でこんなに遠いと感じたのは初めてであった。踏切りの方へ向かって道を曲がったとき、四、五十メートル先に、ママが、パパの家族がいた。

踏切りの警手に向かつて、ヨ一子ちゃんを背におぶったママが、しきりに頭を下げて何か話している姿をこの目にとらえて、ホッとしたりとたんに、ひざがしらがガクツと音をたてるようにしてくずれてしまい、その場へたりこんでしまったパパは、どうにも腰が立たなくて、動くことが出来なかった。

「パパ、ごめんね、もう私、大丈夫よ。」

一言いったきりで、ママは何も言わなかった。

そして、私も、何も言えなかった。帰りの途中の店先でおせんべいを一袋買って、ポリポリかじりながら、四人で黙って歩いた。あふれ出た涙の味と、塩せんべいの味がまじりあって、とてもしょっぱくて、悲しい味でした。

夕やみの中で、家々のあけはなれた窓からもれたあかりが道までこぼれていて、家族の団らんの明るい声が聞こえて来て、おいしいおかずのに

おいがして、ああ、よそのうちは、平和で幸せそうで、いいなあーと、思うと、また新たな涙がほほをぬらしていた。そして、いつまで続くかわからないわが子の病いを案じ、ママまでも心の病いに冒されてしまった不幸な家庭を考え、パパは「おれだけは、しっかりしなくては」と、心に言い聞かせるのであった。

(九)

踏切りのことがあってから、ママはまた、もとのように元気になっていった。パパが、前にも増して、家庭のことに細かく気を使ったせいもあった。

どんな細かいことでも、互いにかくさず語り合うことと、もし本当に死ぬなら、四人でいっしょに死のうと、約束したせいもあった。

そして、ママは強くなっていった。一度死を覚悟した者はみなそうであるというが、本当にママは強くなっていた。

パパは、その頃、子供の治療費と生活費を少しでも多く得るために、ある小さな建設会社の起重機の運転手としてやとわれていた。工事がぎついのと、子供のことが重なって、胃が相当に悪くなっていたのであるが、無理をして勤めに出ているうちに、とうとう血を吐いて倒れて、入院・手術をすることになってしまった。長野県の病院で一度良くなっていた胃が、この一、二年のうちの心の痛みと体の無理がたたって、すっかりだめになり、切ったときには、もうあと少しで手遅れになるところであったと言われた。

二カ月の入院中に、ママは、涙ぐましいほどの生活との闘いをしいられていたが、踏切りのこと以来の強さが、これをみごとに乗り切ってくれたのであった。

パパが入院中、六割に減ってしまった生活費を、なんとかやりくりしながら、足りない分を内職にまで手を出すかたわら、子供達をつれて、毎日のようにパパを元気づけるため、笑みをうかべて見舞いに来てくれた。

ぐちひとつこぼさずに、黙ってたえていたのであった。

忘れられないのは、パパが入院中に、ちょうど東京オリンピックが開催されて、日本国中がお祭り騒ぎでわいていたことである。療養中の病室で見るテレビの画面の中に、自分達が働いて出来上がった建造物が次々と写し出され、あっ、あの橋は工事中仲間のMさんが事故で足をなくしたことがあった橋だとか、あの高速道路の柱はおれの運転していた起重機が倒れそうになってやつとすえ付けたものだとか、突貫につぐ突貫工事の連続で深夜作業が続いて二日も三日もうちに帰れなかった想い出が、走馬灯のように頭の中を駆けめぐり、とても、感慨深かったことである。

そして、マー君のことや、病気で痛めてしまった自分の体のことや、才

リンピックの感激が、ゴチャゴチャになって、いつも涙で目をくもらせてクシヤクシヤの泣き顔をしているところを、見舞に来たママに見つかって、「パパ、元気出してね。うちのことは心配ないから、気持を楽にして、一日も早く、体を丈夫にしてね」と言われて、パパはただ「うん、うん」と答えていたのであった。

(十)

昭和四十二年三月三日、千葉医大小児神経科から、東京の愛育研究所の平井信義先生あての紹介状を一枚いただいて、子供達を、田舎から呼び寄せたおばあちゃんに託して、パパとママは、平井先生の親の会での講義を聞きに行った。

やっと、たずね求めていた病名と仲間達がそこにいたのであったが、マ一君にあてがわれた病気は、自閉症という、まだ世界中のどの先生にもよくわからない、薬も治療法もない、誰にも手が届かない、遠い世界の病気だとのことで、帰りの電車の中で、「治療教育」という目新しい言葉だけが頭の中をからまわりしていた。

そして、心配していたヨ一子ちゃんが、二才を過ぎても言葉が出ないことを平井先生に話して、みていただくことになったのであるが、私達は、もうそのときは、すでに覚悟をしていて、やはり同じであるかもしれないと心に決めて、診察にのぞんだのであった。

新たな闘いが始まったかのようであった。

先生の言われた静かな環境を子供達に与えるために、私達は新しい住まいを見つけて引越すことにした。

子供達のために、ママの実家から来てもらったおばあちゃんもいっしょに暮らすので、少し大きい家を借りた。六畳二間と台所と玄関と風呂場があった、前よりも広い、平屋の一戸建であった。家のまわりを畠や雑草がおおっていて、あまり静かなのが、むしろこわいほどの場所であった。

あざ船橋市馬込沢字××番地と、表札に書き込むと、おばあちゃんが字と言つ「字」を見つけて、信州の田舎と同じ字があると言つて、喜んでいった。

こちらに来てからのマ一君は、夜泣きもなくなり、毎週二回の平井教室のプレイセラピーにママといっしょに通うようになって、少し落ちつきを取り戻した感じも見られ、おばあちゃんといっしょの暮らしのにぎやかさも手伝つて、家族にもやつと小康状態が続いていた。

ヨ一子ちゃんは二才半になるのに、相変わらず言葉が一言も出ず、女の子ゆえに、マ一君のような多動や異常行動はあまりみられないが、やはり成長するにつれ、親と目が合わず、マ一君と同じ道をたどっていることが

はつきりして来て、私達夫婦は、二人ともであったかと、覚悟させられる
気がついたのである。

おばあちゃんは、可愛い孫達が不治の病いに冒されていることを悲し
まるで小さな生き物をあつかうように、「おお、よしよし、おお、よしよ
し」と言いながら、一日中子供達といっしょに過、こしてくるのであ
つた。

(十一)

船橋の奥の馬込沢のまた奥にあるわが家の三方は、原生林のような雑木
林にかこまれていて、一度この雑木林に入ると、大人でも出て来るのが大
変なところであった。

マー君は、ときどき“脱走”をこころみて、この雑木林に向かつて走り
込もうとして、ママやパパに見つかって、つれ戻されることがしばしばあ
つた。

たまにつかまえるのが間に合わなくて、林の中に走り込まれてしまつて、
なかなか見つからず、私達は泣べそをかきながらさがしたこともあつた。
雑木林の中は、まるで方角がわからないところへもつてきて、そこらじゆ
うがみな藪で、手足にひっかき傷を作りながら歩かねばならず、おばあち
ゃんなどは、とつてい林の中に入ることすらもできないところであつた。
静かで、空気が良くて、申し分ないけど、他にも困ったことがたくさん
あつた。

まず、ママの買物は町まで三十分以上歩かねばならず、パパの通勤は会
社まで二時間以上もかかり、風が吹くと畠の土が舞いあがり、部屋の中ま
で真っ白になるほどであつた。

そして、ある日曜日の夕方、庭で、おばあちゃんと遊んでいたマー君が、
いきなり垣根を乗り越えて脱走した。

おばあちゃんの大声にびっくりしたパパは、マー君のあとを追つて外に
飛び出した。畠の中を一直線にリスのように走つて行くマー君は、あとも
う少しで林の中に入るところであつた。

道を横切つて、畠の中を夢中でパパも走つていた。もうすぐ林の中に消
えてしまいそうなわが子のうしろ姿に、目がくぎ付けになっていて、足も
とを見る余裕がなかった。突然、足もとが空を切つてガツーンと落ち込
んだと思つたら、あつと言つ間もなく、こえだめの中にほうり出されてい
たパパであつた。あとから走つてきたママが、「パパー、こえだめがある
から気を付けてえー」と叫んでいたけど、すでに間に合わず、パパは糞
尿池の中をゴボゴボと泳いでいたのであつた。

平井教室から、都立のある病院の自閉症病棟へ入院することになった。君は、相変わらず多動で、忙しい子供であった。おしめをしたままで、すでに六才になろうとしていた。

この頃から、パパはしだいに子供達に対する愛情を失い、これから始める自分の事業のことで、頭の中がいっぱいの毎日を過ごしていた。

初めての入院費の請求が来たとき、あまりにも高い金額に呆然とし、なおさらに事業を早く始めねばこの高い入院費は払えない、とママを説得して、開業の準備を急ぐのであった。

友人や東京の母にも金を出させて、とにかく会社が出来た。資本金はたったの百万円であったが、代表取締役社長の肩書は、子供のことで打ちのめされていたパパにとって、久しぶりの快拳であり、天にものぼるような気持にひたっていた。

会社は、設立以来、順調にのびて行った。もう以前のように、子供の治療費や入院費にも困ることがなく、パパのポケットマネーで出せるほどになった。

数百万円単位の取引に夢中になって走りまわり、ときには千万単位の仕事も現われ、血おどるおもいで仕事に没入して行った。

ママは、最初、とても心配し、あれこれとパパの身のまわりに気をくばってくれて、たまには仕事のことをいろいろとパパに聞いたりして、わからないまでも、何か自分の亭主が急にえらくなったような気もして、いくらかは幸せそうな様子であった。

しかし、ママには、どこか暗い陰があり、すっかりほがらかになつたわけではなかった。たまに会社の社員がパパのうちに来て、奥様、奥様などとおべっかをつかうと、きまり悪そうに下を向いていて、あとで社員に「社長の奥さん、静かで、何かうれいがあるようで、素敵な人ですね」などと言われると、パパはそういういという言葉が頭の中に引っ掛かってしまったりするのであった。

仕事の忙しさに比例して、だんだん家に帰る時間が、夜の十二時、一時というふうには遅いことが多くなつていった。「ただいま」と言って玄関に立つと、小さな家の中が私の飲んだアルコールのにおいで充満してしまう日が、くる日もくる日も続いた。

そしてママは、そんなパパを、本心から気の毒がり、「大変ですね、御苦労さま」と言つて、あたたかく迎えてくれていた。

客を接待するとお返し接待をされ、お返しのお返しをするというふうには、パパとまわりの男たちは遊びの口実をもうけ、夜の歓楽街をさまよっていたのである。機械を一台売り込むために、もうけの全部を飲み代

に使ってしまったこともあった。

初めておぼえた歓楽街の味は、パパにとってたまらない魅力で、マー君のことも、ヨー子ちゃんのこと、すべての家庭のことを忘れさせてくれるような雰囲気がそこにはあった。

特定の女の人と浮気をするようになると、もう決定的なものとなって、パパをこの世界のとりこにしてしまった。

会社は、パパが夜遊ぶための資金をかせぎ出す道具みだいになってしまった。

夜の交際のせいもあって、相変わらず、会社は売上げをのばし、順調に成績がのびていた。

高級乗用車を買って馬込沢の小さな借家に乗りつけると、いかにも場違いで、パパはちよつとあわてて、家を建てることにした。

ママは、黙ってパパのなすがまにしていたが、もうこの頃には、パパの不行状をすべて知っていて、あの検見川の踏切り事件のときのように、暗い、黙りこくった姿にまた変わっていたのであった。

(十三)

入院しているマー君は、七才を過ぎ、八才になろうとしていた。

家族の中で、パパだけがよその世界に生きていて、ママもおばあちゃんも、二人の子供のために暗い悲しい日々を送っていた。

とくにマー君は、入院してから二年を過ぎると、急に変わり出し、ママの話だと、あんなに多動で元気だった子が、いまは、プレイルームの片すみにいつも寝ていて、食事のときだけしか起きてこないとのことであった。パパは、子供達の近況を遠い世界の出来事のようにただ聞いているだけの自分が腹立たしかったが、のめり込んでしまった遊びの世界から足を洗うほどの勇氣もなく、相変わらずの放蕩を続けていたのであった。

船橋の家を引き払って、新築なつた千葉の家に引っ越してからのパパは、前にも増して遊び歩いていた。

まるで、子供のことを忘れてしまおうとしているかのよつに、泥酔した。そして、心の中で、「金を貯めても、あとをつぐものがあるわけでもないし」とか、どうせ「一生は一度しかないのだから」とか、勝手な理由をつけて、すさんでしまった自分の心を慰めようとしていたのであった。

だが、しかし、いくら酒を飲んでも、酔いつぶれても、悲しいわが心は晴れることがなく、むしろ、もっと強く酔いしれてみたいと望んでいるのであった。

こんな状態が続く中で、二人のわが子達は、確実に悪化の道をたどって行った。

ときどき明け方、家に帰ると、奥の部屋で、たぶん泣いているのである
うと思われるママが、頭からふとんをかぶっていて、その肩先がこきざみ
にふるえていた。

おばあちゃんが暗い表情でパパを迎えに出て、

「パパ、もう少し早く帰って下さいよおー……ママがかわいそうですよ」
と言うと、「うるさいなあー」と言っただけで自分の部屋の戸をバターンとしめ
てしまったりするのであった。

二度目の事件が、こうした中で起きた。おばあちゃんが静岡に嫁いでい
るママの妹のところに行っている間の出来事であった。

親子ガス心中未遂は、パパの頭の中に、青天の霹靂となって鳴り響いた。
幸い、発見が早く、命に別状はなかったけれど、パパの心のショック
はたとえようもないほどで、完全に打ちのめされてしまった。

うす暗い、しめ切った部屋の中に、ガス管を引いて、ヨー子ちゃんの体
をしっかりと自分の体にしばりつけて、わが子をまるでつつみ込むように
抱きしめて、青白い顔で横たわっていたママの目だけが、赤くただれて、
この数日間、いや、きつとずーっと以前から、泣いて生きて来たことを物
語っていた。

「ママ、ごめんなさい」と言っただけで泣いているパパを見つめながら、

「かわいそうなパパね」と、弱々しく口をきいたママのほほを、つつーっ
と大つぶの涙が新たに流れていった。

パパは、検見川のあのときの、死ぬも生きるもいっしょだと誓い合った
言葉を思い出して、あの塩せんべいの味を、久しぶりに思い出していた。か
たわらの、何も知らないで寝ている娘のあどけない顔をのぞき込むと、ふ
たたび胸がやけどのように熱くもえてきて、とめどもなくあふれ出る涙に
むせんでいるのであった。

「そうだ、おれの命を、このママと子供達のために、ささげよう。」

「もう、二度と、私の家族を泣かしてはいけないのだ！」と、固く誓つた
のであった。

(十四)

この悲しいことがあつてからのパパは、深く反省し、もう一度人生をや
り直すことを心に誓った。

マー君の面会や親の会には、すべてのことを犠牲にして出かけて行った。
勿論、いつもママといっしょであった。母親ばかりの親の会であったけれ
ど、パパなりに感ずることがあつて、欠かさず出席していたのであった。

七年前の当時、自閉症親の会はまだ千葉県になくて、東京の親の会とい
っしょになつていた。

千葉県からは、十四、五名ほどの会員が加入していて、いつも来る人は二、三人しかいなくて、会の話は東京を中心に行なわれ、肩身のせま
いおもいをしていた。

さつそくパパは、千葉県自閉症親の会を作ることにして、関係方面に呼
びかけたり、新聞社の支社に記事をたのみに رفتりしたりした。

会員は、一年くらいのうちに続々と集まって来た。いるわ、いるわ、こ
んなにいたかと思うほど集まって来て、何度目かの会合には出席者八十名
を数えるほどになり、会員の数は九十名を突破して百名にならんとしてい
た。

新聞社に記事を書いてもらったり、千葉テレビに引つ張り出されたりし
ているうちに、その方面でのちよっとした有名人になってしまつて、知ら
ない人から問い合わせがあったり、パパの方から話しに行った先で先生と
呼ばれて、苦笑させられたこともあった。

そして、ちよつどその頃、私達には、とても悲しい出来事があった。

あんなに私達の心のささえになつてくれていた、神様のような田舎のお
ばあちゃんが、急に亡くなったのである。

おばあちゃんは、ヨ一子ちゃんにとつても、この世でただ一人のお友達
であつた。

「おお、よしよし」のおばあちゃんの声が聞こえなくなつてからのヨ一子
ちゃんは、いつも庭に出て、遠いところへ眼をすえてじーっと立っている、
そんな日が毎日毎日続いていた。

私達はかわるがわるに、そんなヨ一子ちゃんのそばについてあげて、
「ヨ一子ちゃん、ヨ一子ちゃん」と呼んでは、お菓子を与えたり、お人形
を抱かしてあげたりして、涙ぐましい努力をしていた。

おばあちゃんが亡くなってからのママは、さみしそうで、何かパパには
気がかりで、心配の種であつた。

私達は、自閉症親の会の仕事で縁で知り合つた市立病院の院内特殊学級
の青木先生のすすめもあつて、思いきつて、ヨ一子ちゃんを病院に入院さ
せることにした。

ママは、最初反対したけれど、もしかしたら、少しでも発達するかも知
れないというパパの意見に押されて、しぶしぶ承知したのであつた。

そして、入院してまる五年を過ぎたいま、子供のためにプラスになつた
ことと、私達の心の救いも含めて、本当に良かったと思う、今日この頃な
のである。

(十五)

ヨ一子ちゃんが入院した翌年、パパの会社が倒産した。

一方、マー君の入院してる病院では、その後、何人目かの担当医師が代わった。そして倒産で打ちひしがれているパパに呼び出しがあった。

急いで出掛けて行くと、「お宅のお子さんは自閉症でなくて、重度の精薄である。ここは施設ではないから、精薄はあずかれないので、退院してほしい」と言うのであった。

いまさら五年近くも自閉症で治療して来て、治らなくて、ばかになっちゃったから、精薄のレットルを張り直して、追い出すのか、と猛烈におこつてくつてかかると、誰が何と言おうと、いまの症状は重度の精薄であるから、もうこれ以上病院においても仕方がないので、早くつれて帰れと言うのであった。

パパは、最近代わったばかりのこの若い女医さんを張り倒したい衝動にかられたが、泣く子と医者には勝てないと思い、とりあえず、千葉県の児童相談所と相談するあいだだけでも待つてくれと言って、帰つて来た。

その後、やいのやいの催促で、また行くと、今度は、病名が何であれ、管轄が違つと言うのであった。ここは東京都の管理であつて、千葉県の人には千葉県の施設や病院に入つてもらわねば、いろいろと補助、助成の面で困るし、都内にはこの病院に入れないで待つてゐる子がたくさんいるのに、他県の子をいつまでもおおくわけにはいかない、と言うのであった。

そして、細かく、たとえば、マー君の食べてるおやつは東京都のものであるなどとも言われて、いよいよこれはおしまいだなと考え、早急につれて帰ることをもう一度約束して戻つて来た。

さつそく児童相談所に顔を出すと、相談員が代わつていて、この前話してあつたことが全然通じてなくて、ここでもまた、喧嘩をする破目になつてしまつた。さすがは、こちらは児童相談所だけのことはあつて、職員の方はただ「すみません」の連発で、パパの一方的たどなり込みに終わつてしまつた。

児童相談所の職員は、施設に空気がなくて、入れられないと言つ。そして、誰か死んで出るか、二十才で家に帰るかしないと、空気が出ないのであつて、みんな、三年、五年と待たされてると言つのであつた。

パパは、頭の中が混乱して、こみあげて来る怒りを必死にこらえていた。マー君を、少しでも人間らしくしてあげるためにどうしたらいいか、迷つてもいた。本当は、家につれて帰りたいとも思つた。しかし、おばあちゃんを去年亡くして、いままた倒産して、うちひしがれている家庭にマー君を引き取つたら、ママがどんなにかかわいそうだろうかと思つと、やはり施設にお願ひした方がいいのかなあ、とも考えたりしていた。

それからしばらくして、パパがどなりあげたのがきいたのか、東京都から追い出しをせまられてなのかわからないけれど、親達が三年も待たされてるという施設への入所があつさり決定して、マー君は東京都立の病院

から、柏市の豊四季光風園に移ることが出来た。

園長先生に最重度の診断を下されて、入園を許可されたとき、正直言って、ホツとしたのであった。

入園のとき、園長先生に、きょうからおしめはいらさないから持って帰りなさいと言われ、私達は、施設と病院の違いをはっきりと思い知らされた。マー君が十一才になる今日まで、たれ流しにしていたおしめを即日取ってしまわれた先生の勇気と、そのひたむきな人間愛に、強く胸を打たれた。どんなにか、いままで気持が悪かっただろうに、と思うと、ありがたくて涙がこぼれそうになるのであった。

そして、公立の大病院の、どこもかしこも鍵だらけ、壁だらけの管理意識と、この私立の小さな施設の、どこもかしこもあけっぴろげで穴だらけの開放感のそれとを比べてみるにつけ、ああ、もつと早くこういう施設にマー君を入れてあげるべきであったと、くやまれた。

ここでは、前の都立の病院のように、あばれるからといって柱にしぼりつけられたり、鍵をかけた部屋に入れられて外から監視されることもなく、子供達は、思い思いに、先生達といっしょに暮らしていった。

園長先生は、職員の手が足りなくて、思うように子供を教育することが出来ないところぼしていたが、私達にとっては、そんなことを意に介さないほど、この施設が気に入っていた。

最初の、月に一度の面会日に出席したとき、あんなに寝てばかりいたマー君が、講堂の広い板の間をスキップしながら飛び歩いていった。

ああ、これでよかったのだ、と思うと、じーんと、また胸があつくなくて来るのであった。半年ほど、毎月の親の会に出席しているうちに、いつの間にか親の会の副会長に押され、会長さんのお子さんが退園して行き、パパはここでも、親の会の会長を引き受けることになってしまった。

そしてヨ一子ちゃんが入院している市立病院でも、自閉性重度精薄の診断が下されたのを機に、県自閉症親の会から手を引いた。

(十六)

私達夫婦は、死をのりこえて、苦難をのりこえて、十余年をともに生きて来たけれど、いま、とても心は平和である。

誰かに、「あなた方は突き抜けてしまったようですね」と言われたが、まったくその通りで、自分達でも不思議なくらい心が平和なのである。

そして、この心の平和は、またあるときは、波を打って乱れるであろうことも、よく知っている。また暗いトンネルを突き抜けて行かねばならないときが来ることも、よく知っている。が、しかし、いまはとても、さわやかなのである。

薄光会の仕事、施設の親達といっしょに始まったときから、そのさわやかさは、日を追って増して来つつある。

すり切れてしまった背広を買い替えることが出来なくても、かかどがゆがんでしまった靴を買い替えることが出来なくても、貧乏で暮らし向きがいつこうに良くなるのに、とにかく、さわやかなのである。

薄光会の事務局長を買って出たから、わが家の収入もまた、以前の半分以下になってしまった。ママといっしょに、夜の町を散歩して食事をした

り、お茶を飲んだりすることもつしまねばならなくなってしまった。

とても、たくさんの欲も、捨てる事が出来た。大きいものは事業欲から始まって、小さいものはおしゃれに、食べ物にいたるまでだ。負けおしみを言うわけではないが、財産も家もあるに越したことはないが、そんなに、とりたてて必要なものでもないと感じられる今日この頃なのである。きつと、みんな、子供達が教えてくれようとしているにちがいない、と思つのである。

そして、ありがたいことに、私の一生の仕事まで選んでくれたのである。この仕事を続けて行くことが、きつと、私達も、子供達も、いちばん幸せなのだ、彼等は、ずーっと以前から、無言のうちに叫び続けていたにちがいない。

わが子供達への愛から始まって、近頃は、施設や病院に行くと、よその子供達までとても可愛く感じられて、みんなヨー子ちゃんやマー君の兄弟のように見えてしまい、たくさんの障害児のわが子供がいつぱんに出来てしまったように感じられる。

「待ってるよ！いま、このパパが、おまえ達みんなといっしょに暮らせる家を立ててあげるからな！」

心の中で叫んでいるうちに、パパはは、またこぶしをにぎりしめているのである。

お墓参り

おばあちゃん、
久しぶりだね。

お線香、一束、みんな燃すから、
このけむりにむせんで、
ちよつとだけ、
眼をさませないかい！

ねえー、おばあちゃん、
千葉から長野まで、
遠く、はるばる、
おれ達夫婦で、やっと来たんだよ。
ヨ一子も、マー君も、
元気で、楽しく、やってるよ。

おれ達、ちよつと、お願いがあるんだ。
二人の子の成人施設、
間違いない建つよう、
お墓の中で、
見てくれないかい！

ほら、
昔のように、
あの子達に、語りかけたように、
おー、よし、よしと
言ってくれないかい！

おばあちゃん！
おばあちゃん！

あのやさしい笑顔が、
いまは、この重い石の下で、
眠っている。

第三部

銀色のはるかな道

あけぼの

(一)

昭和五十一年七月十五日。

柏市豊四季光風園の、創立十六周年記念日。

パパと、木村さん、進通さん、関口さんの四人の父親が中心になって、この三カ月のあいだ、毎週日曜に、一日もかかさず通って作りあげた滑り台が、ピンク色とクリーム色にぬりあげられて、ピカピカに光っていた。

三方向の、鉄骨入りの、大形の滑り台はすばらしい出来ばえで、来賓達が口々にほめてくれて、父兄達の作にしてはちょっと出来過ぎであった。出来たばかりの滑り台に、子供達がいっぱい群らがついて、私達はとてもいい気持の満足感にひたっていた。

盛大な記念行事のあと、四人は、他の親達が帰ったあと、互いに相手をねぎらうように、この三カ月間の出来事を話したりして、園の広場にたずんでいた。

三月の親の会で、子供達に滑り台をプレゼントすることが決まっていたから、このことを、三人の話に相づちを打ちながら、パパは思い出していた。

どの業者も、百万円台の見積りを出して来て、三方向はあきらめようとも考えていたところ、誰かが、自分達で作ったら、と言い出してからきょうまでの忙しかったことが、パパの心の中に情熱のようなものとなって、音をたてて燃えていたのであった。

きつと、ほかの三人も、同じ気持であったにちがいない。

四人で雑談をしているうちに、パパの心の中にしまっていた、あこがれのような計画を、どうしてもこの記念すべき日に、打ちあけなければという衝動にかられ、みんな、精薄の成人施設を作らないか、と持ちかけたのであった。

四人が、きょうまで約三カ月にわたってやりとげたことと比べたら、とてつもない大事業なのに、四人の顔がいつせいかがかやいたのは、きつと、やれば出来るのだという自信みたいなものが、互いの胸の中にはつきりと残っていたのかも知れなかった。いや、もつとはげしく燃えようとしていたものを、きつと感じ合っていたのである。

「人間五十まで生き、もうあと十年か十五年しか働けないと知っていて、目の前にやりたいな」と思う仕事があるのに、一人じゃなかなか手が出せない尻ごみしていたけど、鈴木さんがいっしょなら、いいよ、やるつよ。」

木村さんがこう言うと、いつの間にか、八つの手がかさなり合い、固く固くにぎり合っていた。

何か、ふるい立つというか、武者ぶるいのようなものがして、四人はなかなか別れられず、興奮が続いていて、とうとう柏市の中心街にまで出て来てしまった。

みんなで丸井の地下のコーヒー店に入ると、また先ほどの続きが始まった。

「木村さん、以前、数年前に柏市に教員で在職していた方が、一ノ宮に作った児童施設のこと知ってる？」とパパが切り出すと、

「うん、知ってるよ。斉藤先生のことだろう。あれは、たしか六年前だったと、思うのだけど。」

「そうそう、財産のない若い青年達が、力を合わせて作った施設だって聞いたけど、いまじゃ、とつても立派になったそうだよ。」

お互いの情報交換が始まったのであった。

「私達にも、出来ませうかね」と心配そうに関口さんが横から口を出すと、「出来ると思わなければ、心配で、夜もねられないですよ」と、進通さんが言って、みんな、あらためて真剣な顔を見合わせるのであった。

施設の創設については何もわからない四人であったが、四人とも、子供が比較的大きい方で、なかでも進通さんと関口さんは今年十八才になるので、もう気が気でなくて、延長しても二十才までしか施設にいられないことをよほど心配していたらしくて、この話だけでも、いつまでも続いて終わることを知らなかった。

とりあえず、私達は、会の名前を「精薄者成人施設を作る会」と命名した。

そして、次の会う日を楽しみに、それまでに出来るだけの情報を集めることを約して、別れたのであった。

家に帰って、ちょうど具合が悪くていっしょに園に行かれなかったママに、この話をする、また興奮してしまって、なかなか寝つくことが出来ず、夜明けまで、語り合ってしまった。

(二)

翌日、施設の親の会で、パパは会長として、年長者組だけを意識的にわけて、意見を聞いてみることにした。

どうやって作るのかとか、金は、土地はどうするのかと、しごく当り前の、しかも、いちばん大事な質問が次々と飛び出し、パパが、それをみんなまでこれから考えていくのだ、と説明すると、なあーんだという顔つきに

なってしまうって、あまり気乗りがしない様子で、パパをがっかりさせてしまった。

パパは、「これから夕方帰りに、木村さんの家で会合をするから、もしその気があつたら寄ってみて下さい」と言っておいて、木村さんのうちに出向くと、さきほどの会合で何もしゃべらなかつた親が二人来ていて、真剣な顔で座っていた。初めの四人と二人を合わせて六人であるが、夫婦で出席したのもいて、十人近い人数の親達が、パパが行くのを待っていた。雑談がひとしきり続いたあと、頃合をみて、会議を始めた。

話合いは、最初から熱気をおびていた。

「滑り台を作るようなわけにいかないぞ」と、誰かが言つと、「それではこの不安な気持をいっただいどうするのだ」と、言うものもいて、みんな大変な気合の入れようであつた。

パパは、みんなの気持をまとめるつもりもあつて、前から心のすみにあつた「もう借家はまっぴらだ」と、意見をのべた。

初め、みんなは、その意味がよくわからないようであつたので、ゆっくりと、まるで自分にも言い聞かせるようなつもりで、次のような話を始めた。

「私は、自分の子供のために、自分で、運営に参加できる施設がほしいのです。

いままでの施設は、どこかの財産家や財団が金を出して、その息のかかつた人が運営したり、または、国や県などの公的機関が設置して、管理をしたりしております。勿論、なかには、文無しでも、社会福祉にとても情熱のある方が一生懸命基金を集めて、やっと施設を建てて、管理運営をしている施設もたくさんあります。

しかしいずれにしても、親と子の関係からみた場合、他人のものであります。親が建てて、親が運営している施設は、あまりないと聞いています。それが良いとか悪いとか言うことは別といたしまして、とにかく借家はいやなのです。

借家は、大家さんの承諾なしには改造することが出来ません。大家さんの承諾なしには庭に穴を掘って、花を一本植えることさえ出来ないのです。大家さんの意にそわない人は、追い出されることさえあります。大家さんは借家人を選び、借家人は借家がこんなに足りなくては、選ぶことなどほとんどもなく、入れてもらつたら最後、じーっと我慢の子でいなくてはならないのです。

しかも、いま私達の子供が入っている借家は、絶対的な、期限つきの借家です。二十才の期限で、どんな借家人も出て行かねばなりません。

借家人であるがために、言いたいことも言えず、年中、お世話になつてます、という気持が先に立ち、私達は、とても卑屈になつたり、遠慮して

いるのではないかと思えます。借家であるがために、大家さんにさえ文句を言われなければと、投げやりになっているところもあるのではないかと思えます。

もつと私達が考えなければならぬことは、親が借家にわが子一人を見捨ててかえりみない、という現実なのです。月に一度の面会日に、施設入所児童の親達が半分ちよっとしか現われないうことなのです。そして、毎度来る人はいつも来て、来ない人はいつも来ないということなのです。これでは、施設の先生方や管理者が、いくら子供達を、親達を救ってあげようとしても、救えるはずがありません。

来ない人達が、来てる人達より生活が貧しいとか、忙しいとかではないのです。毎月、毎度顔を出している親の中には、母子家庭で、もう一人の子供をかかえて、あしたの食糧もまともに用意出来ない親さえおります。中には御主人が病いに倒れて入院中で、自分も病気で通院している方もあります。来ない人の中には、商売を盛大にやってる裕福な人もあります。

施設が、世の人達に、子捨て場のように思われているのは、先生や管理者のせいではなく、親自身の心の中にあるのではないかと言いたいのです。私は、三年間の親の会長をつとめて来ながら、こういう出て来ない人達のため、努力もいくらかはいたしました。中には涙をうかべて、あらたまった方もおります。求めよ、されば救われん、という言葉があります。しかし、求めて来ないものまで救う力が私達にありますか？ましてや、施設の先生や管理者に、親の心の救いを求めたって無理じゃないかと思いません。

親達の心を救うものは、親達自身の集まりの中から育てあげて行く、突き抜けたような、人生に対するさとりみたいなものでなければならぬと思っております。

そして、この気持を育て得るためには、ぜひとも思い切って、わが子達の群の中に、親達みずから投げこんで行ってこそ、得られるものでないかと思えます。

私が、施設作りをやってみたくなつた動機は、いろいろあります。ひとつは、先ほど申しあげた、借家はいやだ、ということもあります。また、いつまで待ってもわが子のような重度障害者を入れてくれるような成人施設が出来ない、ということもあります。しかし、それよりももっと強い動機は、わが子のために一生懸命な親達の仲間の集まりが、私の心の支えのために、そしてわが子の生涯の幸せのために、ぜひともほしいと思つたからなのです。

精薄の子を持つ親が、いちばん心配し、悩むことは、親が死んだあとのことだと思えます。

私は、自分達が作る施設で、この自分の手で、この問題と真つ向から取

り組んでみたい、と思うのです。

この大事業は、なまはんかなことでは達成できるはずがありません。だからこそ、私は仲間がほしいのです。わが身を子供のために捨ててかえりみないほどの固い決意で結ばれた仲間が、十人、二十人と集まって、この難事業をやりとげ、守り抜いて行くなかに、子も親も、はればれと救われる日が必ず来ると信じているのです。」

パパは、ここまでしゃべると、ふーっため息をついて、黙ってしまつた。最初、ゆっくりと話し出していたはずなのに、終わって気がついたら、すごく早口で高い調子であつたらしく、のどがカラカラにかわいていた。

しゃべり終わったのに、親達は、黙っていた。誰も口をあけるものがないかつた。

すみの方で、一人、二人と、母親のすすりなく声が聞こえた。お父さん達も歯をくいしばって涙を目にいつぱいためていた。

そして、親達が、みんな同じ気持で、並々ならぬ決意でいることを、パパは感じていたのであつた。

土地探し

(一)

施設を建てるためには、土地を入手しなければならぬ。

精薄者成人施設を作る会では、さつそく、土地をどうするかで話し合いが始まつた。いや、始まつたと言つより、始まる前に行きつまつていた、と言つた方がましなのかも知れない。みんな、誰も意見をのべる者がなく、黙りこくつていた。

こんなとき、私達がいつもいまままでやって来たように、困つたことを自治体に言つて行くくせが身につけていて、「県に陳情したら」という意見がしばらくして誰かから出たが、私はわざと無視した。提案した人も、それがいかに確率が悪くて、いつの日になるかわからないことを知つていた。「ああ、誰か大地主がポーンと出してくれんだらうか」と、またほかの人が言つて、みんなは苦笑してしまつた。

私は、そんなあてにならないことを考えてはだめだ、といましめた。

誰かが力強い声で「銀行から金を借りて、買おうよ」と言つた。

私は、よしそれだ、と思つた。その気持でやれば、必ず出来ると思つた。

こうして、土地の物色が始まつたのであつた。

この日、私達は、役員三名と会計一名を決めた。滑り台のメンバー四人

が進んで引き受けることになった。そして、土地深しと、銀行借入れのことを、具体的に検討するよう申し合わせて、別れた。

柏から帰る草の中で、ママが、きびしい顔をして、「パパ、とうとう始めてしまったね」と言ったが、パパは、これから始まるドラマの幕を自分で引いた興奮に酔っていて、ママが何を考えていたのか、知るよしもなかった。

土地探しが始まった。仕事先のお客さんや建材店のおやじ達、それから友人や親類に、うちの子供達の施設を建てるのだけど、と言って、土地を探している話をする、大概の人達は、何かそこにもうけ話があるのではないかと勘違いしたりして、坪十万円の土地が一万坪あるなどと、こちらがたまげて腰を抜かしてしまうような情報を入れて来た。

そして、笑い話になってしまったが、施設というものは、一般の人達には、みんな国や県がお金を出してくれるものと思っていて、親達で銀行から金を借りて土地を買うのだと言うと、それはもぐりであるからやめたほうが良い、県や国に話しなさい、と言ってくれる人もいた。

親切はありがたいのだけれど、私達はさんさん、国や県にお願いして来たが、だめで、自分達で作ることにしたのだ、と説明すると、びっくりしているのであった。

(一一)

こうしているうちに、ある日、ママがパパに、おにぎり屋を開店したいと言いつ出した。ママは、施設作りに精を出し始めると、収入が減って食べて行けなくなるので、自分がいまやっている内職より収入の多い、本格的な仕事をしたい、と言うのであった。

パパは、この前の柏からの帰りに、ママが、「とうとう始めてしまったね」と言った意味が、やっとわかった。ママが、あのとき、何かを決意したような顔つきであったのは、このことかと思うと、とても胸があつくなくて、「ごめんな、貧乏でおまえにも苦勞かけるな」。そのかわり、店は、夜なべしながらでも、おれが作ってあげるよ」と答えていた。

ママの店、宴 は、こうして出来たのであった。土地深しをしながら、銀行に一度たずねて行ったことがあった。私の話を聞いた行員さんは、

「前例がないから、何とも返答の仕様がなないけど、親達の連帯保証の条件で、上司に話してみます」と言ってくれて、「ところで金額はどのくらいになりますか」と聞かれた。「まだ土地を物色してないのでわからない」と言う、「お金を借りに来る人が、借る金額がわからないのでは、話になりませんね」と笑われてしまった。

私としたことが、小さいながらも社長業までやった男が、何とまあぼけてしまったのだろうか、と、一人苦笑いをするのであった。それというのも、施設を作りたい一心で、順序を少しあせっていたのかも知れないと思い、「おまえは、リーダーなのだぞ、しっかりせい」と、わが心に言い聞かせたのであった。

こうしているうちに、十月の二回目の会合の日が来た。前と同じように、木村さんのうちに出向くと、おどろいたことに、うじゃうじゃと、親達が来ていた。

「やあー、どうも」「やあー、どうも」と、みんな笑顔でパパを迎えてくれて、さっそく会議が始まった。

会議では、土地を銀行から借金して購入しても、建物を建てる時にまた借金をしなければならぬので、借地を物色する案が大勢を勧めた。土地を購入するとすると、土地代金が多額になって、建物がいつまでも建たない心配があるというのであった。

みんなは、よほどせまいところがいやであるらしく、少し遠くても、広い場所を第一条件としようと、申し合わせた。そして、奥地でいいから、比較的平らな山林や、休耕地のようなものがいいのではないだろうか、意見が次から次へと出て来て、会議は、とても熱心に進行した。

会員は十一名になっていた。

(三)

土地探しは、購入するつもりが借地を探すことになり、なおさらにむずかしくなってしまった。

夜、柏の木村さんに電話をすると、柏市の米軍通信基地跡が返還されるという情報が入っていたが、いつなのかは皆目わからず、ましてやわれわれの手に届くかなどは、なおわからないとのことであった。電話の中での「鈴木さん、あせるなよ」と言う言葉が、パパのことを心配してなのか、年上の彼の経験からただ一般的な意味で言ってくれたのか、いずれにしても、ありがたかった。とにかく、おれには仲間がいるのだという、心強さがあった。

広い土地を、安く貸してくれる人はいないだろうか、人に聞くと、笑われてしまうことさえあった。

心の中で、借地計画は無理なのではないか、とも思ったりしていた。それでも、何か方法はないだろうか、ない知恵を一生懸命しぼっていた。こうしているうちに、前に話してあった売り物件の手頃な情報、確かなところから二つほど入った。

一つは鴨川市のはずれの山林で、駅から車で二十分、二千坪、二千万円、

と言ってきた。投げ売りであるとのことであったが、十人で二千万円は、一人二百万円かと思うと、少々気が重いのであった。

パパは、ひよっとして、何もほかになければ、とにかく見ておくだけでもと思い、現地へ案内してもらうことになった。そして、見たものは、ひどい窪地で、雑木の生い茂った、道もない、とんでもない場所で、とうてい施設を建てられるような代物でなく、がっかりして帰ってきた。

後日、もう一つの場所も見せてもらったが、こちらの力も、似たりよったりで、今度は、山の中腹の急斜面で、こんなところにもし施設を建てたら、うちの子供らはみんな、山の下の方へずり落ちてしまっただけ、いつも寝ころがっていなければならぬと思ったりして、一人で苦笑いをしながら帰ってきた。

パパは、少し疲れていた。あせっていたのかも知れない。毎日の仕事の合間をやりくりしての土地探しは、体にもこたえていた。

そして、こんなときに、ヨー子ちゃんが病院から帰って来ることは、パパにとつて、何よりも休息のプレゼントであった。彼女と二人で出かけて行った広い野原の一日は、心を落ちつかせ、元気を取り戻すのにとつても役にたった。

光風園で、暮れのクリスマス行事があつて、パパは年末の最後の親の会行事をあわただしく済ませ、木村さんと関口さんと三人で、豊四季の駅の方へ向かつて歩いていた。道の両側に、広い雑草地や林があつた。立ち止まって、「ゴミ捨てるべからず」という立て札をじつと見ているパパの肩越しに、木村さんが同じ気持で、林の中をみつめていた。

「こんなに広い場所があるのになあ」と、独り言をもらすと、関口さんが、「休耕地をさがしてみましようよ、必ずありますよ」と、元気づけてくれて、三人でまた歩き出した。

年末、最後の成人施設を作る会は、沈痛な、重い雰囲気の中で終始した。とにかく、来年一月から、一族一百万円以上の積立を始めることにした。

会の名を「薄光会」と命名することにした。

そして初代会長を木村さんにやってもらうことにした。すべてのことが、パパの提案通り全員賛成で決まってくれたが、土地が決まらないことが、会員全員の気持をもう一つ引き立てることが出来ず、心が重くなるのであった。

薄光会誕生

新しい年があけて、施設や病院から長期帰省でうちに帰って来た子供達が、

それぞれの施設に帰って行ったあと、仕事もなく、傷心の状態にあったパパのところへ、親類のSからの電話が鳴った。

内容は、山の中でよかつたら、広い場所で、荒野であるけど、貸してあげてもよいという話であった。先方は、大喜の七十才になるおばあちゃん地主で、十二町歩もあるので、好きな場所で、好きな広さで使えるとのこと、借地料は、体の弱い娘さんの生活費になればとのこと、願ってもない話であった。

その場所は、パパも一度竹を取りに行ったことがあって、あらためて話が出てみると、なるほど、あそこなら道路もあるし、たしかに山奥ではあるが、広い平坦地も確保できるし、あたたかくて、別天地のような雰囲気、申し分ないではないかと思ひ、なぜもつと早く気が付かなかったのだろうかとくやまれた。

うれしくてたまらず、かたつばしから会員に電話をし、互いに喜びあった。大喜の話は、宙を飛ぶような早さで会員に知れ渡った。

ヨ一子ちゃんの入院している病院の方からも、精薄の子の親達が会に参加することになり、会員は十六名になった。

役員達が大急ぎで木村さんのうちに集まることになり、打ち合わせをした結果、緊急総会をひらいて、心を新たに薄光会の発会式をすることに決まった。

パパは、仕事が手につかないほど総会の準備に追われていた。県の社会部障害福祉課に向いた。新聞社にも出向いた。嘆願書の原稿も書いた。会場を予約したり、嘆願書の印刷をたのみに行ったり、大車輪のように自分が回転して行く充実感を味わっていた。

第一番目の寄付が申し出られた。それは、印刷をたのみに行つた先の社長であった。パパの書いた原稿を読むなり、「これ、ただでやらせていただきますよ」と言ってくれた。

とても、ありがたかった。

これからのすべてのことがうまく行くような気持になり、これまでの五カ月間の土地探しの苦勞など、いっぺんに吹き飛んでしまっていた。

昭和五十二年二月十四日。

県教育会館の小会議室で、社会福祉法人薄光会設立準備会の発会式が行なわれた。

十六名全員が出席して、いよいよという気持からか、少し興奮気味に、会議が進行した。

嘆願書用紙が配られ、きょうから、目標五万人の署名運動を始めることが決められた。

閉会后、みんないっしょに、県社会部にあいさつに出向いた。前もつて

話してあったので、課長始め平井主査が、私達をあたたかく迎えてくれた。とくに平井氏は「みなさん、がんばって下さい。私達はあなた方をあたたかく見守って、育ててあげるつもりです」と言っておき、役員達はうれしくて、もう施設が出来てしまったような気分になっていた。

家に帰ると、千葉日報で見たといつて、何人かの方から問い合わせや激励の電話があり、いよいよという決意がまた新たにわいてくるのであった。

夢、消えて流れる

(一)

その後、親類のSのところへ顔をだし、大多喜の地主のNさんも、良いことをしてあげられて娘に対する心残りがなくなると、とても喜んでくれていると聞いて帰ったのであったが、Sのうちの小学生の子供が、パパに「おじさん、大多喜の田舎に変なものを建てないでね」と言うので、この子は何を言っているのだろうかと思いましたが、別に気にしないでいた。パパは、早く役員達にも現場を見せ、地主にも前に竹を取りに行ったときに一度面識があったが、あらためてあいさつにうかがわなければと思いついて、Sに連絡や同行をたのんで、現地に行く日を決めた。

役員達をつれて、あす現地へといつ前の晩、Sから急に電話があり、「あすの件、中止してくれないか」と言ってきたので、びっくりして、私がどうしたのかと問いただすと、「地主のおばあちゃんから、提供中止の申入れがあった」というのである。

寝耳に水の、大シヨックであった。わずか一月半の糠喜びであった。すっかりあわててしまったパパは、Sのところへ飛んで行った。

たのむから、地主に会わせてくれ、話だけでも、役員達といっしょにさせてくれ、と言って頭を下げたが、どうしてもだめだと言ったのであった。そればかりか、大多喜のNさんは、年を取っているので、おまえ達のような必死の顔を見たら病気になるてしまう、とも言い、しまいには、おまえ達の子供がばかで、どうしようもないことなど、おれ達には何の関係もないのだから、いいかげんに引こめ、とも言われてしまったのであった。

夜道を帰りながら、くやしくてたまらなかつたが、それでも、あす、役員達が出て来たら、もう一度頭を下げに行ってみようと思つて、激情を懸命に押さえていた。

一睡も出来ない夜を過ごした翌朝、千葉まで出て来てくれた木村さんと関口さんに、かいつまんでわけを話し、Sのうちの三人でもう一度たずねた。

Sは、私達を庭先に立たせておいて、ものすごい剣幕でおこり、大多喜

のあのきれいな野原に、ごみのようなばか達をおっぱなされてはたまつたものではない、と地元でも言っているのです。とにかく、あきらめて引っ込んでくれと言うのであった。

いくらたのんでも、現地に説明に行くだけでも認めてくれと頭を下げて、聞きいれようとしないので、木村さんも関口さんも、パパの肩を抱くようにして、引きあげようと言った。

あまりのくやしさに、頭のしんがしびれて、めまいをおぼえていた。

おれの親類までが、おれのかわいい子供達をごみのようにしか考えていなかった、と思うと、腹の底からにえくりかえってくる。怒りと、悲しみが、いつぺんに吹き出してくる。

涙がとめどもなくあふれていた。

パパは、木村さんと関口さんにささえられて、わが家に帰った。

もう、親類なんかいないのだ、と思った。

そして、おれには新しい親類が十六世帯も出来たではないか、と思ひ直しながら、こみあげてくるものを懸命に静めようとしていた。

(一一)

私達三人は、地主のおばあちゃんの親類達、それも年老いた母と体の具合の悪い娘さんを二人残して都会に出て暮らしている兄弟達が、みんなで結束して反対にまわっていたことなど、つゆ知らず、Sの言う地元の反対説を真に受けて、おばあちゃんには悪いけど、これはひとつ、地元の人達の説得を試みるべきで、それでもだめなら、あきらめようとの考えであった。

大多喜の村にあらためて足を運んだ私達は、たずね歩きながら、村の人に聞くと、どうも賛成とか反対とかの意見を聞かせられるより先に、「さあ、わかりません」とか、「おらには関係ない」と言われ、どうも反対は地元に関係ないような雰囲気であった。しかも、予定地が村の集落とは相当はなれていて、国道からの進入路を取り付ければまったく影響ないではないかとの意見も聞かれたのであった。

私達は、方針を変えることにした。

説得に歩いてみたことで、反対しているのは親類達と直感した。パパは、これ以上予定地にこだわるのをやめて、せつかく嘆願書も作ったことだから、大多喜の町役場に交渉して、ほかの場所を提供してもらおうなり、町有地を払い下げてもらうなりしてみようではないか、と二人の仲間に話すと、木村さんも関口さんも賛成してくれて、日をあらためて出直すことにしたのであった。

大多喜行きは、その後、何回が続いたが、町役場の返答ははかばかしく

なかった。

何度目かに行ったとき、担当の課長が代わっていて、はっきりした言葉をもらうことが出来たが、返事はノーであった。

先年、県のコロニー予定地であった場所は保安林のためだ。そういう用向きでは提供者を探すことは無理だ。ゴルフ場の話があつて、いまでもその話が進められているので、おそらくあなたの方のような話は進めにくいのではないだろうか。そう言われたのであつた。

毎度通いなれた大喜からの帰りの途中、もうここはだめだという想いが、三人の胸の中で感じられていた。

三人で、読売新聞に書かれていたベーチエツト病の人達の、土地の苦勞話をしていた。あまりかたくなになるのはよそう、とも話し合っていた。さて、振り出しにもどつてしまった土地のことを、どうしたものかと考えると、暗やみの奈落に突き落とされたような氣持で、新たな怒りと苦惱が込みあげて来るのであつた。

この二カ月間、私達三人は、ほかの会員達に、このことをはっきり言わないで、地元の説得に当たっているとしか教えていなかった。土地があつたと喜んでいたみんなに、あれはだめになつたよ、と、どうして打ちあけたらいいのだからかと考えると、心は千々にみだれてしまつたのであつた。

春四月のうす黒い雨雲が風に流されていた。私達の大切な夢がちぎれて、流されているようにも見えた。

きつと、会員達にこのことを話したら、脱会者も出るのではないだろうかと心配もした。

もっと心配なのは、三人の指導者を信用してくれなくなるのではないだろうか、とも考えて、木村さんにこのことを話すと、「大丈夫だよ、話せば、うちの会員はきつとわかつてくれるよ。かえつて、脱会者ももし出たら、それこそ鈴木さんの思っている固い決意の仲間達だけが残る。試練にもなるじゃないか。あせるなよ。あせつてはだめだよ」こう言つて励してくれた。

捨てる神あらず、ひろう神も

(一)

土地のことで悩んでいるうちに、パパは、おそろしいほどやせて憔悴しきつていた。仕事にも熱が入らず、力がなく、精氣も失つていた。胃が痛くて、食事をするのも億劫で、ママに心配をかけていた。

「パパ、胃が悪いのなら、早く病院に行つて来なさいよ」と、何度も言わ

れて、仕方なしに病院に行くのと、一度目に行ったときのレントゲン検査で、小さな潰瘍が発見されて、二、三週間の休養を申し渡されてしまった。

木村さんに慰められて、一度は気分がいくらか晴れたが、それでも気力が出ず、どうにも重苦しい気持ちに滅入ってしまうのであった。

光風園親の会のほうは、四月から新しい人に会長を引き継いでいたのであったが、その新しい会長から、園の行事のことで相談の電話があったとき、パパは体の具合が悪いことをうっかり話してしまった。

次々と仲間達から見舞の電話が入った。とてもうれしかった。本当のことを早く打ちあけなければと思った。いつまでもたまることは出来ないとも思った。そして、その反対に、どうしてこの私に彼等のよるこびを取り上げることが出来るようかと思うと、またきりきりと胸が痛むのであった。

窓をあけて、隣の家の壁を見ながら、考えこむ日が続いていた。そんなある日、ママから「パパ、家において悩んでいるより、町に出て散歩でもして来なさいよ」と言われて、重い腰をしぶしぶあげて、一人で町に出て行った。

久しぶりに町へ出て来たパパだが、どこも行くあてがなかった。ただ、あてもなくぶらぶら歩いていたら、千葉日報の前にさしかかった。

「そうだ。鹿野さんに相談してみよう」と思った。

新聞社の階段を駆け登るようにして、三階の社会部に顔を出した。鹿野さんは、私達の発会のことを書いてくれた、担当の記者であった。

私の話を一部始終聞いた彼は、「よし、書きましよう。まかしておきなさい。この広い世の中には、まだまだあなた方のような気の毒な人のために、ひとはだぬいでくれる人がいっぱいいるはずですよ。捨てる神あらば、ひろう神もありますよ。心配しないで、あすの朝刊を待って下さいよ」と言って、私を元気づけてくれた。

(11)

五月二日。

千葉日報の第三面のトップに、七段抜きで、薄光会が土地のことで行きづまっていることが報道された。

朝から、私達の家の電話がリンリンと鳴りつづけて、次から次へと問い合わせや提供者が名乗り出た。

パパは、連絡と打ち合わせに飛びまわり、現金なもので、あんなに胸やけがして、具合が悪かった胃のことや、悩んでいたすべてのことをすっかり忘れてしまっていた。

問い合わせをしてきた大部分の人は、売れない調整地区の土地などを、この際、処分したいと考えている人達であった。

それでも、電話の向こうから伝わってくる知らない人達の好意を感じ、まるで、暗いトンネルから、いままさに飛び出して来たような、うれしさともるさに、思いつきはずんでいたのであった。

三日間で、十八人の問い合わせの方々に、広さや条件などの話をし、七人の方々と会うことが出来た。

そして、このなかのお二人は、土地をどうこうするといふのでなく、施設を建てるための土地の本当の提供者であった。しかも、広さも十分であった。

パパが、本来なら、お金を払って取得したいのだけど、借地の条件しか提示出来ないことを話すと、お二人は、それぞれ、そんなことに気にしていないと言われ、パパは胸を打たれた。

富津市の石井さんとは、県障害福祉課のS主事に立ち会っていただいております。

そしてもう一人のUさんとは、千葉日報の鹿野さんの引き合わせで、佐倉市のお宅をたずねてお会いすることが出来たのであった。

銀色のはるかな道

やっと、本当の本物を獲得することが出来た。

ここまで来ただけでも、はるかな道であった。そしてこれから先へ進む道は、もっと遠い道であるかも知れないのに、この心の中の、うちの方からわきあがる喜びは、いったい何であるのか？

「やったぞおー」と、子供のようにはしゃぎながら、ママの手をにぎっていた。

「パパ、よかつたね。本当によかつたね。」

こう言いながら、ママは泣いていた。この一年近い月日を、土地のことで、まるで雑草が踏まれるがごとく、倒れては立ち直り、倒れては立ち直って来たパパが、とても大きくて、立派に見える、と言ってくれた。

木村さんに報告の電話を入れると、電話機の向こうで、「ありがとっ、本当に御苦労様だったね」と言う声がふるえていて、互いの胸の中のある喜びが、受話器を通して通い合っただけであった。

「ああ、きょうから、ぐっすり眠れるね」と言って、私達は、いつまでもいつまでも、喜び合った。

二カ所の候補地が出てからの薄光会は、まるでブルドーザーのようにたくましく動きだした。

以下は、昭和五十二年五月からこの原稿が書き上がった十月末までの会の動きを、月別に日記ふう簡単にまとめたものである。

〔五月〕

五月二日。千葉日報紙上に当会の土地の問題が大々的に取りあげられ、提供者が続々と現われる。

借地の条件で、鈴木役員が候補地を二カ所に選定し、提供者の方々と打ち合わせに入る。鈴木役員が引き続き候補地に対する施設建設のための諸条件の調査と、地元の意志調査に入る。

佐倉市、富津市、両市とも施設建設に対しては好意的であることがわかり、役員一同安心する。

五月二十九日。総会をかねて、現地視察会を開催する。会員十九名となり、大いに熱気があがる。五月末現在、嘆願書署名者六八 名。

〔六月〕

六月五日。第三回緊急総会を開催し、第一候補地として佐倉市のU氏提供地を選ぶ。地元工作と調査に引続き鈴木役員が当たることが決められ、さつそく仕事にかかる。

鈴木役員が、市民生部長、社会福祉協議会会長、地元市議会議員諸氏と手をつなく親の会会長および役員にそれぞれ面会し、協力を依頼して歩く。

六月十七日。会長始め役員六名全員が佐倉市役所をおとずれ、民生部長に面会する。

木村会長が朝日新聞に連絡をして、六月十九日朝刊千葉版に、当会のことと報道され、募金者が続々と名乗り出る。募金申込者の中には、ピアノ一台寄付を申し出られた方もいる。

鈴木役員の現地調査と地元協力体制についての報告ため、役員会を開催する。最終的問題は、下水の問題のみであることが判明し、下水ルートについて再度調査をし、会長が下水工事費の検討調査をすることになる。

〔七月〕

両候補地の下水設置上の諸問題の調査を終了し、総会を開く。佐倉市候補地は、下水を約一・五キロほどより勾配で設置せねばならず、その他の下水プールおよびポンプ設置三カ所も含め、一億四千万円の費用が下水のみにかかることが判明し、全員一致で否決され、富津市の第二候補地に乗り換えることを申し合わせる。

九月一日より鈴木役員を薄光会事務局長として正式に任命することが決まり、事務所を開設し、常時事務局に出所させることになる。

鈴木役員は、身辺の仕事上の問題を早急に整理し、正式に事務局長として就任することを約束する。

事務所経費は、会員達が毎月の蒲光会積立金一家族一万元のほかに出せるだけ出し合って援助することを申し合わせる。
嘆願書署名者一万人を突破する。

〔八月〕

八月五日、役員一同で、第一候補地であった佐倉市を訪問し、地主U氏、市民生部、市社会福祉協議会、市議会議員宅を回り、いままでの協力に対し感謝の意を表し、撤退のやむなき事情を説明し了承していただく。

同日午後から県社会部を訪問、富津市に建設予定地を変更す事情を説明し、了承していただく。

翌日より、第二候補地富津市豊岡の土地提供者との交渉が始まる。

五月に仲介の労をとって下さった石井さんに鈴木役員が面接し、細部日程を打ち合わせて、八月二十三日、役員一同があらためて現地を訪問する。

千葉から、内湾国道十六号線を下り、木更津から続いて百二十七号線をさ下ると、上総湊という町に出る。ここは富津市の市役所所在地でもあり、国鉄上総湊駅がある。そしてここから左に折れて県道湊 鴨川線に入って約二十分車を走らすと、静かな山々にかこまれた山村、そこが、私達の最後の施設候補地なのである。

石井さんの好意ある配慮で、関係者のお待ちをいただき、さっそく具体的な話合いに入り、薄光会の意図するところを快く理解して下さり、土地提供に関しては、石井さんの父親である石井和巳氏、隣家の石井武彦氏、両氏の所有地六千三百平方メートルを借地することとなり、日を改めて契約調印するところまで話がすすめられた。

〔九月〕

九月一日、予定通り事務局を開設する。

十一日、役員一同、あらためて現地に向向し、土地賃貸借についての協定書に調印する。

八月後半よりこの間、石井氏は地元の方々との同意、書類上の準備、地元区長を始めとする有志諸氏から市議会議員、県議会議員にいたるまでの連絡と準備万端に奔走し、夜を日についての書類作成、当会の事務局との打ち合わせ等に尽力して下さる。本当にありがたいことである。

地元石井氏宅で協定書調印のあと、地元説明会を石井氏の準備でさせていただく。即日、地区住民の施設設置についての同意書を手渡される。

すでに同意書まで準備しておいて下さった石井氏に、どんなに頭を下げても、感謝の気持を表わしつくせるものではない。

地元同意書の重みは、施設建設のすべてと言っても過言ではないことを、私達はいちばんよく知っているのである。

翌十二日より、かねて準備していた業者に測量を開始させ、基本計画の作成に入る一方、認可申請の書類の作成を始める。

地元の市議始め県議、市助役、民生部長、福祉事務所長諸氏との面会が終わり、それぞれの方々からあたたかい言葉をいただく。

〔十月〕

十月二日。総会を開く。基本計画(設計計画と資金計画)を事務局より総会に提出し、承認される。

引き続き、県社会部に計画を報告し、資金計画その他についていくらかの手直しを指摘され、現在これに全力を傾注している。

法人の認可申請は五十三年度中に行なう予定でいる。

*

私達の通って来た道をふり返ってみると、苦勞したとはいえ、諸先輩達が社会福祉の道をこころざして法人や財団の設立のために死にもの狂いでやって来た昔の話を聞きながら比較してみるにつけ、そんなに大変なことではなかったような気がする。

それは、時代も違うけれども、それよりも、親達が立ちあがったことによる恩恵を、いろいろな面で受けたからではないかと思う。

パパは、薄光会の役員として、事務局長として、この約一年半のあいだに、名刺ホルダーがいっぱいになるほどの人達に会い、そして話をして来た。

どこへ行っても、人びとは、私達に同情を寄せ、話すうちに共感を呼び、力強く私達の肩をたたいてくれた。「がんばって下さい。陰ながら応援します」と言ってくれるのである。

何でも、「お願いします」の、かけ声ばかりの社会福祉の流れの中で、自分達での、この一声が、次々と会う人びとの胸を打ち、感動を呼んでいるのではないかと思う。

人びとは、自分達で立ちあがって土地を探し、積立基金を集めながら借金をしてでもと頑張ってがんばって来た私達の手を、強く強くにぎって、涙さえうかべてくれるのである。

そして、私達は、たくさんの見知らぬ人達から助けていただいた。

大切な土地をただ同然のように提供すると申し出て下さった佐倉のUさんや富津の石井さんを始めとして、数えきれないほどの人達に、恩を感じている。

足に血豆まで作って嘆願書の署名を集めてくださるＴさん。

大切な大切な想い出がこめられたピアノを、「施設が出来たら、かわいそうな子供達に明るい歌声を聞かせてやって下さい」と寄付して下さいましたＴさん。

「おじさん、遊びに行くから、ヨ一子ちゃんのお富津のおうちを早く建ててあげて！」と言って、一日五十円のお小遣いを二カ月もためておいて行った近所の坊や。……

「ありがとう、ほんとうにありがとう」と、祈るような気持で過ごす、今日この頃なのである。

このかけがえない、心のふれ合いを教えていただけの仕事をやつて来ながら、パパは、新たな人生を発見したような気持である。世の見知らぬ人達のあたたかいまなざしと、素晴らしい人生の喜びと、人の情を、本当の愛を、そして、私達の生きて行くこれからの道までも、教えてくれたのは、重度精薄の、無言の我が子達だったのだ、と思うと、あついあつい感謝の涙がまたあふれてくる。

「ありがとう！ほんとうに、わが子達よ、ありがとう！」

先輩達が、いばらのはるかな道を歩いて行つたとすれば、私達の行く道は、わが子に手を引かれて進む、銀色にかがやく、はるかな道なのかも知れない。

この道は、決して最後まで、金色にさんぜんとかがやくことはないだろうが、私達は、わが子といっしょに、いぶし銀のようににぶく光る重い愛の道を、銀色のはるかな道を、死ぬまで真つ直ぐに歩いて行く覚悟なのである。

あとがき

社会福祉事業について何もわからないこの私が、「薄光会」の事務長を引き受けてまず思い立ったことは、この本を、書き続けていくことでありました。それは自分自身の心の整理であり、わが子達への新たな誓いのようなつもりでもありました。

毎日、見知らぬたくさんの人びとに面接し、肩をたたかれ、力づけられて帰って来ると、原稿用紙が机の上で私を待っていて、一字一字まず目を埋めて行くことが、何よりの楽しみでありました。

第一部の「パパとママの詩」は、この一、二年のうちに、仕事の合間を見て、ベニヤ板や壁紙に書いて、わが家でもう一度原稿用紙に書き直してバラバラに放置してあったものを、少し整理して、そのまま発表することにいたしました。第二部の後半の「心の旅路」から第三部の「銀色のはるかな道」全部を、今回、書き上げて、いっしょに世に出すことになりました。

昼間は薄光会の仕事、夜はこの本の原稿書きと、この数カ月の間、とても充実した日々を送ることが出来ました。

そして、その充実感の反面、私の職業は総合建設業だと笑って答えていた営繕業をやめて、何年も前から思いこがれていた、私の生きる道を、やっと歩み出してみると、心の底からわきあがってくる喜びと、新たな道ゆえの不安におののいている、毎日なのであります。

不思議なもので、子供の顔を見て、頭をひとなですると、その不安もたちまち消えてなくなり、「よし、やつたるぞ」という気持ちに変わり、心の中に、もえるようなファイブがわいて来るのです。

仲間達が毎月月末に、会の基本財産とするための積立金を銀行に積んだあと、なけなしの生活費をもう一度はたきなおして、三千元、五千元、一万円と、思い思いに寄せてくれるお金を、事務所の諸経費に充てて、その残りを私の収入の穴埋めにさせていたくださながら、日々を過ごしてみると、心は、いつも早く早く施設を建てなければと、あせるばかりなのであります。

いま、私は、約二千万円足りない資金計画書をながめながら、途方に暮れております。

国の基準通りでも、五十人収容の施設を建設開園させるための役員会での資金計画では、総事業費一億六千八百万円が計上されました。この計画は、プレイルーム百六十五平方メートルを含めた基本居住区だけなのであります。雨天体育館や作業訓練棟、職員住宅、親子・ボランティア宿泊棟など、ほしいものをみんなもりこんでいくと、予算は三倍に増えてしまうのです。

あせらず、ゆつくりと、充実させて行くつもりですが、今回のこの計画だけは、早く実行せねば、いま十八才、十九才で入所を待っている子供達の行くところがなくなりませう。路頭にまよわねばならない羽目におち入るかもしれないと考えると、バタバタと足踏みをしたいような気持ちになりませう。

総事業費一億六千八百万円の調達の方法は、国庫ならびに県の補助予定が約九千万円、社会福祉振興会からの借入予定が約五千八百万円、残り二千万円を親達がいま積み立てている基金を柱に、一般の方がたの善意にもおすがりするつもりなのであります。

当初、募金にたよらないで、なんとか自分達でと考えてまいりましたが、母子家庭二世帯を入れ、病弱療養中の親も含め、困窮世帯五世帯と、あと是一般サラリーマンがほとんどである二世帯の会員の力では、残りの二千万円を調達することはとても時間のかかる困難なことであること、加えて、振興会からの借入の条件は倍額の個人資産の担保が必要であること、ここで、おそらく会員の全資産を投入しても間に合うかどうかのギリギリのところまで追いつめられているのです。

本当は、この本を、施設が出来てから、ゆつくりとまとめてみたかったのですが、広く世の中の人びとに一日も早くこの窮状を訴えて、私達の薄光会を助けていただくこと、途中からピツチをあげて書きあげる結果になりました。背に腹はかえられない心境なのであります。

いま、私達は、登山にたとえれば、八合目まで登って来ました。近頃、私は、苦しいときは苦しいと、素直に人に言わなければならぬと思つうようにもなりました。

もう一息で、と言つところまで来た私達です。

「どうか、みなさん、薄光会を助けて下さい！」

なお、実際に筆をとったのは私ですが、この本が妻喜代子との共著以外の何ものでもないことは、読者の皆さまにもご理解いただけると思います。最後に、このようにつたない本をとりあげて下さった日本放送出版協会と、担当の入部皓次郎、斎藤良通の両氏に、お礼を申し上げて筆をおくことにいたします。

昭和五十二年十一月

鈴木 栄

社会福祉法人薄光会豊岡光生園

〒二九九・一七

千葉県富津市豊岡三三三五番地

電話 ○四三九 六八 一七一

生きよわが子たち—二人の重度心障児とともに

昭和 53 年 3 月 20 日第 1 刷発行

昭和 57 年 8 月 1 日第 7 刷発行

検印廃止

著 者 鈴木栄・鈴木喜代子

発行者 藤根井和夫

印刷三和印刷・近代美術

製本明泉堂

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41 1

郵便番号 150 振替東京 1 49701

定価 750 円

落丁本・乱丁本はお取替いたします